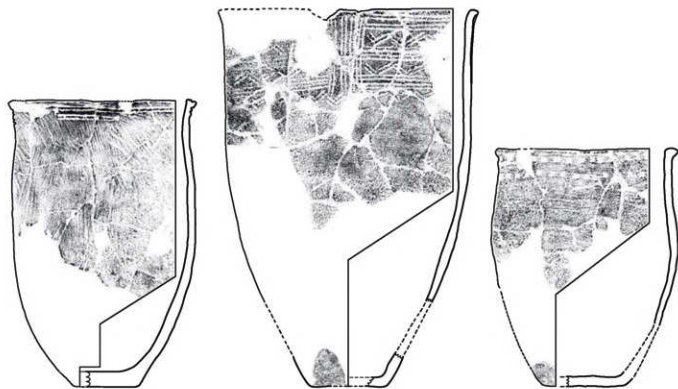


鏡水名座原 A 遺跡

— 陸上自衛隊那覇駐屯地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —



鏡水名座原 A 遺跡

二〇二一(平成三十三年)三月

2021(平成33)年3月

那覇市教育委員会

那覇市教育委員会

鏡水名座原 A 遺跡

— 陸上自衛隊那覇駐屯地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —

2011（平成23）年3月

那覇市教育委員会



口絵1 遺跡一带の空中写真(2007年撮影)赤が遺跡位置

(S=1:10,000) [左が北]



口絵2 遺跡の概況 赤が遺跡位置



口絵3 遺構及び遺物出土状況



口絵4 土器

1 : 第51図 第45図 第59図

2 : 第52図 第46図 第60図



口絵5 土器

1 : 第44図1・2

2 : 第44図4・5・6・8 第50図14・15・19・20

第56図28・32 第57図38 第58図41・43・42

第63図46・51 第64図55・56



1

(S=1/4)



2

(S=1/4)



3

(S=1/4)



4

(S=1/4)



5

(S=1/2)



6

(原寸)

口絵 6 石器

1 : 第 69 図 1・3 第 70 図 7 第 71 図 15

2 : 第 72 図 16・18 第 73 図 19・21 第 74 図 22 第 75 図 26

3 : 第 75 図 27・30

4 : 第 76 図 31・32

5 : 第 77 図

6 : 第 78 図

序

本報告書は、陸上自衛隊那覇駐屯地での庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財「鏡水名座原A遺跡」の緊急発掘調査の成果を収録したものです。

今回の調査では、縄文時代後期（約3500年～3000年前）に相当する集落跡に関する多くの成果を得ることができました。那覇市の先史時代における人々の様子を知らず掛かりの一つとなった事はとても喜ばしい事です。

沖縄戦で多くの人命とともに生活のほとんどが失われた那覇市において、終戦直後の米軍による施設工事や戦後復興に伴う土木工事、宅地造成、採石工事等により多くの遺跡が消失しました。近年では開発を行う際には埋蔵文化財の確認とその後の協議が必要であることが周知され、市民の皆様のご理解のもと文化財保護法に則した手続が行われるようになりました。

埋蔵文化財発掘調査はどのような目的であれ調査対象の遺跡の現状を損なうものです。発掘調査報告書は現状保存できなかつた遺跡の内容を示す唯一の記録刊行物となります。この文化財調査報告書が市民の皆様はもとより多くの方々に活用されることを切望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理にあたり、ご指導・ご助言を賜りました諸先生方、並びに事業の実施にあたりご協力を賜りました関係各位の皆様深く感謝申し上げます。

平成23年3月

那覇市教育委員会

教育長 城間 幹子

例 言

- 1 本報告書は、平成20年度に実施した「鏡水名座原A遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。発掘調査は平成20（2008）年8月29日から平成21（2009）年2月27日にかけて実施された。
- 2 本発掘調査は陸上自衛隊那覇駐屯地での庁舎建設工事に伴うもので、沖縄防衛局からの委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査は、那覇市教育委員会の管理・指導のもと、調査現場での発掘・測量・写真撮影等の発掘調査作業に伴う業務を国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）に委託し、発掘調査業務の補助を受けた。
- 4 調査地での野外調査を含めた自然科学分析をバリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。その分析結果については、本報告書第Ⅷ章に掲載している。
- 5 今回の発掘調査において現地にて金武正紀氏（那覇市文化財審議員）よりご指導・ご教示賜った。また、得られた遺物のうち土器の鑑定に関しては伊藤慎二氏（國學院大學）、石器及び石材資料の石質鑑定に関しては神谷厚昭氏（金城町石畳地質研究所）よりご指導・ご教示賜った。感謝申し上げる。
- 6 口絵1の空中写真と第2図の那覇市全図及び第3図の那覇市大字鏡水周辺の地図は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
- 7 口絵2-1は国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）より提供を受けた。
- 8 第4図は編集 那覇市企画文化振興課『那覇市史 通史篇 第1巻 前近代史』昭和60年8月の25頁を拡大加筆・トレースして作図したものである。
- 9 第5図は『ペリー艦隊日本遠征記vol. I』p166次「竹藪村から見た那覇」である。株式会社オフィス宮崎より掲載許可を頂いた。
- 10 第6図の「遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図」は『旧小祿の歴史・民俗地図』及び『旧那覇の歴史・民俗地図』（那覇市史編集室 1978年）の一部に加筆・修整したものである。
- 11 第7図は米軍によって1947・1948年に撮影された沖縄本島の航空写真をもとに1949年に作成された地図（縮尺4,800分の1）を縮小・加工し、各遺跡の位置を記入した。

- 12 第25図は伊藤慎二2000『琉球縄文文化の基礎的研究』未完成考古学叢書② 株式会社ミュージーより「琉球縄文土器の文様帯構成」の一部に加筆したものである。「琉球縄文土器前期の編年細別様式図」および「琉球縄文土器編年表（前Ⅰ期～前Ⅴ期）」もあわせて掲載を許可していただいた。伊藤慎二氏には記して謝意を表する。
- 13 本発掘調査で検出した各遺構及び壁面での土層の色調に関しては、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務所監修）に準拠し、表記した。ただし、試掘調査では、これを用いていない。また、土器を中心とする遺物の色調表記に関しても、『新版標準土色帖』を主に使用している。
- 14 ページを構成する上で、写真と実測図の向きを合わせることを重視したため、方位は統一されていない。
- 15 実測図及び図版のスケールはページごとに違う。
- 16 本報告書の編集は、北條真子・伊波かおり・阿部直子が行った。その際、島弘・當銘由嗣の助言・協力があつた。記して感謝申し上げる。執筆は、下記のとおりである。
- 北條 真子 第Ⅰ～Ⅵ章、第Ⅶ章3～6、第Ⅸ章
 伊波 かおり 第Ⅶ章1・5、第Ⅸ章
 當銘 由嗣 第Ⅶ章2
 パリノ・サーヴェイ株式会社 第Ⅶ章
- 17 おもに調査報告書の刊行を目的とした資料整理業務は、下記のメンバーで行った。
- <平成21年度>
 阿部 直子 伊波 かおり 木下 秋海 金城 礼子 平良 美由紀
 宮城 みさ子 親泊 育子 仲宗根 美奈子
- <平成22年度>
 阿部 直子 伊波 かおり 仲井眞 美佐枝 平良 明子 平良 美由紀
 宮城 みさ子 富里 歩美 領家 範夫
- 18 出土遺物の写真撮影及び図版データの編集作業は、平良明子・阿部直子・富里歩美が行った。
- 19 出土遺物は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

挿図・挿表・図版 目次

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 調査体制	3
第 III 章 遺跡の位置と環境	6
第 IV 章 調査経過	10
第 V 章 層序	13
第 VI 章 遺構	19
第 VII 章 遺物	36
1 土器	36
2 石器	106
3 骨製品	144
4 貝製品	145
5 その他（中国産・本土産・沖縄産・近代）	146
6 自然遺物	157
獣・魚骨	157
貝類	158
第 VIII 章 自然科学分析	160
第 IX 章 まとめ	170
報告書抄録	176

挿 図 目 次

第1図	那覇市の位置	4	第31図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (4)	44
第2図	遺跡所在地及び那覇市内の高宮編年 前期・後期の遺跡	5	第32図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (5)	44
第3図	遺跡所在地と周辺遺跡	6	第33図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (6)	44
第4図	那覇市の古海岸線	8	第34図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (7)	44
第5図	「竹藪村から見た那覇」	8	第35図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (8)	45
第6図	遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図	9	第36図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (9)	45
第7図	遺跡所在地周辺の 米軍作成地形図	9	第37図	第Ⅱ群	点刻線文系土器群 (10)	45
第8図	調査区位置図及びグリッド設定図	10	第38図	第Ⅲ群	肥厚口縁系土器群 (1)	45
第9図	調査区中央のみに存在した、 米軍利用以前に確認できる 北へ延びる道路?跡	16	第39図	第Ⅲ群	肥厚口縁系土器群 (2)	46
第10図	壁面図	17	第40図	第Ⅲ群	肥厚口縁系土器群 (3)	46
第11図	遺構検出状況	19	第41図	第Ⅳ群	無文尖底系土器群 (1)	46
第12図	ニービ集中箇所検出状況	21	第42図	第Ⅴ群	くびれ平底系土器群 (1)	46
第13図	SI 1平面図・断面図・遺物分布図	22	第43図	遺構 SI 4及びSK 3土器出土状況	49	
第14図	SI 2平面図・断面図・遺物分布図	24	第44図	第Ⅰ群土器及び第Ⅱ群土器 (1)	64	
第15図	SK 3・SI 4平面図・遺物分布図	26	第45図	第Ⅱ群土器 (2)	66	
第16図	SI 5平面図・断面図・遺物分布図	28	第46図	第Ⅱ群土器 (2)	67	
第17図	層位横転箇所	29	第47図	第45図9・10 出土状況	69	
第18図	SX 1平面図・断面図	30	第48図	第45図9 取上状況	69	
第19図	SX 1遺物分布図	31	第49図	第45図9・10 接合状況	69	
第20図	SI 3平面図・断面図・遺物分布図	32	第50図	第Ⅱ群土器 (3)	72	
第21図	SK 1平面図・断面図・遺物分布図	33	第51図	第Ⅱ群土器 (4)	74	
第22図	SK 4平面図・断面図	34	第52図	第Ⅱ群土器 (4)	75	
第23図	屋外炉平面図	35	第53図	第51図21 出土状況	77	
第24図	SX 2平面図	35	第54図	第51図21 接合状況	77	
第25図	琉球縄文土器の文様帯構成	39	第55図	第Ⅱ群土器 (5)	80	
第26図	土器分類図	40	第56図	第Ⅱ群土器 (6)	82	
第27図	第Ⅰ群 籠目文系土器群 (1)	43	第57図	第Ⅱ群土器 (7)	84	
第28図	第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (1)	43	第58図	第Ⅱ群土器 (8)	86	
第29図	第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (2)	43	第59図	第Ⅱ群土器 (9)	88	
第30図	第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (3)	43	第60図	第Ⅱ群土器 (9)	89	
			第61図	第59図44・45 出土状況	91	
			第62図	第59図44・45 接合状況	91	
			第63図	第Ⅱ群土器 (10)	94	
			第64図	第Ⅲ群土器 (1)	96	
			第65図	第Ⅲ群土器 (2)	98	
			第66図	第Ⅲ群土器 (3)	100	
			第67図	第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器底部	102	

第68図	第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器、 第Ⅳ群土器及び第Ⅴ群土器……………	104
第69図	石斧……………	124
第70図	石斧(7・8) 敲石・磨石類(9~11) ……	126
第71図	敲石・磨石類(12) 石斧(13~15) ……	128
第72図	敲石・磨石類……………	130
第73図	敲石・磨石類……………	132
第74図	敲石・磨石類……………	134
第75図	敲石・磨石類……………	136
第76図	石皿……………	138
第77図	熱田原型石器……………	140
第78図	石鏃(37)・剥片(38~40) ……	142
第79図	骨製品……………	144
第80図	骨製品出土箇所……………	145
第81図	貝製品……………	145
第82図	中国産磁器……………	151
第83図	本土産磁器・円盤状製品・管……………	153
第84図	沖縄産陶器……………	155
第85図	碇子……………	156
第86図	遺構内出土獣骨分布図……………	157
第87図	SX 1遺構覆土断面柱状図……………	160
第88図	出土遺物一覧……………	172

第9表	チャート・石英資料詳細一覧 ……	118
第10表	石器観察一覧 ……	119
第11表	貝製品計測表 ……	145
第12表	器種別出土遺物一覧 ……	146
第13表	出土遺物一覧 ……	147
第14表	中国産白磁観察一覧 ……	150
第15表	中国産青磁観察一覧 ……	150
第16表	中国産青花観察一覧 ……	150
第17表	本土産磁器観察一覧 ……	152
第18表	円盤状製品観察一覧 ……	152
第19表	管観察一覧 ……	152
第20表	沖縄産陶器観察一覧 ……	154
第21表	碇子観察一覧 ……	154
第22表	獣・魚骨出土一覧 ……	157
第23表	貝類出土一覧 ……	158
第24表	放射性炭素年代測定結果 ……	163
第25表	暦年校正結果 ……	164
第26表	花粉分析結果 ……	164
第27表	微細物分析結果 ……	164
第28表	土壌理化学分析結果 ……	165

図 版 目 次

挿 表 目 次

第1表	遺構観察一覧……………	20
第2表	琉球縄文土器様式編年表 (前Ⅰ期~前Ⅴ期) ……	39
第3表	遺構SI 4及びSK 3出土土器一覧……………	49
第4表	分類別土器集計表(口縁部・底部) ……	50
	分類別土器集計表(胴部) ……	52
第5表	土器観察一覧……………	54
第6表	磨製石斧詳細一覧 ……	114
第7表	敲石・磨石類詳細一覧 ……	115
第8表	石皿詳細一覧 ……	117

図版1	陸上自衛隊那覇駐屯地に残る 沖縄気象台跡 ……	7
図版2	1930年頃の沖縄気象台 ……	7
図版3	調査経過 ……	12
図版4	土層検出状況1 ……	15
図版5	土層検出状況2 ……	16
図版6	遺構検出状況 ……	19
図版7	ニ一ピ集中箇所検出状況 ……	21
図版8	SI 1遺構検出状況 ……	23
図版9	SI 2遺構検出状況 ……	25
図版10	SK 3・SI 4遺構検出状況 ……	27
図版11	SI 5遺構検出状況 ……	29

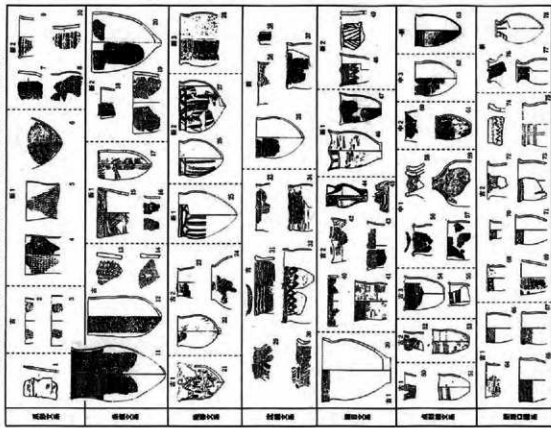
図版12	SX 1遺構検出状況	31	図版40	石斧	125
図版13	SI 3遺構検出状況	32	図版41	石斧 (7・8) 敲石・磨石類 (9~11)	127
図版14	SK 1遺構検出状況	33	図版42	敲石・磨石類 (12) 石斧 (13~15)	129
図版15	SK 4遺構検出状況	34	図版43	敲石・磨石類	131
図版16	屋外炉検出状況	35	図版44	敲石・磨石類	133
図版17	SX 2遺構検出状況	35	図版45	敲石・磨石類	135
図版18	第I群土器及び第II群土器 (1)	65	図版46	敲石・磨石類	137
図版19	第45図9上面出土状況 (南より)	69	図版47	石皿	139
図版20	第45図9上面出土状況 (西より)	69	図版48	熱田原型石器	141
図版21	第II群土器 (2)	70	図版49	石鏃 (37)・剥片 (38~40)	143
図版22	第II群土器 (2)	71	図版50	骨製品	144
図版23	第II群土器 (3)	73	図版51	加工痕?の見える獣骨	145
図版24	第51図21土器出土状況 (南より)	77	図版52	貝製品	145
図版25	第II群土器 (4)	78	図版53	中国産磁器	151
図版26	第II群土器 (4)	79	図版54	本土産磁器・円盤状製品・簪	153
図版27	第II群土器 (5)	81	図版55	沖繩産陶器	155
図版28	第II群土器 (6)	83	図版56	碇子	156
図版29	第II群土器 (7)	85	図版57	貝類	159
図版30	第II群土器 (8)	87	図版58	花粉分析プレパラート内の状況 ・実種遺体	169
図版31	第59図44土器出土状況 (南より)	91			
図版32	第II群土器 (9)	92			
図版33	第II群土器 (9)	93			
図版34	第II群土器 (10)	95			
図版35	第III群土器 (1)	97			
図版36	第III群土器 (2)	99			
図版37	第III群土器 (3)	101			
図版38	第II群土器及び第III群土器底部	103			
図版39	第II群土器及び第III群土器、 第IV群土器及び第V群土器	105			

神祇器具の暫定暦年 (本表編4)

九州	暫定暦年	土器型式	神祇器具の出現地 九州 県 市 郡	その他の年代資料	発行 暦年
縄文時代	前期 I	ヤブチ式土器 東原式土器	熊本 熊野 九州 鹿野	ヤブチ式 6670±140Y. B. P. 東原式 6450±140Y. B. P.	早 期
	前期 II	瀬川下層式土器 豊後式土器 泉原式土器 神野 A 式土器 神野 B 式土器	豊後 式土器 泉原 式土器 熊本 熊野 神野 A 式土器 神野 B 式土器	豊後式土器 (熊本 熊野) 4800±130Y. B. P.	
	中期 III	具志川式土器 神野 C 式土器 鹿原新屋式土器	熊本 具志川 熊本 神野 熊本 鹿原新屋		中 期
	後期 IV	神野 D 式土器 神野 E 式土器 伊集原式土器 坂本堂式土器 大山式土器 瀬川式土器	熊本 神野 熊本 神野 熊本 伊集原 熊本 坂本堂 熊本 大山 熊本 瀬川	伊集原式 (熊本 伊集原) 3370±40Y. B. P. 伊集原式 (福岡) 3000±30Y. B. P.	後 期
	晩期 V	瀬川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器	熊本 瀬川 熊本 宇佐浜 熊本 仲原	宇佐浜式は瀬川式派生とみられる	中 期
弥生時代	前期 I	高橋基式土器	熊本 林 II 式 熊本 鳥ノ原田式土器		後 期
	中期 II	具志川式土器	熊本 山ノ口式土器		
	後期 III	アカシヤンガー式土器	熊本 泉田式土器	アカシヤンガー式は神野式派生とみられる	後 期
	古墳時代 平安時代	フェンサ下層式土器		熊本 熊野	

注 「アエンサ下層式土器はアスグ時代初期」とする見解もある。

琉球縄文土器群別の暦年相別図式図 (一 器形式の上下は歴年的に移行する)



1. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 2. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 3. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 4. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 5. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 6. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 7. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 8. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 9. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 10. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 11. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 12. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 13. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 14. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 15. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 16. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 17. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 18. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 19. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 20. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 21. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 22. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 23. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 24. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 25. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 26. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 27. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 28. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 29. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 30. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 31. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 32. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 33. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 34. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 35. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 36. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 37. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 38. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 39. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 40. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 41. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 42. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 43. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 44. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 45. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 46. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 47. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 48. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 49. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 50. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 51. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 52. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 53. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 54. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 55. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 56. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 57. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 58. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 59. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 60. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 61. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 62. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 63. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 64. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 65. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 66. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 67. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 68. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 69. 高橋基式土器 (熊本 高橋基) 70. 高橋基式土器 (熊本 高橋基)

第I章 調査に至る経緯

1945年3月26日「米国海軍軍政府布告第1号」が公布され、それ以来沖縄では米軍の占領状態が続く。1953年には「土地収用令」が公布され米軍による強制的な土地収用が行われるようになり、新たな基地建設が行われた。1971年6月には「沖縄の直接防衛責任の日本国による引き受けに関する取り決め」により自衛隊の沖縄配備が決定され、米軍基地がその配置先となり現在に至る。そのため自衛隊駐屯地のほとんどが埋蔵文化財の空白地帯となっている。

2006年（平成18年）陸上自衛隊那覇駐屯地内における庁舎建設工事に先立ち、工事予定地に関する埋蔵文化財の有無を照会する文書が当教育委員会に提出され（平成18年5月18日付）同日収受した。これについては当該地に古墓が所在するため調査が必要である旨を回答した。その後、平成18年5月31日付で、庁舎建設予定地の埋蔵文化財の有無を照会する文書が提出され、同日当教育委員会で収受した。これを受けて、駐屯地内の庁舎建設予定地にて平成18年7月24日・25日両日に試掘調査（第1次）を実施した。その際、陸上自衛隊には、試掘調査に関して多大なご協力を頂いた。試掘坑は、縦横のラインが南北方向と東西方向にほぼ並行する各辺20m間隔のメッシュを組み、その縦横ラインの交点ごとに試掘坑を合計12箇所設定し（第8図）、バックホウによる掘削を行った。その結果、上位層にて近現代の遺物を検出し、下位層では先史時代の土器片・石器片等が出土した。この試掘調査により庁舎建設予定地に埋蔵文化財が確認されたことを平成18年8月2日付「事前調査報告書」（埋蔵文化財事前調査番号18-61）にて陸上自衛隊那覇駐屯地に通知し、文化財保護法第97条に基づき埋蔵文化財の発見通知を提出するよう依頼した。その後、当教育委員会は、陸上自衛隊那覇駐屯地より当該地に所在する埋蔵文化財に関する平成18年9月6日付「遺跡発見の通知について」（101後支第744号）を平成18年9月11日に収受し、同通知文書を平成18年9月14日付文書（那教生文第261号）にて沖縄県教育委員会へ進達した。その際、発見された遺跡の名称を、「鏡水名座原遺跡」とした（注）。その後、沖縄県教育委員会より平成18年9月21日付文書（教文第986号）にて遺跡発見通知に対する回答があり、当教育委員会から平成18年9月27日付で陸上自衛隊那覇駐屯地へ送付した（那教生文第286号）。

これらと並行して、遺跡の保存処置として庁舎建設工事計画の予定地の変更について両者で調整を行い、建設予定地に関して再々度、埋蔵文化財の有無を照会する平成19年2月20日付文書が提出され、翌日当教育委員会で収受した。それを受けて平成19（2007）年3月22日に試掘調査（第2次）を実施した。その際にも陸上自衛隊にはかなりご協力いただいた。試掘坑は、前回同様、縦横のラインが南北方向と東西方向にほぼ並行する各辺20m間隔のメッシュを組み、その縦横ラインの交点ごとに試掘坑を合計6箇所設定し（第8図）、バックホウによる掘削を行い、その結果を報告した。

平成19年7月6日付で庁舎建設予定地の図面が提出され、鏡水名座原A遺跡の一部が庁舎建設予定地の一部にかかる事は避けられず、緊急の発掘調査を行い記録保存する事となった。

発掘調査を実施するにあたり、文化財保護法第94条に基づく平成20年7月31日付「埋蔵文化財発掘の通知について」（101後支第693号）が陸上自衛隊那覇駐屯地より当教育委員会へ提出され、平成20年7月31日付文書（那教生文第152号）にて沖縄県教育委員会へ進達した。その回答として、沖縄県教育委員会より平成20年8月5日付「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文第740号）が届き、当教育委員会で収受し、平成20年8月8日付で陸上自衛隊那覇駐屯地へ送付した（那教生文第161号）。

文化財保護法の手続きを行う一方で、調査の準備をすすめ平成20年7月17日付「那覇駐屯地における庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る協定書」に基づき、平成20年7月31日付「文化財発掘調査業務委託契約書」が締結された。調査予定地に関する「発掘承諾書」については、沖縄防衛局からの承諾書（平成20年11月4日付「発掘承諾書」）（沖防第3458号）を当教育委員会で収受している。

なお、今回の鏡水名座原A遺跡発掘調査にあたり、前年度に行われた「鏡水土砂場原A遺跡」発掘調査と同様に、建設予定地の基礎となる部分にのみ限定して調査を行う旨で沖縄防衛局との調整が始まったが、基礎部分のみでは細切れの調査となり、遺跡の性格が判断できない事や文化財保護法の主旨に合わないこと、恒久的な建物の設置は埋蔵文化財の破壊と同等と考えられる等の理由から、工事に係る部分において全面発掘を行う調整を行い、了承を得ることができた。

（注）

平成20年度に陸上自衛隊那覇駐屯地で実施した小字名座原での試掘調査により遺跡が新たに追加で発見されたため、それを「鏡水名座原B遺跡」と呼称し、先に発見された「鏡水名座原遺跡」を「鏡水名座原A遺跡」として、遺跡の名称を現在若干改めている。第3図参照。

第Ⅱ章 調査体制

本遺跡の調査組織は、次のとおりである。

調査責任者	那覇市教育委員会	教 育 長	桃原 致上（平成18年度～）
〃	〃	〃	城間 幹子（平成22年度～）
調査総括	那覇市教育委員会文化財課	課 長	古塚 達朗（平成15年度～）
調査事務	那覇市教育委員会文化財課	副 参 事	島 弘（平成19年度～）
〃	〃	主 幹	田端 睦子（平成20年度）
〃	〃	〃	内間 靖（平成21年度～）
〃	〃	主 査	田端 睦子（平成18・19年度）
〃	〃	主任主事	赤嶺 増美（平成18・19年度）
〃	〃	〃	仲宗根 健（平成21年度～）
〃	〃	主 事	新里真知子（平成20年度）
調査員	〃	専門員主査	玉城 安明（平成19年度～）
〃	〃	〃	北條 真子（平成19年度～）
〃	〃	主任専門員	仲宗根 啓（平成19年度～）
〃	〃	〃	樋口 麻子（平成19年度～）
〃	〃	〃	當銘 由嗣（平成19年度～）
〃	〃	専 門 員	知念 政樹（平成18年度～）
調査補助員	〃	臨時職員	伊波かおり（平成20年度）

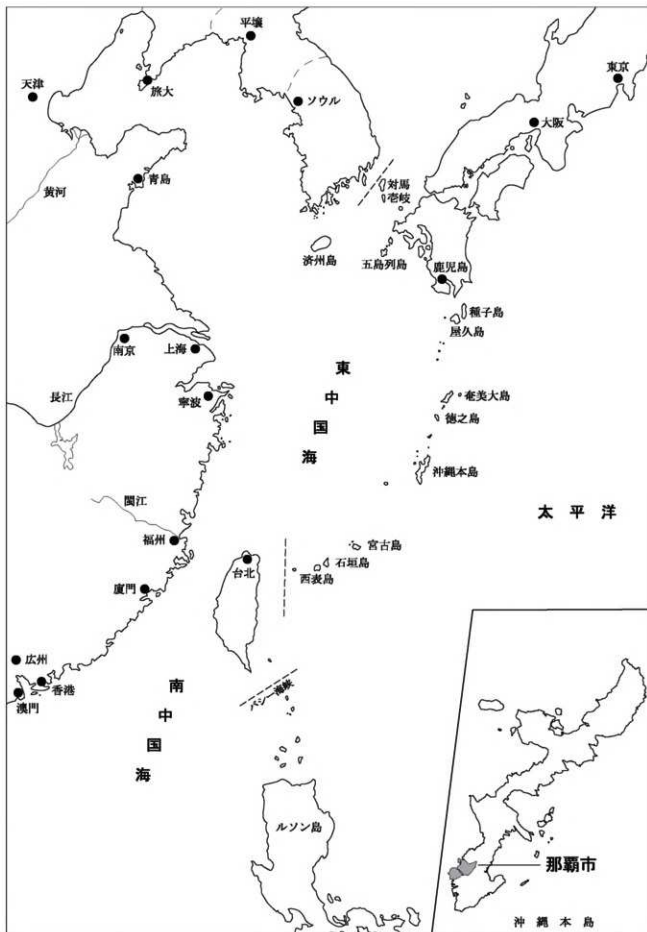
〔国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）〕（平成20年度）

井上 淳平（所長） 土岐 耕司（調査員）

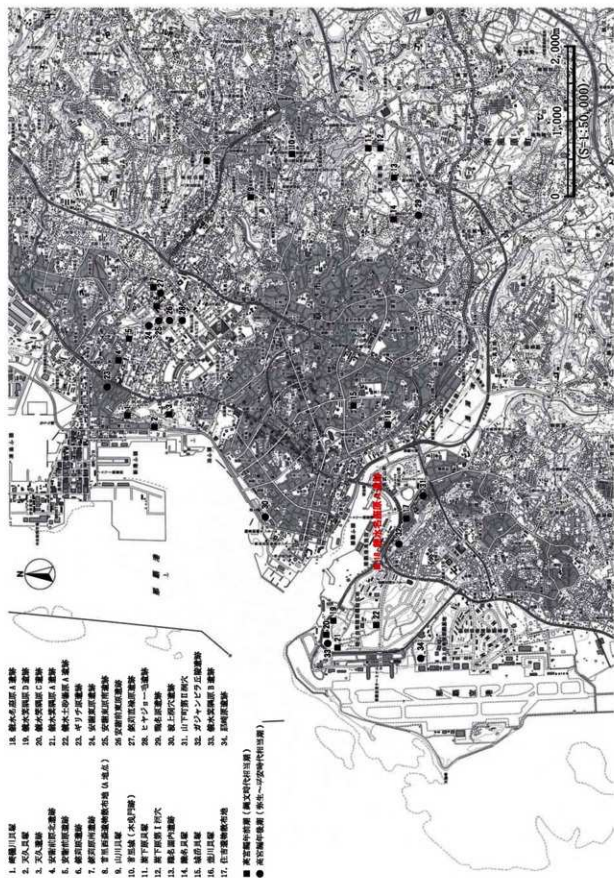
雨宮 瑞生（調査補助員）

〔バリノ・サーヴェイ株式会社 沖縄支店〕

上田 圭一（支店長） 真栄田 義人



第1図 那覇市の位置



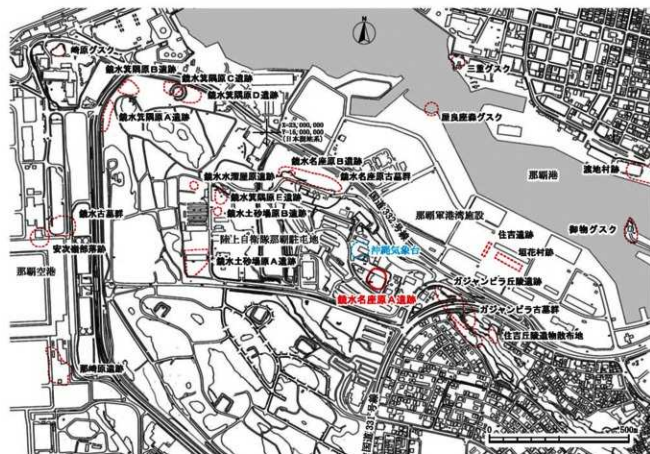
第2図 遺跡所在地及び那期市内の高宮編年前期・後期の遺跡（赤が遺跡位置）

第三章 遺跡の位置と環境

地理的環境 沖縄県那覇市は沖縄本島南部の西岸に位置し(第1図)、面積38.99平方km、総人口318,051人(2010年7月末現在)を擁する県庁所在都市である。

位置 鏡水名座原A遺跡は、那覇市字鏡水(かがみず)に所在する。同地域は那覇市の中心からほぼ南西方向にあり、現在はそのほとんどが陸上自衛隊那覇駐屯地となっている。本遺跡は那覇軍港の南西に形成された、ほぼ北西から南東方向にかけて馬の背状に延びる丘陵(小祿台地)上に位置し、標高は約25mである。遺跡の北側に立つと眼下の低地には那覇港から北へ市街地が広がり、北東に天久台地、東に弁ヶ岳(標高165m)を最高地点とする首里から識名台地一帯が一望され、西方海上には慶良間諸島が眺望できる。

地質 那覇市は下位から上位へ島尻層群、琉球石灰岩、沖積層の3つの地層群から成り立っている。島尻層は下位から上位へ豊見城層・与那原層・新里層に分類され、那覇市帯には豊見城層の中でも小祿砂岩とよばれる砂岩優勢層(ニービ)が広く分布している。琉球石灰岩堆積後の地殻変動(ウルマ変動)により、台地がブロック状に細分して分布するようになった。この断層沿いに地形の侵食が始まり安謝川、安里川、国場川などの河川が形成され川沿いの急斜面と急崖が形成された。その後、琉球石灰岩台地の地表面には赤褐色風化土壌である「島尻マーシ」が形成され広く分布している。



第3図 遺跡所在地と周辺遺跡(赤実線が調査区遺跡位置)

自然環境 現在より2000～3000年前には海面が1～3m程低くなり、多くの海岸線に砂丘が分布した。同時に国場川など河川沿いには現在より広範囲に陸地がひろがったと思われ、当遺跡の立地も現在より1～3m高かったと予想される。この海退のあとほぼ現在の海水準になっている。

那覇市一帯の湧水地点は琉球石灰岩台地西端に並んで点在しているのが確認されている。これは琉球石灰岩の堆積後、ウルマ変動によって台地が形成される際に地盤が西に傾いたためである。水質は琉球石灰岩中のは島尻層群の湧水よりも良好である。国場川の南岸沿の台地上に先史時代の遺跡が多く確認されている（第2図）のは湧水箇所に近いためだと予想できる。当時の自然環境に近い資料として第4・5図を掲載した。

歴史的環境 那覇市鏡水は、小禄間切、小禄村を経て那覇市の字となる。歴史的経緯については『鏡水土砂場原A遺跡』（那覇市教育委員会2010年）に詳しいのでご参照頂きたい。

沖縄気象台 現在、陸上自衛隊本部庁舎前には、沖縄気象台の基礎が一部残されている。1927年（昭和2年）4月5日、「中央気象台付属沖縄測候所」として小禄鏡水の蚊坂（ガジャンピラ）に鉄筋コンクリート造りの庁舎群と地上約90メートルの無線大鉄塔2基が竣工し、5月5日から気象業務を開始した。沖縄戦時下では、職員は気象台・陸軍気象班・海軍気象班へと分かれ、庁舎の南方にそれぞれ防空壕を掘り観測を続けた。当時の気象台の主な任務は特攻隊への気象情報の提供であったが、1945年（昭和20年）5月24日に、壕が爆撃され沖縄地方気象台としての組織が壊滅・機能消失した。その後も気象台職員は陸軍気象班とともに南下しながら観測通報に努めたが、途中で離脱せざるをえなくなった。陸軍気象班は6月20日まで観測通報を続けている。海軍気象班においては、隊員のほとんどは小禄の地で全滅したようである。1945年（昭和20年）8月11日、中央気象台は沖縄測候所に降格（その他地方気象台は管区気象台へ昇格）、さらに1946年（昭和21年）11月13日に廃止した。連合国軍司令部（GHQ）は、気象事業について、沖縄本島の気象観測は嘉手納の米空軍気象隊に命じたため、建物のみが残ったようである。

《主要参考文献》

『沖縄大百科事典』上・中・下巻 沖縄タイムス社 1983年

Wikipedia

那覇市教育委員会『鏡水土砂場原A遺跡』2010年3月

那覇市教育委員会『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書』1986年3月

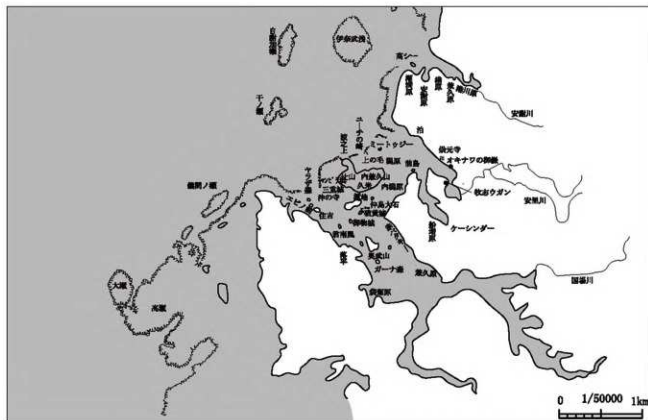
那覇市企画部文化振興課『那覇市史』通史篇第1巻 前近代史 1985年

『ペルリ艦隊日本遠征記』



図版1 陸上自衛隊那覇駐屯地に残る沖縄気象台跡

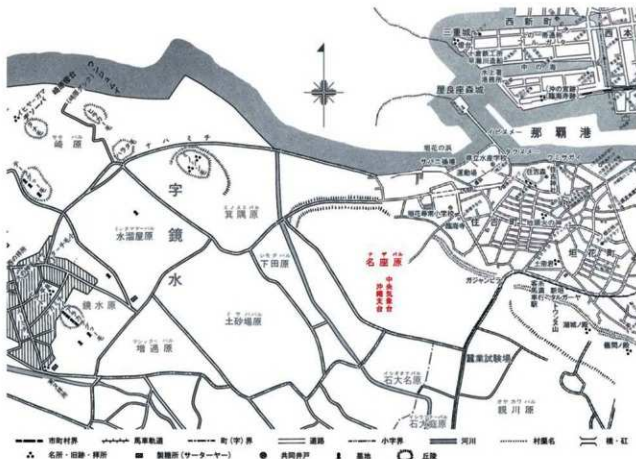
図版2 1930年頃の沖縄気象台



第4図 那覇の古海岸線 (1451年以前)



第5図 「竹藪村から見た那覇」『ペリー艦隊日本遠征記 vol. I』



第6図 遺跡所在地周辺の歴史・民俗地図（昭和初期頃）



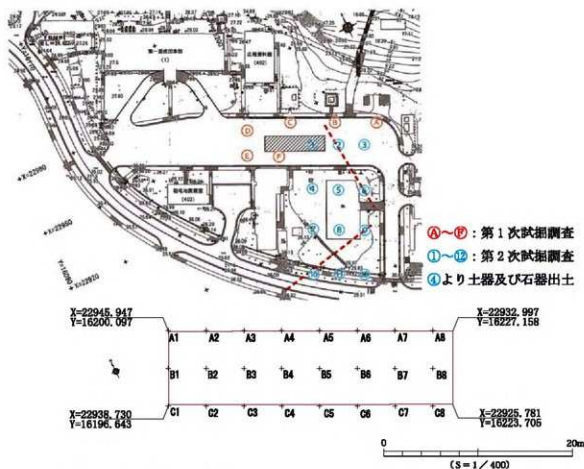
第7図 遺跡所在地周辺の米軍作成地形図（1948年頃）（赤実線が調査区遺跡位置）

第IV章 調査経過

庁舎建設予定地内で鏡水名座原A遺跡にかかる範囲225㎡を設定し、発掘調査を実施した。まず、アスファルトを剥ぎ磁気探査による不発弾等の爆発物の有無を確認しつつ、バックホウにより1mほど堆積した表土（客土）の除去を行なった。それにより一部に舗装版を伴う旧地表面を検出した。2回目の磁気探査が終了後、一部で人力掘削も実施し、旧地表面以下、沖縄土士復帰以前の米軍施設から戦前の沖縄気象台に起因すると思われる土層の堆積状況を確認した。

近現代層を除去すると、調査区の東半では暗褐色のシルト質粘土が堆積していた。試掘時の所見から、これを縄文時代後期の遺物包含層（Ⅶ層）として扱うこととし、本格的な発掘調査に入った。掘削にあたっては、細片資料も含めた遺物全点測量を実施しながら、人力による遺構の検出を行なった。その過程で遺物および遺構の検出状況や地層の堆積状況の実測図作成及び写真撮影を実施した。特にA・B7グリッドでは大型のニービーや石灰岩礫の集中箇所が検出された。このため、竪穴住居跡等の存在を念頭に置きながら掘削・検出作業を進めたが、土質の違いとして検出されたのは複数の不整形溝状プランであった。これらは礫集中箇所の位置にあまり関わらずに分岐・合流しており、自然地形に起因するものと判断したが、それぞれに遺構番号を付し、更に掘削を進めた。

試掘調査では確認できなかったが、遺物包含層下の赤土層（マージ層）からも遺物が確認できたため、追加調査とし、赤土層上部での遺物取り上げ及び遺構検出を行い調査を終了した。



第8図 調査区位置図及びグリッド設定図

以下、調査経過の概略を記す。

- 9月24日(水) 基準点測量、調査前風景写真撮影
9月26日(金) 舗装版剥ぎ取り開始
9月30日(火) 1回目磁気探査(異状点12箇所)
10月1日(水) 重機表土掘削
10月2日(木) 2回目磁気探査(異状点4箇所)、表土掘削
10月3日(金) 重機表土掘削完了。クチャ類似層の部分検出撮影。
10月6日(月) 表土掘削終了後の全景撮影。攪乱①～⑦までを確認し、人力による掘削を開始する。
10月8日(水) 攪乱①～⑦掘削終了。壁面撮影。
10月10日(金) 近現代層部分掘削開始
10月15日(水) 攪乱掘削後の全景撮影。
10月20日(月) B1グリット青灰色土層の人力掘削
10月22日(水) 重機による近現代層除去作業開始。B3グリット付近から縄文時代包含層検出。
10月28日(火) 重機掘削後全景写真撮影、中央から西側にかけて淡茶褐色土層(VI層)および攪乱層の人力掘削
10月29日(水) グリッド設定。遺物取り上げ開始。
10月30日(木) A・B4グリッド以東において、淡茶褐色土層及び準遺物包含層の掘削。陸上自衛隊不発弾処理隊による発見銃弾の現地確認。
10月31日(金) A5グリッド周辺の攪乱残土・淡茶褐色土の除去、及び調査区東側での包含層(暗茶褐色土層)掘削。陸上自衛隊不発弾処理隊による発見銃弾の回収
11月4日(火) ～14日(金)(11月6日(木)～11月7日(金) 陸自祭準備のため作業中止)
A・B6～8グリッドのVII層遺物包含層掘削及び遺物検出状況の撮影・全点測量開始
11月18日(火) A・B5～8グリッドのVII層遺物包含層掘削及び遺構検出
11月19日(水) A・B5～8グリッドのVII層遺物出土状況写真撮影・全点測量開始
11月20日(木) A・B6～8グリッドの東西ベルトについて、土層写真撮影後、掘り下げ除去した。
11月20日(金) 全体の遺構検出
11月25日(火) VII層遺物包含層掘削完了、高所作業車から遺構検出全景写真を撮影。各遺構プラン設定。
11月26日(水) ～12月1日(月) 各遺構掘削開始。各プランに観察用のベルトを設ける。
12月2日(火) ～12月4日(木) 各遺構掘削及び遺物測量・取り上げ作業
12月5日(金) ～12月9日(火) 遺構・土層観察ベルト掘削、遺構・壁面測量、遺物測量・取り上げ作業
12月10日(水) 遺構完掘全景写真撮影
12月11日(木) 追加調査としてVII層遺物包含層下層調査の開始。調査区東側で人力掘削を開始する。
12月12日(金) 調査区東側のニービ集中箇所出土遺物出土状況写真撮影・全点測量
12月15日(月) SK3を検出、多量の遺物出土
12月18日(木) 高所作業車から完掘全景写真を撮影、仮囲撤去
12月24日(水) 自然科学分析用の土壌サンプリング、現地作業終了
12月26日(金) SX1プラン追加



調査前（北西から）



遺物出土状況1（東から）



表土掘削後（東から）



遺物出土状況2（東から）



攪乱掘削後（東から）



遺物完掘状況（東から）



遺物包含層直上に残る耕作？痕（東から）



地山確認トレンチ（東から）

図版3 調査経過

第V章 層 序

調査区に見られる土層は計8枚に大別できた。時代的にはI～VI層までが近現代でそれより以下は縄文時代後期であったため、近現代の段階で地盤を大きく削平・造成した事が窺えた。色調や土質等の違いから、さらに細分可能な場合もあったので、細分した土層の1つを示す際には、アルファベットの小文字を付加して表記している。

以下、I～IX層の特徴について記す。

I層 (Ia～Ic層)

駐屯地現地盤を構成する整地層群。上から、舗装版→明黄褐色の路盤材→盛り土となっている。盛り土上位にはコンクリート片が多く混じっており、前段階までの地盤下施設などの痕跡となっている。昭和62年に沖縄気象台建物が解体され、現在の第一混成団建物等が建築された折に、併せて地盤調整が行われたと思われる。現在も使用されている雨水ヒューム管(攪乱②・⑤)は、路盤材直下からの掘り込みとなっている。調査区東壁の観察からは、攪乱③も同様の掘り込みとなっているが、I層面整地段階でそれまで機能していた鉄管を取り上げ、同じ場所に有筋コンクリートを埋め込んだようで厳密には2時期に分けられるものと思われる。

II層 (IIa・IIb層)

明黄褐色の路盤材→盛り土で構成され、上位にあったはずの舗装版を失っている。おそらく沖縄返還直後の初期駐屯地面であり、雨水枒を伴う攪乱③西側は、この面に対応するものと考えられる。

III層 (IIIa～IIId層)

舗装版→路盤材? (混雑の混合土)で構成される。アスファルトの厚さは一定でなく、下面の凹凸が激しい。路盤材の性格が考えられる混合土も、直下の在来土を粗く混ぜて粗雑に敷かれており、非常に雑な工事である印象を受けた。この混合土には、ガラス片・銅線・瓦片等が混じる。舗装版が検出されなかった調査区北西隅には、人頭大の風化石灰岩が多く混入する盛り土がなされているが、その目的が不明であるため、II層の範疇に入る可能性もある。ちなみに、調査区を北東→南西に走る溝(攪乱④)は、この舗装版の上から掘り込んでおり、内部の土層には大量のアスファルト片が含まれている。

IV層 (IVa～IVf層)

III層直下で検出された版築状の整地層で、I・II層で見られた明黄褐色路盤材と同質の土や暗褐色土、炭化物層など、少なくとも6細分できた。調査区中央でのみ存在しており(第9図)、III層面造成時の削平の影響が大きくなかったとすれば、この検出幅は道路の痕跡とも考えられる。1948年作成の米軍作成地形図によると米軍による利用以前から、この付近には沖縄気象台建物に向かって北へ延びる道路があったようである。

後述するV・VI層は、このIV層の下部構造をなす一連の造成土ではないかと推察するが、識別が明瞭で層厚もあり、一部は人力掘削の対象として遺物も多く回収したため、あえて層名を大別した。

V層

調査区の東西で検出した粘質土層で、試掘坑①（第二次試掘）の2層に相当する。中央部で欠落もみられるものの、調査区全体に広がっている。見た目には均質な感があり、各所で陶磁器・ガラスの小片や鉄釘などをよく含み、いわゆる近現代遺物が一番多く（約860点）出土した。西側では時々油臭に似た臭気も感じられた。この土層中に正位でバックされていた鉄製缶（径約30cm）の中から、「D AINIPPON BREWERY」製のビール瓶破片が出土している。「DAINIPPON BREWERY」の社名存続期間は1906～1949年であり、V層の帰属年代もそれと大差ないものとする。

VI層

調査区全体に堆積する土層で、試掘坑①の3層に相当する。やや粘性があり、炭化物粒や陶磁器片を含む。調査区西側では小銃弾実弾が1発出土している。試掘坑①東壁において既に、鉛管の露出が確認されており、その西側でも同じ鉛管がVI層中に埋設されていた。また、直下VII・VIII層との層界面が明瞭であったこともあり、VI層は「それ以前の地盤を大きく削平した上で盛られた近現代の盛り土」という性格を与えられる。整地規模や時期から、沖縄気象台創設時のものと考えて矛盾はないものと思われる。調査区中央以東では、層下位にVII層土の混じり込みが認められた。

V・VI層とも、それほど離れた場所から持ち込まれたとは考えにくい。しかし、直下に有効な縄文時代包含層があるにも関わらず、全体としては縄文遺物が希薄であることから、同じ場所の削平土に由来しないものと思われる。パリノ・サーヴェイ社調査研究部長橋本氏によれば、VI層は耕作土に由来する可能性があるとのことであった。

VII層

縄文時代後期の遺物包含層として確認された層。I～VI層を除去した結果、調査区の大半、特に西側で後代の掘削を受け欠失していることが判明した。全体としては調査区北東→南西への緩やかな傾斜上に堆積しており、堅穴住居等の大型遺構上位の落ち込みにおいても同質土を確認できた。

遺物の包含状況で特記される点として、以下が挙げられる。

- ①土器は小片が殆どであり、萩堂式を主体として、大山式・室川式のもの認められた。
- ②結晶片岩・千枚岩等の微小剥片を含んでおり、やや偏在する可能性がある。
- ③石斧や石材（石器素材及び破損品）が、ニービ・石灰岩等とともに多く出土する。
- ④鳥獣魚骨は殆ど出土しない。

なお、一部でVII層に掘り込む形で耕具によると思われる痕跡が見られた。刃先部分のみであった。

VIII層

後述するIX層（赤褐色マージ層）の二次堆積と考えられる土層を一括した。色調はIX層に比べて暗色を呈するところが多く、VIII層ほどではないが遺物を包含する。

IX層

赤褐色のマージ層で、いわゆる地山と考えられる。砂の混入程度の差で更なる細分ができる可能性があり、且つこの観察により中位段丘上の土壌形成過程を復元できる可能性があるとのことであったが、断ち割り調査を実施したものの、明瞭な土層細分はできなかった。

確認を行った全ての箇所においては、直下に石灰岩の基盤が認められた。この岩盤の表面では、局所的ではあるが、黒味を帯びるもの、逆に白味を帯びるもの、粒子が粗いものが薄く堆積しているのが確認されている。



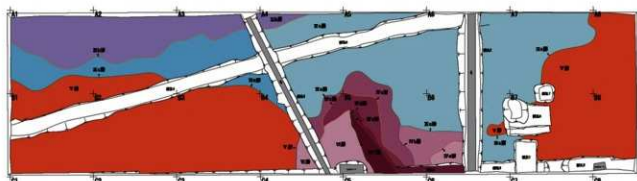
図版4 土層検出状況1



東壁 (西から)



西壁 (東から)



第9図 調査区中央のみに存在した、米軍利用以前に確認できる北へ延びる道路?跡

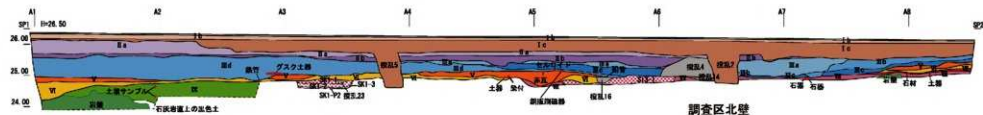


IV層出土状況 (東から)

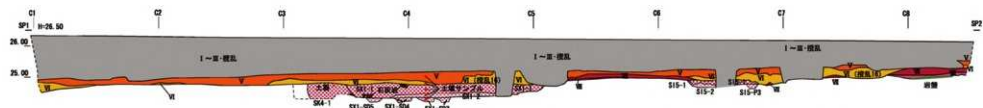


版築状の整地層 (南から)

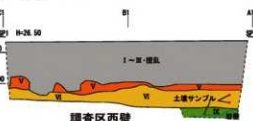
図版5 土層検出状況2



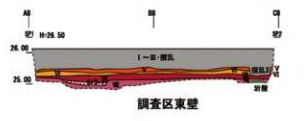
調査区北壁



調査区南壁



調査区西壁



調査区東壁

層序注記

I 層

- | | | |
|-------|----------------------|---|
| I a 層 | アスファルト | 現地産をなすアスファルト舗装版。厚さ8~12cm、踏敷材となる機層。風化石灰岩由来か？ |
| I b 層 | 明黄褐色礫層 (10YR6/6) | 石灰岩・ビーチコーラル・コンクリート片が混入。 |
| I c 層 | にぶい黄褐色砂礫土層 (2.5Y6/3) | |

II 層

- | | | |
|--------|--------------------|----------------------|
| II a 層 | 灰色~淡黄色 | 仮装状の屑層 (初期趾屯地の踏敷材か)。 |
| II b 層 | にぶい黄褐色土層 (10YR7/2) | ビーチコーラルの盛土。 |

III 層

- | | | |
|---------|-------------------------------------|---|
| III a 層 | 黄褐色砂礫度層 (10YR5/6) | アスファルト舗装痕跡が残る。 |
| III b 層 | 明黄褐色礫層 (10YR6/6) | 石灰岩礫層。踏敷材か。 |
| III c 層 | 混合土層【オリーブ黒色土 (5Y3/1) 褐色土 (10YR4/4)】 | 主にI-VI層を割り込んだ上で構成されるものと思われる。ビーチコーラル・木板材・漆喰等の鉄屑・アスファルト塊等が多く混入する。 |
| III d 層 | 明黄褐色礫層 (10YR6/6) | III b層と同質土。 |

IV 層

- | | | |
|--------|-------------------|-------------------------------|
| IV a 層 | オリーブ黒色粘土層 (5Y3/1) | 木板材片・漆・ビーチコーラル・小貝片を含む。クチャに類似。 |
|--------|-------------------|-------------------------------|

V 層

- | | | |
|-------|-----------------|--|
| V a 層 | 褐色粘土層 (10YR4/4) | 陶磁器破片ごく微量。VII層に比べてしまりは弱い。調査区東側では層厚が薄いため、上位を覆乱されている箇所ではVII層と混合する。 |
|-------|-----------------|--|

VI 層

- | | | |
|--------|-----------------------|---|
| VI a 層 | 暗褐色粘質土層 (10YR3/3~3/4) | 縄文時代後期の遺物包含層。大小のコービ・石灰岩は局所的に多いが、炭化物や焼土等の混入物は少ない。しまりはVI層より強く、VII層以下より弱い。 |
|--------|-----------------------|---|

VII 層

- | | | |
|---------|----------------------|---|
| VII a 層 | 暗褐色粘土層 (10YR3/3~3/4) | VII層に比べてしまりが強く、目立った混入物も少ない。VI層直下では上位の覆乱が激しく判別が困難。 |
|---------|----------------------|---|

VIII 層

- | | | |
|----------|-----------------|----|
| VIII a 層 | 褐色粘土層 (10YR4/6) | 地山 |
|----------|-----------------|----|



第VI章 遺構

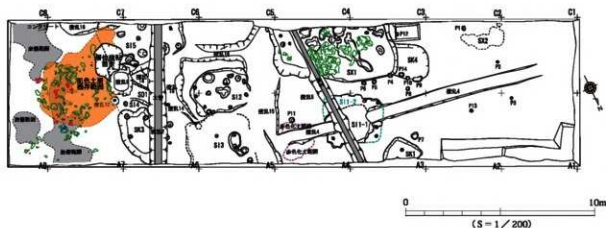
今回の発掘調査では、竪穴住居跡6基それに伴う炉跡3基、大型方形遺構1基、土坑3基、屋外炉1基、ニービ集中箇所等が検出されている。全体的な遺構の分布状況については、第11図に示した。各々の遺構の詳細については、第1表をご覧ください。

竪穴住居跡は隅丸方形と隅丸長方形があり、いずれも3m～2.2m前後の大きさである。埋土へのニービ・石灰岩礫の混入が多く、埋土下位には黒味を帯びた人為性の強い堆積が見られた。柱穴は20cm前後のものも多く、40cm前後のものも見られた。両者は混在するのでは無く、各遺構ごとに統一性があるように感じられた。竪穴住居跡の中には屋内炉を持つものもあった。屋内炉は、赤く変色し焼土粒や炭化粒が含まれていた。また、屋外炉も確認できた。

通常の竪穴住居跡の中に際立って大形の方形遺構が検出された。6.5m×2.5m程を測り隅丸方形を呈し、壁面に石列を巡らせていたようである。底面近くからは加工痕のあるジュゴン肋骨が出土した。

土坑は3基とも楕円形の小規模なもので、埋土から若干の石材片と土器片が出土したが、その性格については不明である。

A7～C8グリッドでは多数の大型ニービや石灰岩礫の集中箇所が確認できた。そのため竪穴住居跡等の存在を疑い、特に慎重に検出作業を行ったものの、土質の違いとして検出できたのは複数の不整形溝状プランであった。これらは礫集中箇所の位置にあまり関わらずに分岐・合流しており、自然地形に起因するものと判断した。

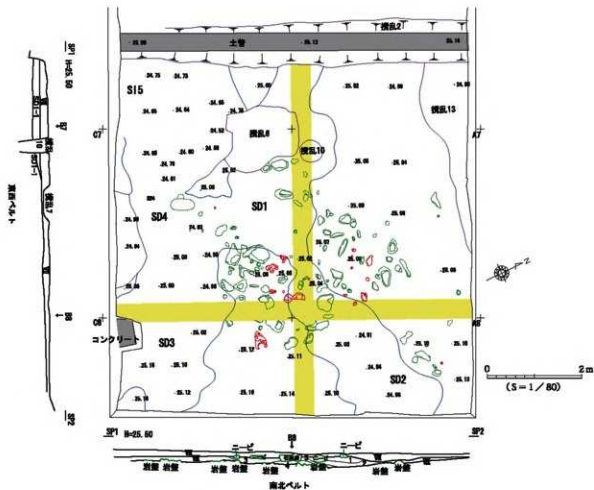


第11図・図版6 遺構検出状況

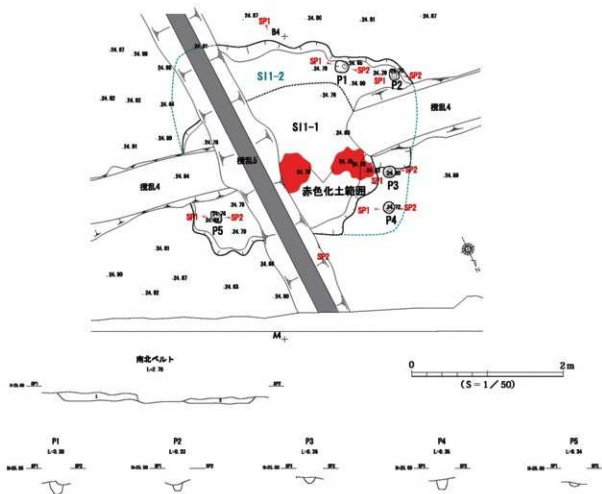
第1表 遺構観察一覧

遺構名	長径(m)	短径(m)	平面形態	炉 (有無)	炉形態	柱穴	出土遺物等
SI 1-1	2.05	1.96	隅丸方形	有	地炉	不明	—
SI 1-2	3.02	2.72	略方形	有	地炉	6	土器：第II群2b類、第III群1類・2類
備考：	竪穴プランは不整形に見えたが、2軒の方形住居が切り合っている可能性が高い。被熱して赤色化した部分を「炉」と考えた。焼土混じりの土層を完掘すると平坦にならないこと、この面上に「炉」が検出されることから、住居床面はこの面と考えられる。						
SI 2	3.15	2.73	隅丸長方形	有	地炉	13	土器：第I群、第II群1e類・1bcd類・2a類・2c類・3abc類、第III群1bc類
備考：	住居中央には炭化物がマウンド状に残存しており、掘削の結果、その下部に窪みが確認できた。自然科学分析の結果、炭化物には材が殆ど含まれず、炭化種子(タブノキ等)が主体であった。柱穴は被熱し赤色化した硬化面を伴い、竪穴内縁に多く位置するようであった。						
SI 4	3.3	(3.5)	隅丸長方形	有	地炉	7	土器：第II群1e類・1bcd類・2a類・2b類・2c類
備考：	SK3完掘時の土坑底面において赤色化範囲を検出したが、他の住居跡の例から切り合う別の竪穴住居跡の可能性を考え、調査を進めたところSI4を確認した。炉跡の可能性がある被熱痕跡が2箇所あった事から、複数の竪穴住居の切り合いか、住居の造り替えの可能性がある。						
SI 5	5.0	(2.9)	隅丸長方形	—	—	—	土器：第I群、第II群1e類・1bcd類・1bc類・2a類・2b類・3abc類、第III群1abc類・1bc類・2類
備考：	SI2同様、埋土に人為性の強い黒味を帯びた焼土混じりの土層が検出された。住居東側では焼土範囲が2ヶ所を確認できた。P1・4・8はその形状から樹根である可能性がある。						
SK1	6.58	2.58	隅丸長方形	不明	不明	—	土器：第I群、第II群1e類・1bcd類・1bc類・2a類・2b類・2c類・2d類・3abc類・その他、第III群1abc類・1bc類、第IV群加工痕のあるジュゴン肋骨
備考：	竪穴住居跡としては平面規模も大きく炉跡等が検出できなかったため性格不明遺構としている。また、石灰岩岩盤が遺構底面となっているのも他の竪穴住居には見られなかった。遺構中央部では黒味が混じる埋土を検出し、土壌理化学分析を行ったところ、上位の層に比べて人為性が高いとの結果が得られた。この埋土はSI2・SI5・SK1でも確認できた。遺構内には多数のニーズ・石灰岩礫が混入しているが、遺構立ち上がり際で検出されたものについては「化粧石」的な用途で置かれた物が含まれる可能性がある。						
SI 3	3.5	2.56以上	隅丸長方形	不明	不明	不明	土器：第II群3abc類・3d類、第III群1bc類
備考：	SI2と切り合い関係にあるが、両者の新旧関係は不明。竪穴内埋土VI層が入り混じっており、調査時には住居床面以下に達していた部分もあったが壁面から竪穴住居であることを確認した。平面規模がやや大きく一辺が約4mを測る。SK1からは水漏らしきものが出土した。						
SK1	1.5以上	1.6	—	—	—	2	土器：第I群、第II群1e類・1bcd類・2d類、第III群
備考：	ほぼ方形を呈すると考えられる土坑である。埋土には黒味の強い部分があり、比較的遺物を多く包含する。周辺住居とは主軸がやや異なる。						
SK3	(2.3)	(2.1)	—	—	—	—	土器：第II群1e類・1bcd類・1bc類・2a類・2b類・2c類・2d類・3abc類、第III群1abc類・1bc類・2類、第IV群
備考：	土坑底面全面に接合可能な土器が大量に出土した。平面形はやや不整であるが、断面形は整然と緩やかに立ち上がる皿状である。底面近くでは獣骨の出土も多かった。出土土器の年代から他の竪穴遺構群より上から掘り込まれたものと考えられる。						
SK4	1.8	(1.7)	不明	不明	不明	4	土器：第II群2c類、第III群1abc類・1bc類
備考：	SK1と切り合い関係にある。SK4の方が新しいと思われる。						
屋外炉	SI1の東側に位置する。周辺に住居らしき遺跡が確認できなかったため屋外炉とした。						
SK2	詳細は不明。人為的に掘られた可能性がある。						

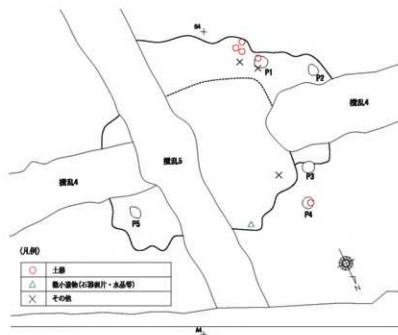
() は推定



第12図・図版7 ニービ集中箇所検出状況



- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 局所的に炭化物の痕跡が見られるが、炭化物の形状は確認できない。上位に赤褐色土、下位にマー
ジ土を多く含む。
- 2 暗褐色粘質土 (7.5 YR 3/4) 炭化物・赤褐色土(1~20mm)を多量に含む。ニールを僅かに含む。
- P1~5 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) 炭化物片・粒を含み、特にP4に多く目立つ。この混入により全体として黒味を帯びて見える。
10mm以下のマージ粒少量。



第13図 S11 平面図・断面図・遺物分布図



P1



P2



P3



P4

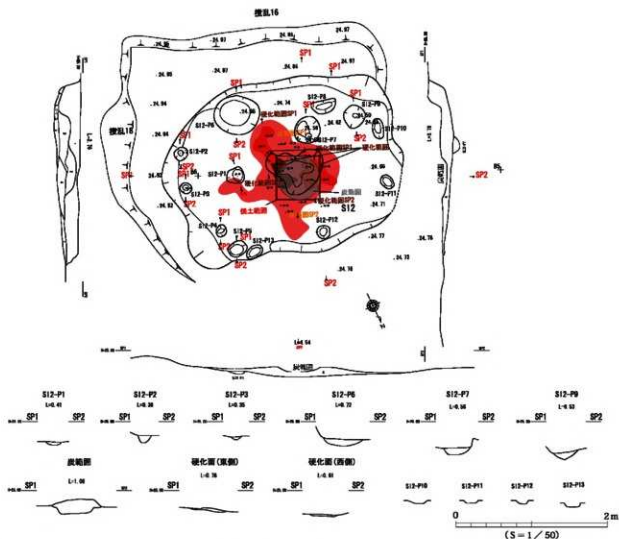


P5

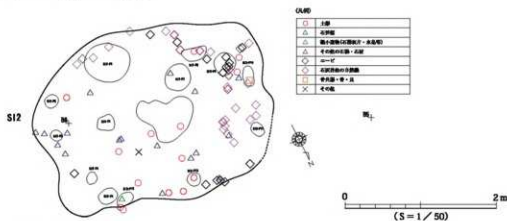


東から

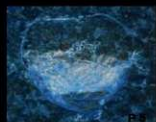
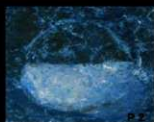
図版 8 SII 遺構検出状況



- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒(径15mm以下)微量。ニービを含む。
 - 2 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) 炭だまり周辺の堆積で、混入物には土器片もみられる。赤褐色土粒・マージ粒微量。
 - 3 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・橙色土粒微量。
 - 4 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・橙色土(各々粒〜塊)中量、炭化物粒微量。
 - 5 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物・マージ粒少量。
 - 赤色硬化面 赤褐色粘質土 (2.5 YR 4/6) 硬くしまる。
 - 黒色硬化面 暗褐色土 (2.5 YR 3/2)
- # 黒褐色土 (5 YR 2/2) ニービが焼成変質したものと思われる。
- 炭範囲 黒褐色粘質土 (10 YR 2/2) 多量の炭化物により黒褐色を呈する。赤褐色土粒・マージ粒微量。
- P1~3・7・8 暗褐色粘質土 (1 YR 3/3) 炭化物粒・赤褐色土粒・マージ粒少量。
- P4~6 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) マージ粒少量、赤褐色土粒微量。
- P9 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) マージ粒、ニービ少量。

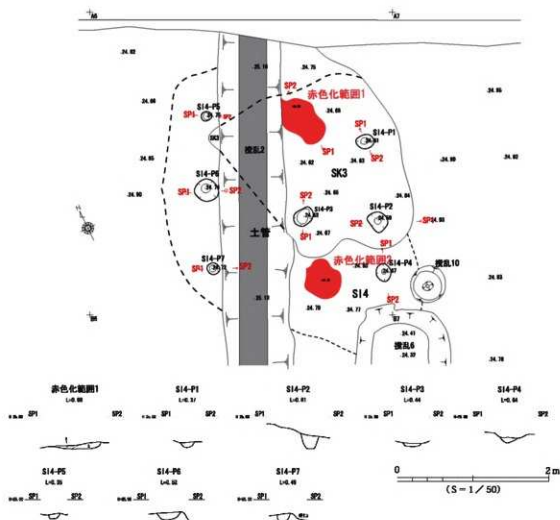


第14図 S12平面図・断面図・遺物分布図

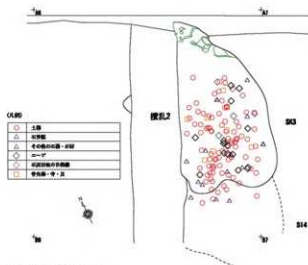


染色標本2

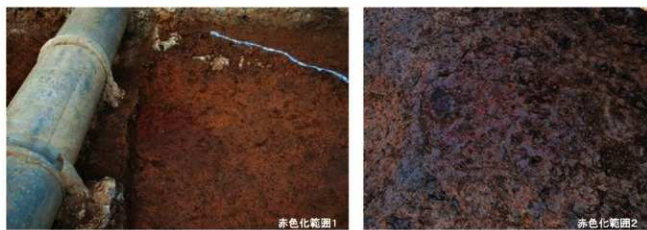
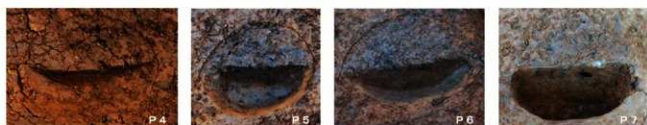
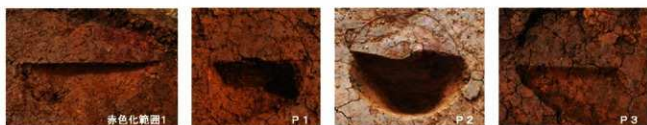
図版9 ST2 遺構検出状況



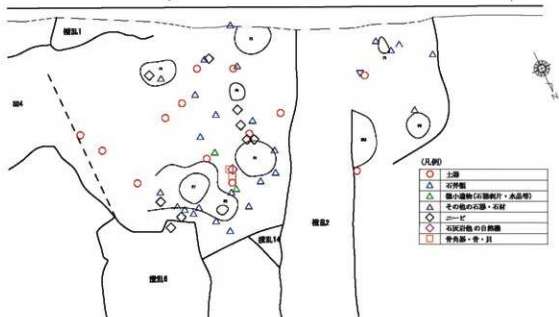
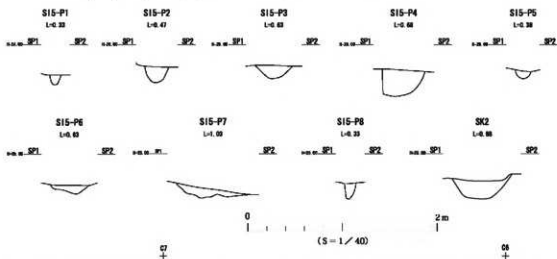
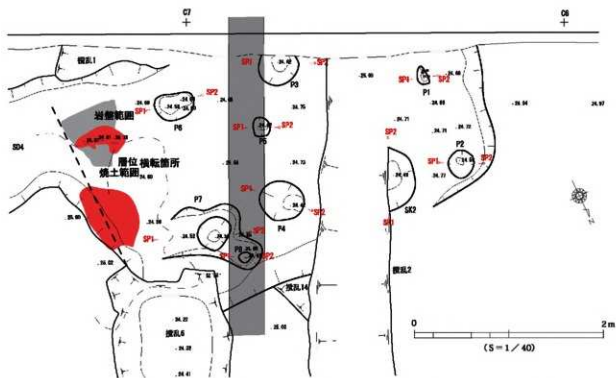
- 赤色化範囲1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒極微量。
 赤色化範囲2 赤褐色粘質土 (10 R 4/4) 特に混入物なし。
 P1・4 にぶい黄褐色粘質土 (10 YR 4/4) 特に混入物なし。
 P2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒極微量。
 P3 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 特に混入物なし。
 P5 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒中量。
 P6 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・マージ粒極微量。しまり強い。
 P7 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒中量。形の残る炭化物も認められた



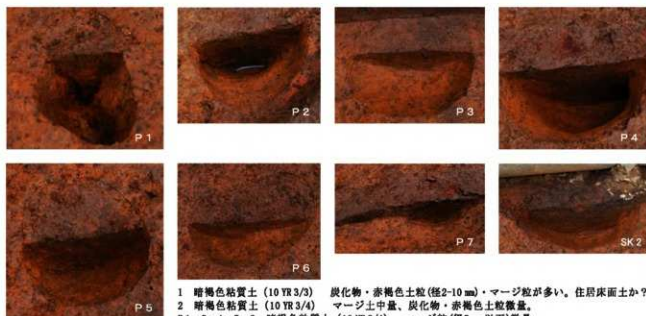
第15図 SK3・SI4平面図・遺物分布図



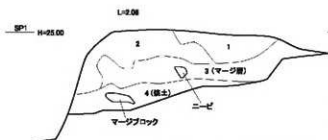
図版 10 SK3・SI4 遺構検出状況



第16図 S15平面図・断面図・遺物分布図



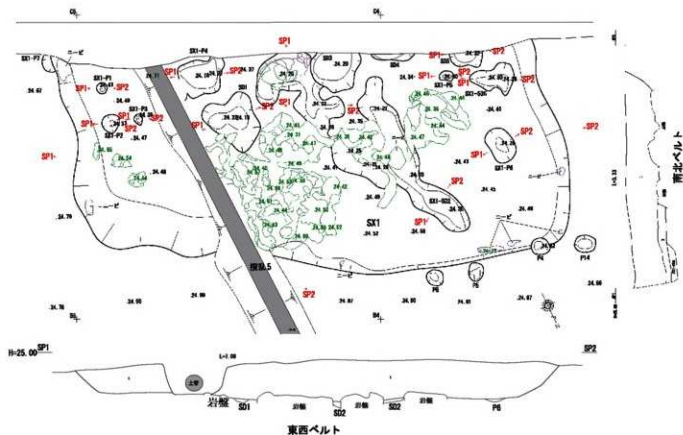
- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) 炭化物・赤褐色土粒(径2-10mm)・マージ粒が多い。住居床面土か？
 2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ土中量、炭化物・赤褐色土粒微量。
 P1・2・4・5・8 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ粒(径5mm以下)微量。
 P3・7 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒・赤褐色土粒・マージ粒(いずれも径5mm)微量。ニーズ含む。
 P6 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒・赤褐色土粒(いずれも径5mm以下)少量
 SK 2 黒褐色粘質土 (10 YR 2/2) 上位にニーズ混入。赤褐色土粒(径10mm以下)・マージ粒(径10mm以下)・炭化物粒微量。SD 4堅穴部分に付属する遺構と思われるが、他の床面遺構に比べてしまりが強い。



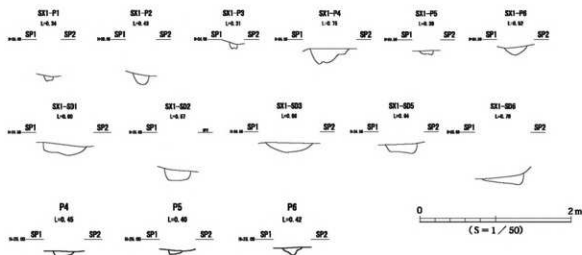
第17図 層位横転箇所



図版 11 SI6 遺構検出状況

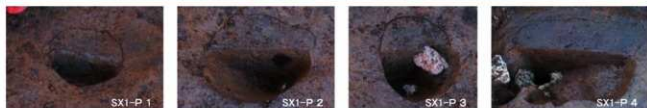
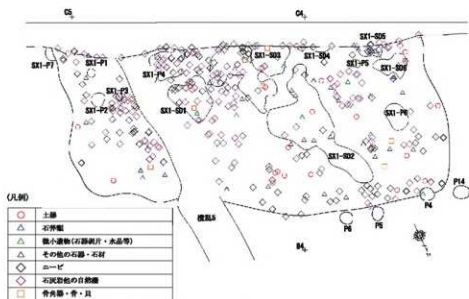


- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 下部は色調が明るくなり、しりも増す。大型のニービ・石灰岩を多く含む。赤褐色土粒ごく微量。マージ粒 (径約5mm)・炭化物粒少量。ニービを含む。
- 2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4)



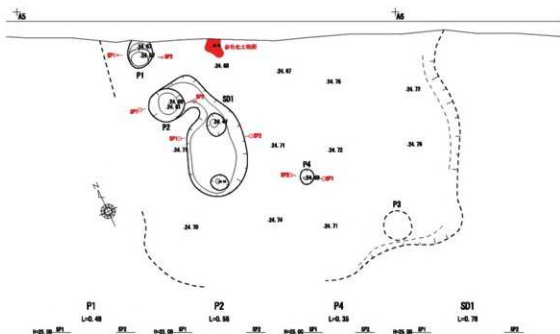
- SX1-P1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ粒少量。
 SX1-P2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ粒少量、赤褐色土粒微量。ニービを含む。
 SX1-P3 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ粒少量、石灰岩礫を含む。
 SX1-P4 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) 炭化物・赤褐色土微量。ニービを含む。
 SX1-P5 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) マージ土中量。
 SX1-P6 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒、赤褐色土粒・マージ粒微量。
 SD1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) マージ粒 (径16mm以下)・ニービ小片微量。
 SD2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ土少量。ニービを含む。
 SD3 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) マージ土少量。ニービを含む。
 SD4 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) マージ土微量。ニービを含む。
 SD5 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) マージ土微量。ニービを含む。
 SD6 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) マージ土少量。
 P4~6 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 下位にマージ土が少量混じる。

第18図 SX1平面図・断面図

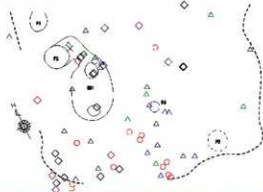
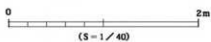


第 19 図 SX1 遺物分布図

図版 12 SX1 遺構検出状況



- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・炭化物微量。上位にコービが多く見られる。上位攪乱の影響で本来土層の観察が困難であった。
- P1・2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) マージ土小量、赤褐色土粒極微量。しまり強い。
- P4 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 特に混入物なし。
- SD1-1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) 赤褐色土粒・炭化物粒微量。
- SD1-2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 石灰岩小片微量。

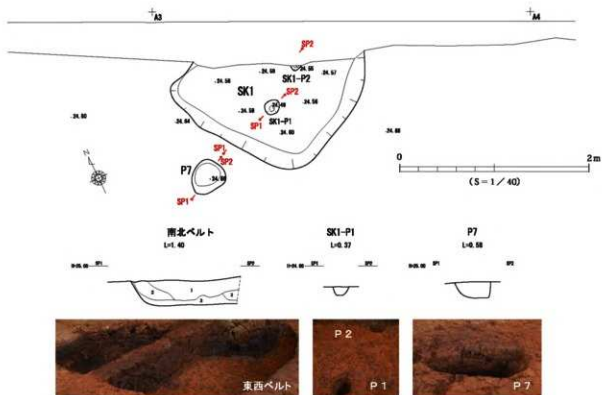


(凡例)

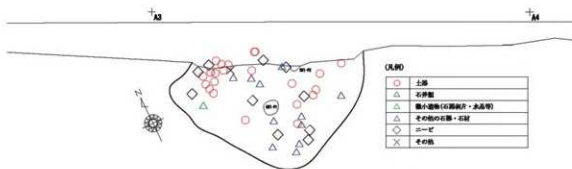
○	土層
△	石浮標
▲	微小遺物(石製鏡片・水玉等)
◇	その他石器・石研
◇	コービ
◇	石灰質土の自然腐
◇	骨角器・骨・貝
X	その他



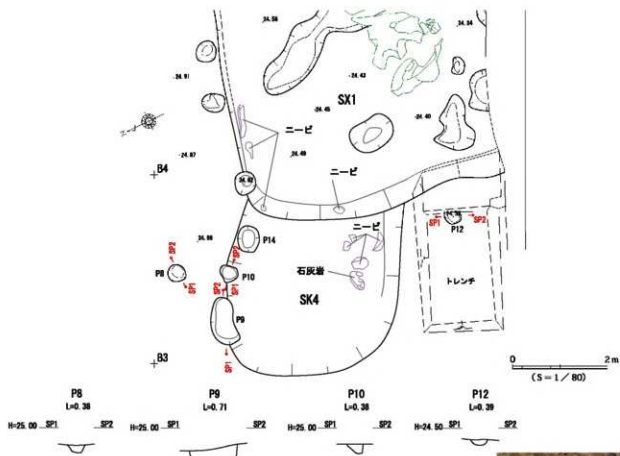
第20図 SI3平面図・断面図・遺物分布図
図版13 SI3遺構検出状況



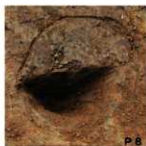
- 1 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・マージ粒微量。
 2 黒褐色粘質土 (10 YR 3/2) 炭化物の影響で黒味を帯びるが、形があるものは微量。遺物が多く、同一個体土器片の集中がみられた。
 3 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) ニービ・マージ粒少量。遺物は殆ど出土しない。
 P1・2 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) 特に混入物なし。
 P7 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 炭化物粒(径約3mm)・赤褐色土粒(径5mm以下)・マージ粒(径5mm以下)微量。ニービ含む。



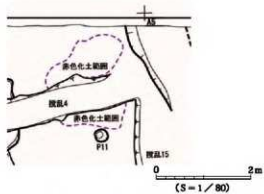
第21図 SK1平面図・断面図・遺物分布図
 図版14 SK1遺構検出状況



- P 8 黒褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・マーシ粒微量。
 P 9 黒褐色粘質土 (10 YR 3/3) 炭化物粒(径約3mm)・マーシ粒(径5mm以下)微量。
 P 10 暗褐色粘質土 (10 YR 3/4) 赤褐色土粒・マーシ粒微量。
 P 12 暗褐色粘質土 (10 YR 3/3) 特に混入物なし。

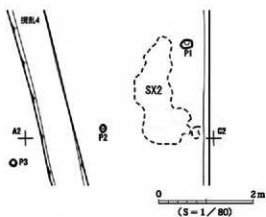


第 22 図 SK4 平面図・断面図
 図版 15 SK4 遺構検出状況



第 23 图 屋外炉平面图

图版 16 屋外炉檢出状況



第 24 图 SX2 平面图

图版 17 SX2 遺構檢出状況

第七章 遺物

今回の発掘調査では、全体で遺物収納用コンテナ66箱分（約5,000点）の遺物が得られている。出土の割合は土器と石器が全体の9割を占め、残りが近・現代の本土産・沖縄産の陶磁器およびその他の遺物である。これらの遺物から想定できるのは、調査地周辺が少なくとも縄文時代後期と近代には人との関わりがあった土地であるということである。以下、土器、石器、骨製品、貝製品、その他、自然遺物に分けて報告する。

1 土器

鏡水名座原A遺跡発掘調査では、破片数にして約3,033点（15,066g）の土器が出土している。土器は、おもにⅦ層からⅧ層まで出土しており、遺構内から残存良好な土器が出土し、又、グリットAB6～AB8のⅦ層からは、石器と共伴して小破片が出土している。

出土土器は、現行編年前期前葉～後期後半（高宮暫定編年前Ⅳ期～後Ⅲ期）に相当もしくは準ずる土器群が出土している。本報告では、出土土器の特徴を大別し、以下のⅤ群に分けている。

龍目文系土器群（面縄東洞式）が第Ⅰ群、点刻線文系土器群（荻堂式・大山）が第Ⅱ群、肥厚口縁系土器群（室川・宇佐浜）が第Ⅲ群、無文尖底系土器群（浜屋原式）が第Ⅳ群、くびれ平底系土器群の第Ⅴ群に比定、もしくは対比できるものが出土している。

本遺跡においては、近隣に縄文・弥生時代の遺跡が良好に残存している状況で、穏やかな入江を擁する立地と当時の古環境のためか、器形・文様・胎土において様々な要素が混在した土器が出土している。特に第Ⅱ群土器における、荻堂式・大山式土器のバリエーションは豊富で、荻堂式土器の最終段階から大山式土器の終末においては、沖縄諸島から出土する標準土器の範疇におさまらないものが多い。以下、分類基準および掲載土器分類、土器分類図一覧、各分類別土器出土分布図、各分類別調整・成形技法・混入物、各遺構の出土土器の状況について本文で説明し、詳細は観察表を参照していただきたい。

土器分類基準

本遺跡出土の土器の分類は以下の基準により行った。まず、各土器を器形・文様、その他の属性により類別し、土器群相互の編年的前後関係を沿って土器様式を群別した。

土器の前後関係については高宮廣衛による暫定編年（注1. 高宮1991）、土器群の分類名称については伊藤慎二の分類（注2. 伊藤1999）に準拠した。

第Ⅰ群：龍目文系土器群（高宮暫定編年前Ⅳ期前葉・縄文時代後期相当）

第Ⅰ群土器は、面縄東洞式土器の中でも、口縁部の襟状肥厚が幅狭で下端が分厚くなる資料や口縁部襟状肥厚部が間延びした資料（古2段階の可能性）が含まれる。本島中部の古我地原貝塚（現うるま市）（注4）から龍目文系土器の片口付の壺が数点、遺構に伴って出土しており、それに類似する。胎土の特徴は、雲母を多量に含む浦添市嘉門貝塚住居址出土資料（注3）などと類似し、沖縄諸島北部や奄美諸島の例とは異なる。なお、型式組成には沈線文系の仲泊式を伴うが、本遺跡では確認できなかった。

第Ⅱ群：点刻線文系土器群（高宮暫定編年前IV期中葉・縄文時代後期相当）

沖繩諸島の暫定編年前IV期を代表する土器群で器形・文様によりいくつかに細分できる。本遺跡でもっとも多数を占める土器群で、荻堂式系土器と大山式系土器がある。荻堂式系土器は、口縁部が屈曲して稜線を形成する資料（中1段階）などはごく僅かで、器形復元できた鋸歯文型（第45図9・10（中2段階））をはじめ、結節平行沈線や角押沈線の横線文を多段に施した横線文型の資料や、瘤状突起部分の破片などが含まれている。

大山式系土器（中3段階～新段階）は、器形復元資料が2個体（第51図21・第60図44・45）出土している。ともに横線文型で、結節平行沈線を施すものと押捺刻文（連続刺突）を施すものが近接した状態で出土していた。器形は頸部強調形で、いわゆる大山式に典型的な器形である。しかし、結節平行沈線を施すものは、従来の一般的な理解では荻堂とも大山とも判断が分かれるような資料である。仮に、結節平行沈線施文部分のみが小破片で出土した場合、通常はいわゆる荻堂式として理解されるもので、小破片であれば判断が難しい資料である。

角押沈線（押引文）の横線文型も、口縁部文様帯に角押沈線の横線文に加えて横位と縦位に隆帯（凸帯）を貼付した資料や隆帯（凸帯）のみで構成されるものもあり、大山式系土器とも凸帯文系土器とも判断が難しい資料である。それらは、古座間味貝塚（注5）から出土した第Ⅱ群土器第6類土器と類似しており、本遺跡における出土状況からも型式組成に含まれるようである。

第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群（高宮暫定編年前IV期～前V期後葉・縄文時代後期相当）

点刻線文系土器群と並んで多い土器群である。片岩などの変成岩系鉱物細粒を多く含む資料は、残存状況が良好である。室川式（古2段階）の資料は、石灰質砂粒を多く含む、またはその痕跡が特徴的な資料は少ない。宇佐浜式（新段階）の資料は、ごく僅かである。

第Ⅳ群 無文尖底系土器群（前V期～後期前半）

後期前半の無文尖底系土器群は、浜屋原式に対比できる資料が数点出土している。標識資料とは異なり、器壁はやや薄手で胎土中の角閃石・輝石類の混入は乏しく、内面の指頭痕と比較的平滑な外器面の特徴のみが共通している。第69図85は、本部町瀬底島・アンチの上貝塚（注6・7）から少量出土している第Ⅳ類のC類に類似している。

第Ⅴ群 くびれ平底系土器群（後期後半）

くびれ平底系土器群は、小型の底部が1点のみである。

<注>

- 1 高宮廣衛『沖繩縄文土器研究序説』1993年5月
- 2 伊藤慎二『琉球縄文文化の基礎的研究』2000年12月
- 3 浦添市教育委員会『嘉門貝塚B』1993年3月 本文26頁 図版60の9～21 196頁
- 4 沖縄県教育委員会『石川市 古我地原貝塚』1987年12月 第39図41 74頁
- 5 沖縄県教育委員会『古座間味貝塚』1982年3月
- 6 本部町教育委員会『瀬底島・アンチの上貝塚』2009年3月 第35図153 80頁
- 7 本部町教育委員会『瀬底島・アンチの上貝塚』2005年3月 第28図145 84頁

2. 土器分類

第Ⅰ群：龍目文系土器群（高宮暫定編年前Ⅳ期前葉・縄文時代後期相当）

1類 面縄東洞式に比定できるもの

- 第1種 片口付壺形・・・第44図1
- 第2種 深鉢形・・・第44図2

第Ⅱ群：点刻線文系土器群（高宮暫定編年前Ⅳ期中葉・縄文時代後期相当）

1類 荻堂式土器に比定できるもの

- 1 a類 空白型・・・確認できず
 - 1 b類 横線文型・・・又状工具・・・第50図12・18・第55図23
横線文型・・・単べら押し・・・第50図19・20・第55図22
 - 1 c類 羽状文型
網状文型・・・第50図11
羽状文型・・・第44図8
 - 1 d類 鋸歯文型
重複鋸歯文型・・・確認できず
複合鋸歯文型・・・確認できず
鋸歯文型・・・又状工具・・・第44図6、第45図9・10、第50図13
鋸歯文型・・・単べら押し・・・第50図16
斜線文型・・・第44図5
 - 1 e類 無文型・・・第55図24・25
その他
縦位区画文 a 直線・・・第44図7、第50図17
縦位区画文 b 曲線・・・第44図4
突起・・・第50図14・15
 - 1 f類 壺形・・・第44図3
- #### 2類 荻堂～大山式に対比できるもの
- 2 a類 横線文型・・・又状工具・・・第51図21、第56図26
横線文型・・・単べら・・・第56図28
 - 2 b類 無文型 a・・・口唇部有文・・・単べら・・・第56図30・31
無文型 b・・・口唇部無文・・・第56図29
 - 2 c類 隆帯を伴う横線文型・・・刺突・・・第56図32、第57図38・39・40
隆帯を伴う横線文型・・・単べら・・・（細）・・・第56図34・35
隆帯を伴う横線文型・・・単べら・・・（太）・・・第56図33・36・37
 - 2 d類 隆帯文型・・・縦横隆帯・・・第58図41・42
隆帯文型・・・横隆帯・・・第58図43
その他・・・又状工具・・・第56図27
- #### 3類 大山式に比定できるもの
- 3 a類 横線文型・・・第59図44・45、第63図46
横線文型・・・押し・・・第63図48・49・50
 - 3 b類 隆帯を伴う横線文型・・・第63図47
 - 3 b類 隆帯を伴う縦羽状文・・・単べら（太）・・・第63図51
 - 3 c類 その他・・・第63図52・53
その他・・・細沈線・・・第63図54

第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群（高宮暫定編年前Ⅳ期後葉～前Ⅴ期前葉・縄文時代後期相当）

1類 室川式土器に比定できるもの

- 1 a 類 空白型・・・・・・・・・・・・・・・・第64図55
- 1 b 類 横線文型・・単べら・・・・・・・・第64図57、第66図65
横線文型・・縦位区画・斜文・・叉状工具・単べら・・第64図56
- 1 c 類 無文型・・アバタ状（雲母入）・・第66図61・62・63・64・66
無文型・・焼成良・・・・・・・・第65図58・59・60
その他・・・・・・・・第66図67
その他・・細沈線・・・・・・・・第66図68

2類 宇佐浜式に比定できるもの・・・・・・・・第68図82・83

底部

第1群 平底（萩堂式系土器・大山式系土器・室川式系土器）

- 1類：底部から急に立ち上がるもの（直線的に立ち上がるもの）
・・第67図69・70・71・72・73・74・75・76
- 2類：底部から緩やかに立ち上がるもの・・第67図77・78、第68図79・81
- 3類：小型の底部・・・・・・・・第68図80

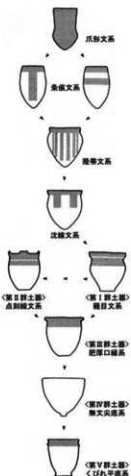
第Ⅳ群 無文尖底系土器群（前Ⅴ期～後期前半）

1類 浜屋原式に比定できるもの・・・・・・・・第68図84・85

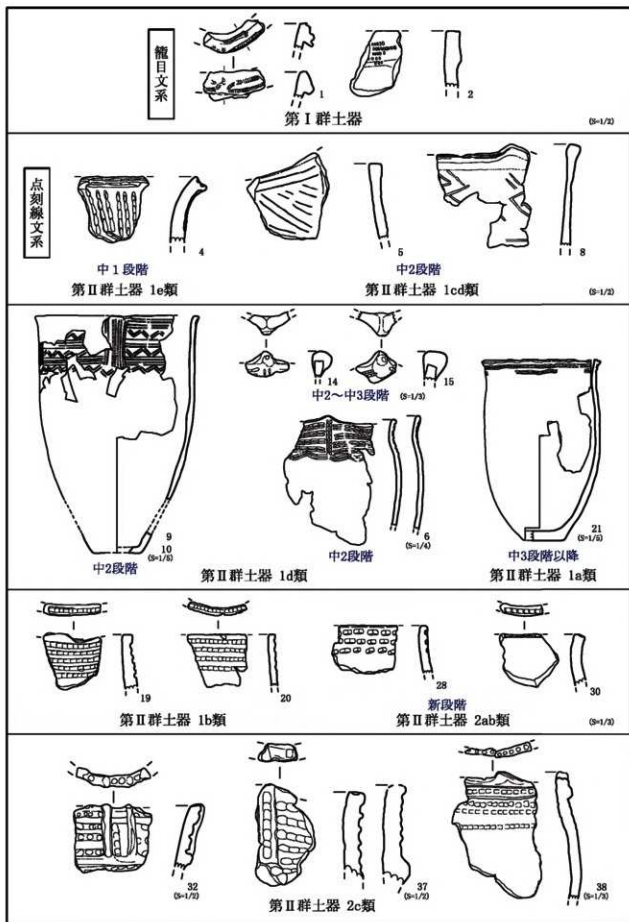
第Ⅴ群 くびれ平底系土器群（後期後半）

1類 くびれ平底・・・・・・・・第68図86

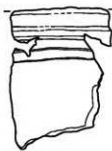
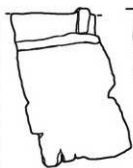
	沖 縄	奄美群島 (那之島・沖永良布島等)	奄美北部 (奄美大島・赤松島)	トカラ
前Ⅰ期	(大空形・野原形)	(+?)	(前子川?)	?
	点刻文系 古器類(ヤブチ式・ヤブチ式)	(+?)	(+?)	?
前Ⅱ期	新1段階 (ヤブチ式・野原タイプ)			?
	新2段階 (萩堂式等)			?
前Ⅲ期	条線文系 古器類 (+)	条線文系 古器類 (新井町跡合グラウンド・中道4期)		?
	(クフニタガマ・鹿川)	(中道4期)		(+)
前Ⅳ期	新1段階 (帯刻式・条線文)			
	(条線文)			
前Ⅴ期	新2段階 (鹿川下層式)			
	(鹿川下層・神野A式)			
前Ⅵ期	鹿野文系 古1段階 (神野B式等)			(+)
	古2段階 (瓦出IIA・B式)			(+)
前Ⅶ期	新1段階 (瓦出IIC・神野C式)			(+)
	新2段階 (新網原式)			
前Ⅷ期	新3段階 (古後地群1式)			(+)
	点刻文系 古器類 (古後地群II・B式、瓦出III及びIV等)	点刻文系 古器類 (古後地群II・B式、志井原式等、下道遺跡1位)	点刻文系 古器類 (古後地群II・B式、クシ遺跡1位等)	?
前Ⅸ期	新器類 (神野式)	新器類 古1段階 (新網原式)		
	古2段階 (新網原式・条線1A・B式)			(+)
前Ⅹ期	条線文系 古1段階 (伊波・神野B式)	新3段階 (条線1B・B式、長浜倉久目)		
	古2～3段階 (伊波式)	(条線1B・B式、新網原式)		(+)
前Ⅺ期	中1段階 (伊波・伊波式)			
	中2～3段階 (伊波式)	(+)	肥厚口縁系 古1段階 (「出雲州式」・手取1層)	(+)
前Ⅻ期	新器類 (大山式等)			
	古2段階 (泉川式、快出器)	古3段階 (大田布1b・IIe～IIIe、大田布式)	古2段階 (「出雲州式」・大田布式、宇野小宮1文化層)	
前Ⅼ期		新器類 (宇佐浜式～宇野上層・基倉1・大田布式)		
		無文尖底系 (神野式)		
後Ⅰ期前半		(阿波遺跡下層式)		(+?)



第2表 琉球縄文土器様式編年表(前Ⅰ期～前Ⅴ期)※伊藤2008編年案に基づく 第25図 琉球縄文土器の文様帯構成 ※伊藤慎二氏より提供



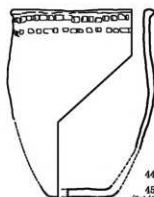
第26圖 土器分類図



41
(9-1/3)

43
(9-1/3)

第II群土器 2d類



44
45
(9-1/4)

第II群土器 3a類



46



51

(9-1/3)

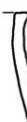
第II群土器 3ab類



肥厚口縁系

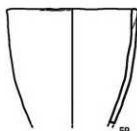


55
(9-1/4)

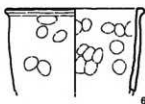


56
(9-1/3)

第III群土器 1ab類



59



60

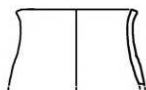


63



65
(9-1/5)

第III群土器 1bc類



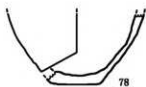
82
(9-1/4)

第III群土器 2類



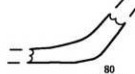
73
(9-1/4)

1類



78
(9-1/4)

2類



80
(9-1)

3類

底部分類第1群土器

3. 各分類別土器出土状況分布図

第27図～第42図は、調査区から出土した土器を各分類ごとに表したものである。

第27図a～第42図aは平面分布図で、遺構内より出土した遺物はオレンジ色、それ以外の遺物が出土した場合は、緑色で示した。No.2000以下の数字は、グリッドもしくは攪乱取り上げとなっている。数字（No.0000）の前に、○の中に数字があるものは、第44図～第68図に掲載されている遺物の番号となっている。

第27図b～第42図bは立面分布図で、縦軸が標高(EL)を横軸がY軸（第10図 調査区位置図及びグリッド設定図参照）を表す。数字は、黒字がAグリッド・赤字がBグリッドとなっており、遺構ごとに○で囲んでいる。○の実線は数字の前に菱形の橙色があるものを囲み、正確な標高を表している。○の破線に数字のみの囲みがあるものは、推定の標高を与えている。

以下、各分類の平面・立面分布図一覧を示す。

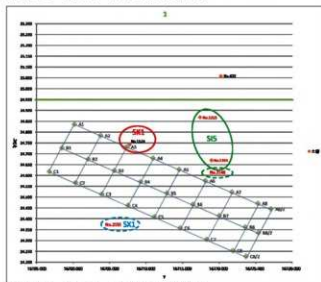
- 第27図ab 第Ⅰ群土器 龍目文系土器群（1）……………面縄東洞式系土器
- 第28図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（1）
1 e類（点刻文）又状工具……………荻堂式系土器
- 第29図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（2）
1 bcde類（結節沈線文）又状工具……………荻堂式系土器
- 第30図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（3）
1 be類（押引文）単匱工具……………荻堂式系土器
- 第31図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（4）2 a類……………荻堂式系土器～大山式系土器
- 第32図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（5）2 b類……………荻堂式系土器～大山式系土器
- 第33図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（6）その他……………荻堂式系土器～大山式系土器
- 第34図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（7）2 c類……………陸帯+点刻文系土器
- 第35図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（8）2 d類……………陸帯文系土器
- 第36図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（9）3 abc類……………大山式系土器
- 第37図ab 第Ⅱ群土器 点刻線文系土器群（10）その他……………大山式系土器
- 第38図ab 第Ⅲ群土器 肥厚口縁系土器群（1）1 abc類……………室川式系土器
- 第39図ab 第Ⅲ群土器 肥厚口縁系土器群（2）1 bc類……………室川上層式系土器
- 第40図ab 第Ⅲ群土器 肥厚口縁系土器群（3）2類……………宇佐浜式系土器
- 第41図ab 第Ⅳ群土器 無文尖底系土器群……………浜屋原式系土器
- 第42図ab 第Ⅴ群土器 くびれ平底系土器群



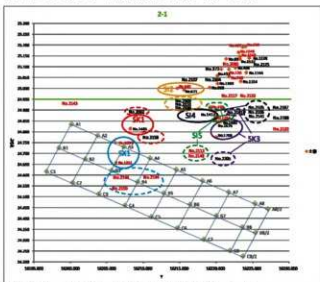
第27圖 a 第I群 縄目文系土器群(1)



第28圖 a 第II群 点刻線文系土器群(1) 1e類



第27圖 b 第I群 縄目文系土器群(1)



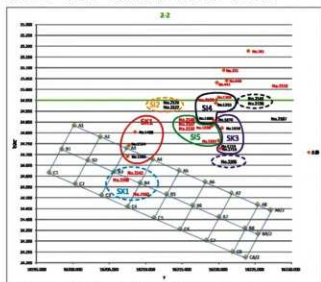
第28圖 b 第II群 点刻線文系土器群(1) 1e類



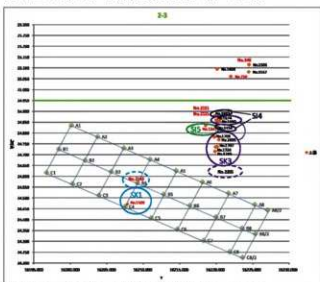
第29圖 a 第II群 点刻線文系土器群(2) 1bcde類



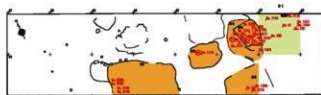
第30圖 a 第II群 点刻線文系土器群(3) 1be類



第29圖 b 第II群 点刻線文系土器群(2) 1bcde類



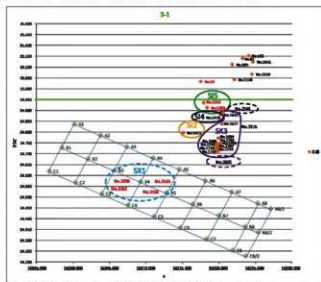
第30圖 b 第II群 点刻線文系土器群(3) 1be類



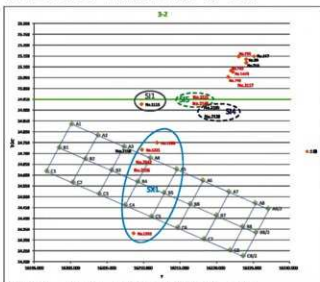
第31圖 a 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (4) 2a類



第32圖 a 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (5) 2b類



第31圖 b 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (4) 2a類



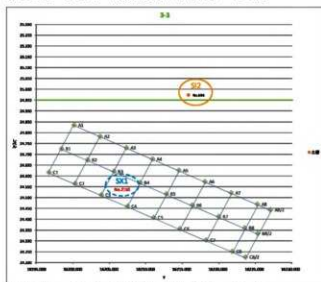
第32圖 b 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (5) 2b類



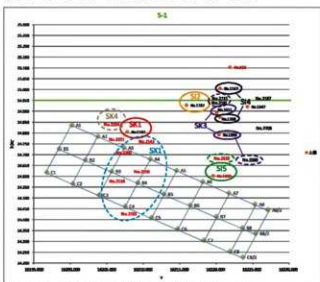
第33圖 a 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (6) その他



第34圖 a 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (7) 2c類



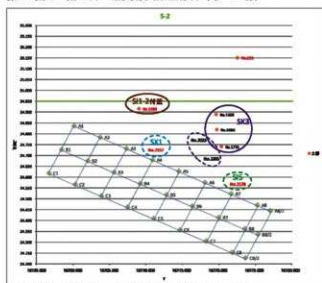
第33圖 b 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (6) その他



第34圖 b 第Ⅱ群 点刻線文系土器群 (7) 2c類



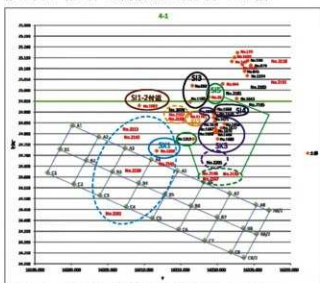
第35圖 a 第II群 点划线文系土器群(8) 2d類



第35圖 b 第II群 点划线文系土器群(8) 2d類



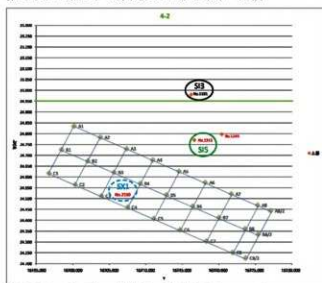
第36圖 a 第II群 点划线文系土器群(9) 3abc類



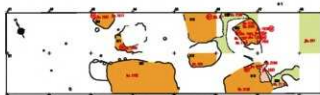
第36圖 b 第II群 点划线文系土器群(9) 3abc類



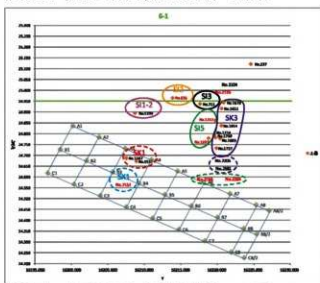
第37圖 a 第II群 点划线文系土器群(10) 3d類



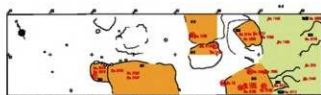
第37圖 b 第II群 点划线文系土器群(10) 3d類



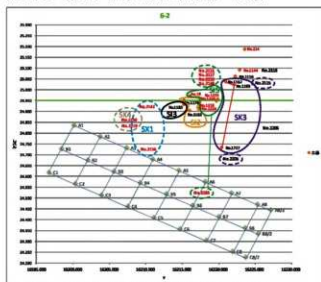
第38圖 a 第III群 肥厚口線系土器群(1) 1abc類



第38圖 b 第III群 肥厚口線系土器群(1) 1abc類



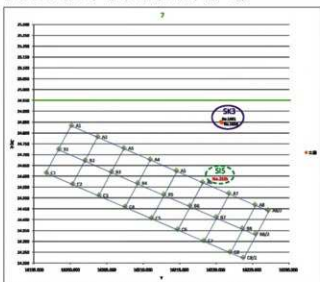
第39圖a 第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群(2) 1bc類



第39圖b 第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群(2) 1bc類



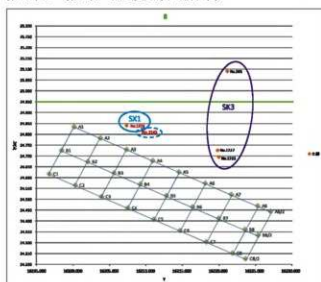
第40圖a 第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群(3) 2類



第40圖b 第Ⅲ群 肥厚口縁系土器群(3) 2類



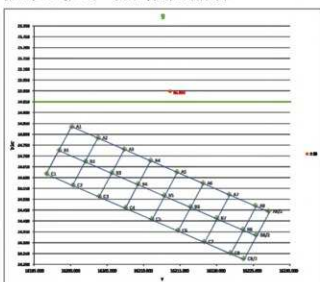
第41圖a 第Ⅳ群 無文尖底系土器群(1)



第41圖b 第Ⅳ群 無文尖底系土器群(1)



第42圖a 第Ⅴ群 <びれ平底系土器群(1)



第42圖b 第Ⅴ群 <びれ平底系土器群(1)

4. 各分類調整・成形技法・混入物

第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器において、比較的大きな資料が多いため、調整・成形技法が明確に観察できるものが多く得られている。以下、各々群別に述べる。

第Ⅰ群土器は、細粒（1mm以下）の混和材を多量に含み、ナデ調整が丁寧で焼成は脆弱である。

第Ⅱ群土器においては、細粒（1mm以下）から、1mm～3mm程の混和材を含むものがある。胎土においても、細粒をふくむもの、細粒及び雲母のような半透明の白色鉱物を含むものは、触感がざらざらしている。焼成は、堅緻なものよりも脆弱なものが多い。

泥質のものになると、混入物が大きくなり1mm～3mmのものが顕著となる。白色鉱物はそれらにも含まれることが多く、触感はサラサラしている。凸帯を有するものの一部には、暗褐色鉱物を含む場合がある。焼成は、堅緻なものが多い。前者は、内外面共に刷毛目調整が多く、口縁部施文部位のみナデ消すようである。後者は、内外面はともに刷毛目調整から指ナデ整形が多少増えている。

第Ⅲ群土器においては、細粒（1mm以下）から、1mm～3mm程の混和材を含むものがある。細粒及び雲母のような半透明の白色鉱物を含むものは、触感がざらざらしている。石灰岩を含む場合が少量ある。また、アバタ状を呈するものがあり、1mm以下の雲母のような半透明の白色鉱物を含むものが多い。前者は、外面は刷毛目調整、内面は指ナデ整形が増えており、焼成は堅緻である。後者は、指ナデ整形が多いようで、焼成は脆弱で、触感はツルツルとしている。

第Ⅳ群土器においては、胎土が泥質で整形が丁寧である。半透明の白色鉱物を含み、2～3mm程の赤色鉱物の細粒が少量混入している。触感はサラサラで、焼成は堅緻である。

第Ⅴ群土器においては、胎土が泥質で整形が丁寧である。1～2mm程の赤色鉱物の細粒が少量混入している。触感はサラサラで、焼成は堅緻である。

5. 各遺構出土土器状況

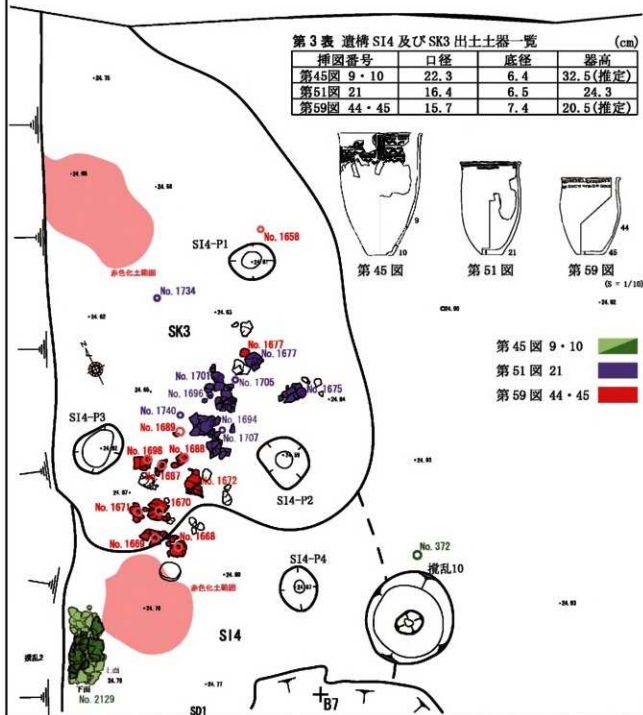
それぞれ土器の特徴が捉えやすい土器を対象に、分類をおこなった。遺構の状況と合わせて、遺物の出土状況から各遺構の繁期を提示してみたい。

- SI1-1 SI1-1とSI1-2は重なりあった遺構である。SI1-1は、長径2.05m×短径1.96mと隅丸方形の遺構で、上部は戦後造成の攪乱をうけ、遺物が小破片で分類不明である。
- SI1-2 SI1-2は、長径3.02m×短径2.72mと略方形の遺構である。第Ⅱ群土器2b類、第Ⅲ群土器1類1点、2類1点出土している。
- SI2 長径3.15m×短径2.72mの隅丸長方形の遺構が良好な状態で検出された。確認出来た遺物は小破片である。第Ⅰ群土器1点、第Ⅱ群土器1e類4点、1bcde類2点、2a類1点、2c類1点、3abc類2点、第Ⅲ群土器1bc類3点が出土している。
- SI4 長径3.3m×短径 推定3.5mの隅丸長方形の遺構が良好な状態で、SK3の土壌と切りあい関係を保ちながら検出された。SI4の遺構を切るように、SK3が検出されたので、遺構の切りあい関係はSI4の遺構が古い。遺物も、第Ⅱ群土器1e類7点、1bcde類132点、2a類2点、2b類3点、2c類1点と第Ⅱ群土器が圧倒的に多く、残存状況も良好である。
- SI5 長径5.0m×短径 推定2.9mの隅丸長方形の中型遺構が良好な状態で検出された。東南東に壁面が立ち上がる地床炉が検出され、遺物もそれに伴うように赤黒く変色しているものが認められる。第Ⅰ群土器4点、第Ⅱ群土器1e類3点、1bcde類8点、1be類1点、2a類4点、2b類2点、3abc類8点、第Ⅲ群土器1abc類4点、1bc類8点、2類1点が出土している。

- SX 1 長径6.58m×短径2.58m以上の隅丸長方形の大型遺構である。床面より下部から、第Ⅰ群土器一面縄東洞式土器の片口壺形の口縁部が1点出土している。第Ⅱ群土器1e類6点、1bcde類4点、1be類3点、2a類5点、2b類5点、2類その他1点、2c類3点、2d類1点、3abc類8点、第Ⅲ群土器1abc類1点、1bc類3点、第Ⅳ群土器3点が出土している。
- SI 3 長径3.5m×短径2.56m以上の隅丸長方形の中型遺構である。SI 1と同様に上部は攪乱され、グリットB1からはしる土管埋設に伴う攪乱により、遺構検出は残存状況が悪かった。第Ⅱ群土器3abc類1点、3d類1点、第Ⅲ群土器1bc類1点が出土している。
- SK 1 長径1.5m×短径1.6mの小さな土壌である。第Ⅰ群土器3点、第Ⅱ群土器1e類2点、1bcde類3点、2b類1点、第Ⅲ群土器2点が出土している。
- SK 3 長径推定2.3m×短径推定2.1mの略方形の土壌である。完形に近い遺物が二点、比較的大きな破片が出土し、遺物が密集した状態で出土している。第Ⅱ群土器1e類12点、1bcde類11点、1be類8点、2a類102点、2b類2点、2c類4点、2d類3点、3abc類84点、第Ⅲ群土器1abc類7点、1bc類3点、2類3点、第Ⅳ群土器2点が出土している。
- SK 4 長径1.8m×短径推定1.7mの隅丸方形の土壌である。SX 1と切りあい関係にある土壌で、SX 1を切る新しい遺構である。第Ⅱ群土器2c類1点、第Ⅲ群土器1abc類1点、1bc類1点が出土している。

第3表 遺構S14及びSK3出土土器一覧 (cm)

挿図番号	口径	底径	器高
第45図 9・10	22.3	6.4	32.5(推定)
第51図 21	16.4	6.5	24.3
第59図 44・45	15.7	7.4	20.5(推定)



第43図 遺構S14及びSK3土器出土状況 (S = 1/200)

(No. 0000 は取上番号である。)

第45図9・10、第51図21、第59図44・45の土器の出土状況で、いずれの土器も完形に近く、推定底部を充てた第45図9と第59図44は推定器高もでている。第45図9は、遺構S14の南西で出土しており口縁部を北東にして折り重なるように出土し、土器裏面を上にして検出された。第51図21は、遺構SK3の東南で出土しており口縁部および底部を東にして出土した状況で、土器裏面を上にして検出された。第59図44は、遺構SK3の南で出土しており、一方は口縁部を東・南向きで土器表面を上にもう一方は口縁部を西と南西向きで土器裏面を上にして検出された。

階号及び連続	位置及びグリッド	第II群土層											第III群土層				第IV群土層	第V群土層	合計																
		第I群土層		1e 層		1 be 層		2a 層		2b 層		2c 層		2d 層		3 abc 層				3 d 層		1 abo 層		2 層											
		個	価	個	価	個	価	個	価	個	価	個	価	個	価	個				価	個	価	個	価	個	価	個	価							
SK1	A3	3	13	2	16	2	46																			10	192								
SK1下	A3			1	9																						1	9							
SK3	A6	10	85	8	120	8	273	102	843	1	29	4	33	3	256	84	565			7	340	3	130	2	96	2	54	234	2624						
SK4	B3																											2	21						
SK4-P1	B3																											1	13						
SK1	B3	1	16	1	2	1	16	2	6																										
B3-4	B3	3	22	3	10	1	13	3	13			1	8	3	25			5	16																
B4	B4	1	5	2	13					1	11			4	48			1	8	1	29														
SX1-SD2	B4																																		
SI1	A3																																		
SI2	A5			1	6			1	21																										
SI2-II階	A5																																		
SI2上	A5																																		
SI2	A6			2	7																														
B5	B5			1	6	1	4																												
B6	B6	1	8																																
SI2(P)	B5			1	1																														
SI3	A5																																		
SI3上	A5																																		
SI4	A6					131	1000	1	-																										
A7	A7																																		
AB6	AB6			2	7	1	5																												
SI4 SK3	A6			5	14			2	5																										
SI5	B6	1	7	2	4	4	24	1	14	1	2	6																							
B7	B7	1	8			3	28																												
SI5(SD1上)	B6					1	4																												
SI5(階層SD4)	B6	2	10					1	1																										
B7	B7			1	4																														
SI5(SD4下)	B7																																		
SI5(P7)	B6																																		
合計		13	72	63	352	168	1331	20	487	121	940	28	170	2	19	22	379	8	336	122	813	2	30	22	619	30	537	3	102	6	124	1	3	631	6514

第4表 分類別土器集計表(胴部)

層序 及び 遺構	位置 及び グリッド	第Ⅱ群									第Ⅲ群						第Ⅳ群	合計				
		1d類		1bcde類		2ab類		2c類		2d類		3abc類		1c類 (実質)		1c類 (焼成良) (アノタ状)				2類		
		個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個				g	個	g
3層	試験坑 F									1	2									1	2	
3層上	試験坑 F									4	12	10	9		1	17					15	38
4層	試験坑 NO.1									3	15				1	4					4	19
4層	試験坑 NO.4									9	14				4	5					13	19
5層	試験坑 NO.5	1	5	7	47			13	66	26	61	3	1		13	98					63	278
5層	試験坑 NO.5									2	3				1	3					3	6
カクラン2 (SK 3・ SI 4)	AB 6	2	23																		2	23
カクラン4	AB 1~4							1	13												1	13
カクラン14	AB 56													1	4						1	4
カクラン15	AB 45													1	6						1	6
カクラン16	B 3~7	1	7																		1	7
カクラン17	AB 56					1	1														1	1
カクランVI層		1	3																		1	3
SD 1	A 7													1	6						1	6
SD 1下	A 6	1	11					2	33												3	44
	A 7			1	2																1	2
	B 6	1	14																		1	14
SD 2	A 8	16	52	5	12									13	37	7	12			41	113	
SD 3	A 8														3	2					3	2
	B 7	1	5			2	3										1	2			4	10
	B 8	7	9					1	1												8	10
SD 4	B 6	1	12	4	14	28	61							15	45	18	35			66	167	
	B 7	3	9	1	10	12	52			1	1					26	50			43	122	
V・VI層	AB 123	3	5																		3	5
VI層	A 3	3	10	1	7																4	17
	AB 456			2	6																2	6
	AB 56					2	5														2	5
	B 8	1	12																		1	12
VI・VII層	A 5	5	4	2	5							3	6	1	4	2	9			13	28	
	A 6					1	1					1	2								2	3
	A 7					2	3								1	7					3	10
	A 8			1	4																1	4
	B 4					1	2														1	2
	B 5					1	1														1	1
	B 6	4	12					4	29						3	5					11	46
	B 7													4	16	1	1				5	17
	AB 678					1	2														1	2
	A 2										1	3										1
A 3	1	20	2	4																	3	24
A 4	3	12																			3	12
A 5	39	96	1	3						2	6			19	63	3	16			64	183	
A 6	5	15	30	82	1	5	2	18	19	260			1	8	15	42				73	430	
A 7	24	149	67	146			2	5					22	89	32	70	21	61			168	520
A 8			31	72	5	13						2	2	14	36	6	9				58	132
B 3	9	38												1	11	2	3	3	7		15	59
B 4	11	22			2	7	1	1						2	5	1	5				17	40
B 5	12	36												8	18	6	11				26	65
B 6					2	12															2	12
B 7			4	13			39	111	24	59				3	24	13	38	3	7		86	252
B 8	31	72	20	47			27	67			2	2			7	29	8	14			95	221

層序 及び 遺構	位置 及び グリッド	第Ⅱ群									第Ⅲ群						第Ⅳ群		合計									
		1 d 類		1 bcde 類		2 ab 類		2 c 類		2 d 類		3 abc 類		1 c 類 (肥質)		1 c 類 (焼成炭)					1 bc 類 (アバタ状)		2 類					
		個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g					
Ⅷ層(SD 1)	A 7			5	12	1	3											3	4					9	19			
Ⅷ層 SD 3	B 8					2	32					1	2					2	12							5	46	
Ⅷ層	A 3			5	5																					5	5	
	A 5			2	4																					2	4	
	A 6	3	5	14	33	4	19											6	17	1	3					28	77	
	A 7	28	133									3	3	3	29	11	57	18	42							63	264	
	A 8			12	55	3	10											2	6	3	5					20	76	
	B 3	6	31	4	6																					10	37	
	B 7	2	5			20	41	1	14									5	10	2	14					30	84	
P 3	A 1																									1	2	
SK 1	A 3	18	57	4	48	1	3	1	4			3	25	2	4			3	5							32	146	
	B 34	1	19																	15	43					16	62	
	B 4											11	32													11	32	
SK 1下	A 3											5	56	1	10					5	17					11	83	
SK 3	A 8	88	319	23	100							128	484			32	313	3	10							274	226	
SK 4	B 3	3	21			1	1	1	6			1	18			2	17	7	23							15	86	
SK 4-P 1	B 3																			20	60					20	60	
SX 1	B 3	34	248			1	5	23	98	1	16			2	13	12	50									73	430	
	B 34	85	399	11	31	2	14	20	59			12	59	3	49	10	85									143	696	
	B 4	55	327	28	85			4	12	2	14					30	180									119	618	
SX 1-P 8	B 3							1	6							2	6									3	12	
SX 1-SD 3	B 3							1	5																	1	5	
SI 1	A 3	8	66							6	21					4	20	3	34			1	7	22	148			
	A 4			2	3											1	4	1	3	1	12					5	22	
SI 1-P 4 最下部	A 3					1	2																			1	2	
SI 2	A 5	3	11	1	1			4	17			2	23	4	18											14	70	
SI 2 (SI 2下部)	A 5											1	5													1	5	
SI 2	A 6	1	8	1	1	2	8											2	4							6	21	
	B 5	1	9	4	7			3	12	3	12					4	14									15	54	
	B 6					4	10	3	1	5	32	1	2					4	7							17	52	
	AB 5	4	19													1	6									5	25	
	AB 56					2	4							1	6	1	2									4	12	
SI 3	A 5	1	9																							1	9	
SI 3(SI 3上)	A 5			4	31							3	24			6	6									13	61	
SI 3-SD 1	A 5											1	17													1	17	
SI 4	A 6															6	21									6	21	
	A 7																	3	5							3	5	
	AB 6	30	58	7	17	1	3	3	10							2	10									43	98	
(SI 4) SD 1下	A 7									2	36															2	36	
SI 4 SK 3	A 6	2	20					9	44	8	32															19	96	
SI 5	B 6	70	199	1	9	8	48	19	55			15	36			18	76	132	75							263	498	
	B 7	9	25	18	31			4	21	5	27			1	3	5	14	10	17							52	138	
SI 5 (Ⅷ層 SD 4)	B 6	8	57									1	14	1	11			1	2							11	84	
	B 7			2	7													8	15							10	22	
SI 5(SD 4)	B 7													1	39											1	39	
SI 5(SD 4下)	B 7					1	1			1	14															2	15	
SI 5(層位)	B 7					10	27	1	7					1	4	38	65									50	103	
SI 5・P 4	B 6					3	8	2	1																	5	9	
合計				646	2697	327	960	128	407	192	706	121	630	206	763	57	401	329	1467	394	702	1	12	1	1	7	2402	8752

第5表 土器観察一覧

(mm)

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 底器 器厚	色調	胎土・焼成	備考	出土地点
第44図 1 図版18の1	壺 口縁部	— — 3~10	外: 橙 5YR6/6 内: 橙 5YR7/6	大きさ0.5~1mm程の白色鉱物・石英・雲母の細粒が少量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	壺の口縁部で、丁寧に調整される。口唇部から口縁部全体に、籠編み状の構成文様が刷る。口唇部に一条、口縁部に三条の文様を施す。	B4 グリッド S X 1 (東側40cm以下) №2155
第44図 2 図版18の2	壺 口縁部	— — 6~8	外: 明黄褐 10YR6/6 内: 褐 7.5YR4/6	大きさ0.5mm以下の細粒が混入している。光沢のある半透明白色鉱物粒が少量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の壺である。口縁部を肥厚させ、籠編み状の構成文様が埋めるようであるが、摩耗がはげしく、文様の判別が難しい。	B6 グリッド S 15 №2148
第44図 3 図版18の3	壺 口縁部	— — 5.5~6.5	外: 暗褐 7.5YR3/3 内: 褐 7.5YR3/2	大きさ1~2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	壺の口縁部で、波状口縁のようである。口唇部及び外側は丁寧にナゲ調整がなされ、内側の胴部には調整痕が残る。	A3 グリッド S K 1 上 №1488
第44図 4 図版18の4	深鉢 口縁部	— — 8	外: 褐灰 5YR4/1 内: 橙 5YR6/6	大きさ1~2mm程の白色鉱物の細粒が少量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部である。又状工具による施文で、縦位区画に四条が確認でき、第二文様帯に鋸歯文を施す。	B7 グリッド S 15 №1208
第44図 5 図版18の5	深鉢 口縁部	— — 5~7.5	外: 明黄褐 10YR6/6 内: にぶい黄褐 10YR6/4	大きさ1~2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、波状口縁のようである。又状工具による施文で、縦横に区画文を配し、中を斜線文で埋める。摩耗が激しい。	A7 グリッド VII層 №1538
第44図 6 図版18の6	深鉢 口縁部	90~160 — 5	外: 明赤褐 5YR5/6 内: 褐灰 5YR5/1	大きさ1~2mm程の白色鉱物・石英の細粒が少量に混入しており、5mm程の大きな石英粒が少々混じる。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	山形口縁で、内外面ともにナゲ調整が行われ、内側の胴部には調整痕が残る。又状工具による施文で、縦位に一条の区画文を配し、四条の横線文を施す。下部に鋸歯文を施す。	A6 グリッド S14 (SD1上部) №1353・2141
第44図 7 図版18の7	深鉢 胴部	— — 4~7.5	外: 明赤褐 5YR5/6 内: にぶい赤褐 5YR4/4	大きさ1~2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	深鉢の胴部で、胴部が張り出す器形のようなものである。又状工具による施文で、縦位区画を配し、横線文を施す。摩耗が激しく、文様が不鮮明である。	B3 グリッド S X 1 (20/40)cm №1351
第44図 8 図版18の8	深鉢 口縁部	— — 3~5	外: 赤褐 5YR4/8 内: 明赤褐 5YR5/6	大きさ0.5mm以下の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、波状口縁である。又状工具による施文で、横位に区画文を配し、中を羽状文で埋める。口唇部に刻みを施す。摩耗が激しい。	B8 グリッド VII層 (S D 3) №1137
第45図 9 図版21の9	深鉢 口縁部 ~胴部	22.3 — 32.5 —	外: 黒褐 5YR3/1 内: 暗赤褐 5YR3/2	大きさ0.5mm以下の細粒が少量に混入している。2mm~5mm程の石英粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	山形口縁の深鉢である。又状工具による施文で、縦位に五つの区画文を配する。第一・三・五文様帯に横線文を、第二・四・六文様帯に鋸歯文を施す。口唇部に又状工具による押し引き文を施す。摩耗が激しい。	A B 6 グリッド S14 (SD1上部) №2129
第45図 10 図版21の10	深鉢 底部	— 6.4 — 5~8	外: にぶい赤褐 5YR5/4 内: 赤褐 5YR4/6	大きさ0.5mm以下の細粒が少量に混入している。2mm~5mm程の石英粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	第45図9の底部破片と思われる。実測図での復元を試みた。	A7 グリッド VII層 №372

(mm)

押図番号 図版番号	器 種 部 位	口 径 厚 器 器 最大厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第50図 11 図版23の11	深鉢 口縁部 胴部	— — 6.5 —	外: — — 内: 赤褐 5YR4/6	大きさ0.5～1mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、丁寧に調整される。又状工具による施文で、縦位区画文および横線文を施す。同一個体と思われる胴部は、羽状文を施す。	B 4 グリッド SX1 東Ⅷ層 (20/40)cm №2160 №2188
第50図 12 図版23の12	深鉢 口縁部	— — 8.5 —	外: 暗褐 10YR3/4 内: 赤褐 5YR4/6	大きさ2mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、丁寧に調整される。又状工具による施文で、横線文が施される。	試掘坑4 V層
第50図 13 図版23の13	深鉢 口縁部	— — — 5～8	外: — — 内: 暗赤褐 5YR3/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は施弱である。	鉢の口縁部で、丁寧に調整される。又状工具による施文で、刺書文が施される。補修孔がある。	A 8 グリッド Ⅷ層 (0/10)cm №2187
第50図 14 図版23の14	深鉢 口縁部	— — — 4 15	外: 明赤褐 5YR5/6 内: 明赤褐 5YR5/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、瘤状突起の部分である。又状工具による施文で、縦位区画文を一条、横位区画文が廻る。	A 6 グリッド S 14 №1680
第50図 15 図版23の15	深鉢 口縁部	— — 7 18	外: — — 内: 暗赤褐 5YR3/3	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、瘤状突起の部分である。又状工具による施文で、縦位区画文、横位区画文が(放射状に)施文される。	B 7 グリッド S 15 №1331
第50図 18 図版23の18	深鉢 口縁部	— — — 5～7	外: — — 内: — — 内: 赤褐 5YR4/4	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入しており、5mm程の大きな石英粒が少々混じる。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の波状口縁で口縁部のつくりは雑である。単べら工具による施文で、横位に四条、第二文様帯に刺書文を施す。	A 6 グリッド S K 3 №1709
第50図 17 図版23の17	深鉢 口縁部	— — — 3～5	外: 灰褐 5YR4/2 内: — — 内: 赤褐 5YR4/3	大きさ0.5mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、波状口縁のようである。丁寧に調整される。又状工具による施文で、縦位区画文、横位区画文を廻らす。	A 7 グリッド Ⅶ層 №1557
第50図 18 図版23の18	深鉢 口縁部	160 — — 5～8	外: — — 内: — — 内: 赤褐 5YR4/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入しており、3～5mm程の大きな石英粒が少々混じる。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、平口縁のようである。胴部に最大径があり、丁寧に調整される。又状工具による施文で、縦位区画文に二条、横位に三条施す。	A 6 グリッド S K 3 №1676
第50図 19 図版23の19	深鉢 口縁部	— — — 9.5 —	外: 暗赤褐 5YR3/3 内: — — 内: 黒褐 5YR3/1	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入しており、3～5mm程の大きな石英粒が少々混じる。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、波状口縁である。単べら工具による施文で、横位に五条、口唇部に一条施す。	A 6 グリッド S K 3 №1724
第50図 20 図版23の20	深鉢 口縁部	— — — 5 —	外: 暗赤褐 5YR3/3 内: — — 内: 黒褐 2.5YR4/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、平口縁である。単べら工具による施文で、横位に四条、口唇部に一条施す。	B 3 グリッド S X 1 №1569

(mm)

挿図番号 図版番号	器種 部位	口径 底器 器厚	色調	胎土・焼成	備考	出土地点
第51図 21 図版25の21	深鉢 口縁部 ～底部	164 65 243 5～6	外：褐灰 5YR4/1～ 橙5YR4/2 内：灰褐 5YR4/2～ 橙5YR5/8	大きさ1～3mm程の白色鉱物・ 石英の細粒が少量に混入して いる。丁寧に整形、触感 はサラサラで、焼成は堅緻 である。	深鉢の完形である。丁寧に調整 される。又状工具による施文で、 横位に一条を廻らせ、四か所に 短い横位の区画文を施す。	A 6 グリッド S K 3 №1675, 1677 1694, 1696, 1710 1705, 1707, 1734 1740, 2205
第55図 22 図版27の22	深鉢 口縁部	174 — 5～6	外：褐灰 5YR4/1 内：赤褐5 YR4/8	大きさ0.5mm程の白色鉱物が 多量に混入している。大きさ 1～3mm程の白色鉱物・石英 の細粒が混入している。丁寧 に整形、触感はザラザラで、 焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整さ れる。車べらによる施文で、縦位 に六条の区画文を配し、横位に 七条を廻らせる。車耗が激しい。	A 6 グリッド S K 3 №1707, 1732 №2205
第55図 23 図版27の23	深鉢 口縁部	— — 5～8	外： — — — 内：暗赤褐 5YR2/3 赤褐 5YR4/6	大きさ0.5mm程の赤色鉱物・ 白色鉱物の細粒が混入して いる。丁寧に整形、触感は サラサラで、焼成は堅緻であ る。	波状口縁の深鉢で、丁寧に調整 される。又状工具による施文で、 縦位に一条、横位に四条を廻ら せる。	A 7 グリッド VII層 №1154
第55図 24 図版27の24	深鉢 口縁部	— — 5～7	外： — — — 内：明赤褐 2.5YR5/8	大きさ0.5mm程の白色鉱物・ 光沢のある半透明白色鉱物 粒が多量に混入している。 大きさ1～3mm程の白色鉱物・ 石英の細粒が混入している。 丁寧に整形、触感はサラサ ラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、無文である。	A 6 グリッド S K 3 №1716
第55図 25 図版27の25	深鉢 口縁部	146 — 7	外：暗赤褐 5YR3/2 内：同上	大きさ0.5mm程の白色鉱物・ 光沢のある半透明白色鉱物 粒が多量に混入している。 大きさ1～3mm程の白色鉱物・ 石英の細粒が混入している。 5mm程のチャートの薄い剥片 が散見できる。丁寧に整形、 触感はサラサラで、焼成は 堅緻である。	平口縁の深鉢で、無文である。	A 3 グリッド S K 1 上 №1524
第56図 26 図版28の26	深鉢 口縁部	— — 6～7	外： — — — 内： — — — 内：にぶい橙 5YR6/4	大きさ1～2mm程の石英の細 粒が混入しており、チャート の小さな粒が散見される。丁寧 に整形、触感はサラサラ で、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部である。丁寧に調 整され、又状工具による施文で、 横位に一条（右⇒左）を廻らせ る。	A 5 グリッド VII層 №694
第56図 27 図版28の27	深鉢 口縁部	— — 7～11	外：暗赤褐 5YR3/6 内：赤褐 5YR4/6	大きさ0.5mm程の白色鉱物や チャートの細粒が混入してい る。大きさ1～2mm程の石英 が散見される。丁寧に整形、 触感はザラザラで、焼成は 脆弱である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整さ れる。口唇部直下2cm程の所 に凸帯を貼り付け、その間を又 状工具による斜線文（右上⇒左 下）で埋める。	B 3・4 グリッド S X 1 №2150
第56図 28 図版28の28	深鉢 口縁部	— — 5～8	外： — — — 内：赤褐 5YR4/6	大きさ0.5mm程の白色鉱物や チャートの細粒が混入してい る。大きさ1～2mm程の石英 が散見される。丁寧に整形、 触感はザラザラで、焼成は 脆弱である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整さ れる。車べら工具による施文で、 横位に三条を廻らせる。	A 5 グリッド S I 2 №1415
第56図 29 図版28の29	深鉢 口縁部	— — 5～7	外：赤褐 5YR4/8 内：同上	大きさ0.5mm程の白色鉱物・ 光沢のある半透明白色鉱物 粒が多量に混入している。 大きさ1～3mm程の白色鉱物・ 石英の細粒が混入している。 丁寧に整形、触感はサラサ ラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整さ れる。	B 3・4 グリッド S X 1 №2150

押図番号 図版番号	器 種 部 位	口径 底器 器厚 凸器厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第56図 30 図版28の30	深鉢 口縁部	— — 9 —	外: 赤褐 5YR4/6 内: 同上	大きさ0.5mm程の白色鉱物が多量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部に、単べら工具による施文が施される。	B4 グリッド S X 1 No.1321
第56図 31 図版28の31	深鉢 口縁部	— — 6~8 —	外: 橙 7.5YR6/6 内: 明赤褐 5YR5/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粗粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部に、単べら工具による施文が施される。	B4 グリッド S X 1 No.1595
第56図 32 図版28の32	深鉢 胴部	— — 6 9	外: 暗赤褐 5YR3/3 内: 明褐 7.5YR5/6	大きさ0.5~2mm程の暗褐色色鉱物が多量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英の細粒が混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部直下約3cmに凸帯を縦位に二条・横位に二条貼り付け、その中を細い単べら工具により縦横に押し引き文(左→右)がなされる。口唇部にも刺突が施される。	A6 グリッド S K 3 No.1651
第56図 33 図版28の33	深鉢 口縁部	— — 6 10	外: 明褐 7.5YR5/8 内: 同上	大きさ1~3mm程の白色・赤色鉱物の粒や、0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が多量に混入される。大きさ2~4mm程の石英やチャートの粒も散見される。表面は丁寧にナゲ整形を行い、裏面の触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部直下に凸帯を横位に一条貼り付け、単べら工具で刻みが施される。口唇部にも刻みが施される。	B3グリッド S K 4 No.2214
第56図 34 図版28の34	深鉢 口縁部	— — 5~7 8~10	外: 明赤褐 5YR5/6 内: 明赤褐 5YR5/8	大きさ0.5~2mm程の暗褐色色鉱物が少量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	波状口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部直下約2cmに凸帯を縦位に一条・横位に一条貼り付け、その凸帯に細い単べら工具により、押し引き文が施される。また、その中を細い単べら工具による横位の押し引き文が施される。口唇部にも刺突が施される。	A6 グリッド S K 3 No.1699
第56図 35 図版28の35	深鉢 胴部	— — 7~8 10~14	外: 明赤褐 5YR5/6 内: 橙 5YR6/6	大きさ0.5mm程の暗褐色色鉱物が少量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物の粗粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	凸帯を縦位に一条、横位一条貼り付ける深鉢の胴部である。おそらく胴部の中央付近だと考えられる。凸帯に又状工具による施文がなされる。	A8 グリッド Ⅷ層 No.2206
第56図 36 図版28の36	深鉢 口縁部	— — 7~8 10~11	外: 明赤褐 2.5YR5/8 内: 同上	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粗粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口縁部直下約3cmに横位に一条の凸帯が貼り付けられる。その凸帯に単べら工具により、押し引き文が施される。また、横位や口唇部に押し引き文が施される。	A7 グリッド SI4・SD1下 No.1308
第56図 37 図版28の37	深鉢 口縁部	— — 9~10 11~14	外: 橙 5YR6/6 内: 明赤褐 5YR5/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粗粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	波状口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口唇部直下約5.5cmに凸帯を縦位に一条、その凸帯に単べら工具により、押し引き文が施される。また、横位に押し引き文が施される。口唇部にも刺突が施される。	A7 グリッド S D 1 No.1167

押図番号 図版番号	器 種 部 位	口径 底器 器厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第57図 38 図版29の38	深鉢 口縁部	— — 7~8 11~12	外：褐灰 5YR4/1 内：橙 5YR6/8	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	波状口縁の深鉢である。口唇部直下約1.5~2cmに凸帯を横位に一条貼り付け、その凸帯に細い車べら工具で横位に押し引き文が施文される。凸帯下部には、細い車べら工具による横位の三条の押し引き文が施文される。口唇部にも押し引き文が施される。	A 8 Ⅷ層 No1647 No2187
第57図 39 図版29の39	深鉢 胴部	— — 7~9 13	外：明赤褐 5YR 5/6 内：橙 5YR6/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	第57図38と同一個体だと考えられる。口唇部直下約4~5cmまで縦位に一条の凸帯を貼り付け、その中に細い車べら工具により縦に押し引き文が施文される。第57図38・39同様、横位に押し引き文が二条確認できる。	A 8 Ⅷ層 No1647
第57図 40 図版29の40	深鉢 口縁部	— — 7 11	外：橙 5YR 6/8 内：橙 5YR6/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	第57図38・39と同一個体だと考えられる。横位に一条貼り付け、その凸帯に細い車べら工具で横位に押し引き文が施文される。凸帯下部には、細い車べら工具による横位の押し引き文が一条確認できる。	A 8 Ⅷ層 No1647
第58図 41 図版30の41	深鉢 口縁部	— — 6 8~9	外： にぶい赤褐 2.5YR 5/4 内：明赤褐 2.5YR 5/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口縁部に、凸帯を貼り付ける。口唇部から縦位に約2cm程と短く貼り付け、その直下に横位に一条貼り付ける。	A 6 S K 3 No.1669・1686 No2205
第58図 42 図版30の42	深鉢 口縁部	126 — 8~9 10~13	外：灰赤 2.5YR 5/2 内：橙 2.5YR6/8	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入しており、0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。表面は丁寧にナズ整形を行い、裏面の触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口縁部に、凸帯を貼り付ける。口唇部から縦位に約4cm程二条貼り付け、横位にも二条貼り付ける。約2cmの区画を設ける。	A 6 S K 3・S I 4 模乱② No2033
第58図 43 図版30の43	深鉢 口縁部	— — 7~8 8~9	外：暗赤褐 5YR3/2 内：橙 7.5YR6/6	大きさ1~3mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。表面は丁寧にナズ整形を行い、裏面の触感はザラザラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口唇部を僅かに肥厚させ、口唇部直下約1cmと2cmの横位に凸帯を貼り付ける。	A 6 S K 3 No1731
第59図 44 図版32の44	深鉢 口縁部 ~胴部	157 — 4~7 —	外：暗赤褐 5YR3/2 ~明赤褐 5YR5/8 内：赤褐 5YR4/8	大きさ0.5mm程の白色鉱物が多量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢で、口唇部を僅かに肥厚させる。口縁部に、車べら工具により横位に二条の押し引き文が施される。	A 6 SI4 (No1668) SK3 (No.1658・1669・1670・1671・1672・1687・1688・1689・1698) Ⅷ層 (No.2181)
第59図 45 図版32の45	深鉢 底部	— 74 8~9 —	外：暗赤灰 2.5YR 3/1 内：明赤褐 2.5YR 5/8	大きさ0.5mm程の白色鉱物が多量に混入している。大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	第58図44の底部破片と思われる。実測図での復元を試みた。	A 6 S K 3 No1677

押図番号 図版番号	器 種 部 位	口径 底器 器厚 凸器厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第63図 46 図版34の46	深鉢 口縁部	— — 6 —	外: — — — — 内: 赤 — — — — 10R5/8	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、口縁部を僅かにすばませる。口縁部に、単べら工具により三条に横位の押捺刻文が施される。	B 6 グリッド S I 2 №1174
第63図 47 図版34の47	深鉢 口縁部	— — 5 7	外: 明赤褐 — — — — 内: 赤褐 — — — — 2.5YR4/8	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英・チャートの粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢で、口唇部から約1cm程肥厚させ、肥厚する部分に押捺刻文(左⇒右)を施す。	B7 グリッド VII層 №444
第63図 48 図版34の48	深鉢 口縁部	— — 6 —	外: 明赤褐 — — — — 内: 明赤褐 — — — — 5YR5/8	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英の粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢である。口縁部に二条の押引文を施し、その間に押捺刻文を施す。	B7 グリッド S I 5 SD 4 下 №2133
第63図 49 図版34の49	深鉢 口縁部	— — 4～7 —	外: — — — — 内: 赤 — — — — 10R2/3 10R5/8	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英・チャートの粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口縁部直下約5cmの間に、横位に三条の沈線と二条の押捺刻文を施す。沈線で、擬似肥厚口縁や凸帯のような形をつくりだしている。	B 8 グリッド VII層 SD 3 №1136
第63図 50 図版34の50	深鉢 口縁部	— — 5～7 —	外: 赤褐 — — — — 内: 同上	大きさ1～2mm程の白色鉱物の粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	深鉢の口縁部で、口縁部を僅かにすばませる。口唇部から3cmのあいだに二条の押引文、その間に約1cm程の凸帯の線な形をつくり、押捺刻文を施す。	B 4 グリッド S X 1 北東 (0/10)cm №2145
第63図 51 図版34の51	深鉢 底部	— — 6～8 10	外: 明赤褐 — — — — 内: 同上 — — — — 一部、黒褐 — — — — 5YR2/1	大きさ1～3mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が混入している。中が黒く、表面は橙褐色のサンドイッチ状の焼成で堅緻である。丁寧に整形、触感はサラサラである。	深鉢の口縁部で、ほぼ垂直に胴部へ向かう。口縁部直下約1～2cmの間で横位に一条の凸帯が貼り付けられ、単べら工具により押し引き文が施される。また、凸帯の上下に単べら工具による押し引き文が施文される。上に横位の一条、下に縦位の縦帯文を施す。縦帯文は、→ 三列目は右へ、二列目は左へと施文されている。	B 4 グリッド S X 1 №1369
第63図 52 図版34の52	深鉢 口縁部	— — 6 —	外: 赤褐 — — — — 内: 赤 — — — — 10R4/8	大きさ1mm程の白色鉱物・チャートの粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢で、丁寧に調整される。口縁部に、横位で一条の細い施文具で刺突文を施す。	A 5 S I 3 上 №1181
第63図 53 図版34の53	深鉢 口縁部	— — 9～10 —	外: 明赤褐 — — — — 内: 明赤褐 — — — — 5YR5/8 5YR5/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英・チャートの粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒や、2～4mm程の片岩系の石が少量散見される。整形は粗雑、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	平口縁の深鉢で、口唇部直下約1cmの所に、単べら工具による刺突文(左⇒右)を施す。また、口唇部にも同じ刺突文(左⇒右)を施す。	B 6 グリッド S I 5 №1315
第63図 54 図版34の54	深鉢 胴部	— — 7～8 10～11	外: 赤褐 — — — — 内: 赤褐 — — — — 5YR4/8 5YR4/6	大きさ1～2mm程の白色鉱物・石英・チャートの粒が多量に混入している。3mm程の片岩系の石が少量散見される。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢で、口唇部から約3cm程肥厚させ、肥厚する部分に文様を施す。上下に押し引きの区間文を配し、中に縦帯文を施す。	B7 グリッド VII層 SD 4 №1249

(mm)

挿図番号 図版番号	器 種 部 位	口 径 器 器 器 底 部 厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第64図 55 図版35の55	深鉢 口縁部	146 — — 9~11 —	外: 橙 2.5YR6/6 内: 橙 2.YR6/8	大きさ1~3mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	口縁部を僅かに引き伸ばして、口唇部を肥厚させる。単べら工具による横位の刺突が口縁部直下1cm~3cmの間と、4cm~6cmの間で各二条づつ施文される。	A6グリッドSK3 №1652 №1654 №1693 №2205・2181
第64図 56 図版35の56	深鉢 口縁部	194 — — 8~11 —	外: にぶい赤褐 5YR5/4 内: 橙 2.5YR6/8	大きさ1~4mm程の白色鉱物・石英の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が多量に散見される。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	口縁部を僅かに引き伸ばして、口唇部を肥厚させる。単べら工具による縦位の押引文が口縁部直下1cm~5cmの間に確認できる。縦の区画文?は一条(上→下)確認でき、横位の押引文は二条(左→右)施文される。	A3グリッドSK1 №1587
第64図 57 図版35の57	深鉢 口縁部	— — — 8~11 —	外: 灰褐 5YR4/2 内: 明赤褐 5YR5/8	大きさ1mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は脆弱である。アバタ状に小さな穴があく。	口縁部を僅かに引き伸ばして、口唇部を肥厚させる。単べら工具による横位の押引文が口唇部直下約1cmと口縁部直下2cm~3cmに各一条確認できる。	B 3グリッドSK1(P4) №2219
第65図 58 図版36の58	深鉢 口縁部	220 — — 5~7	外: 赤褐 5YR4/6 内: 明赤褐 5YR5/8	大きさ1mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。2mm~4mm程の石英なども散見される。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が少量散見される。整形は雑で、裏面は調整痕が残る。触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口唇部に僅かに膨らみを持たせる。	A6グリッドSK3 №1714 №1737
第65図 59 図版36の59	深鉢 口縁部	180 — — 7~9	外: 赤褐 5YR4/6 内: 赤褐 5YR4/8	大きさ1mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。2mm~4mm程の石英なども散見される。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧に、裏面は調整痕が残る。触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口縁部から胴部にかけて緩やかに締まる。	A6グリッドⅧ層 №1162 №1165 A6グリッドSK3 №1679 №1717 №2205
第65図 60 図版36の60	深鉢 口縁部	— — — 6~8	外: 暗赤褐 5YR3/2 内: 赤褐 5YR4/8	大きさ1mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。2mm~4mm程の石英なども散見される。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧に、裏面は調整痕が残る。触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	平口縁の深鉢である。口唇部を瘤状に肥厚させ、胴部から底部にかけて緩やかに締まる。	試掘坑№4 5層

(mm)

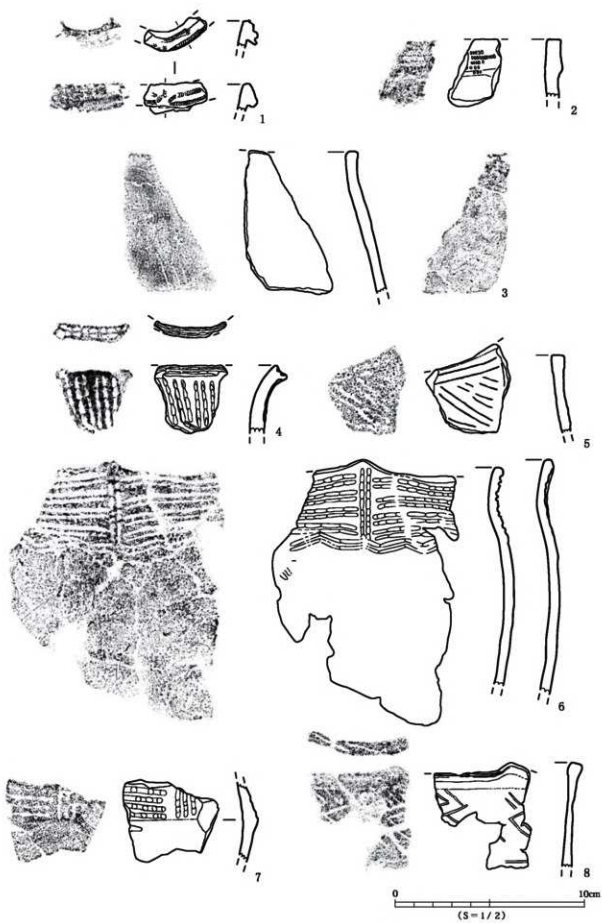
押印番号 図版番号	器 種 部 位	口 径 底 器 器 厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第66図 61 図版37の61	鉢 口縁部	— — — 6	外: 明赤褐 2.5YR5/6 内: 橙 2.5YR6/6	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧、触感はサラサラである。焼成は脆弱で、アバタ状になる。表面は橙色で内面は褐色を呈する。	平口縁の無文である。口唇部を僅かに開く。	A5グリッド VII層 №711
第66図 62 図版37の62	深鉢 口縁部	— — — 7	外: 暗赤褐 5YR3/3 内: 暗赤褐 5YR3/2	大きさ1～2mm程の白色・赤色鉱物や石英・チャートの細粒が多量に混入している。整形は丁寧、触感はザラザラである。焼成は脆弱である。	平口縁の無文である。口唇部を溝鉢状に肥厚させる。	A3グリッド SI1-2 №1299
第66図 63 図版37の63	深鉢 口縁部	220 — — 8	外: 橙 5YR6/6 内: 同上	大きさ1～2mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。3～5mm程の石灰岩の粒が散見される。整形は丁寧、触感はザラザラである。焼成は堅硬である。	平口縁の無文である。口唇部を溝鉢状に肥厚させる。	B6グリッド VII層 №1207
第66図 64 図版37の64	深鉢 口縁部	164 — — 6～7	外: 橙 5YR6/6 内: 同上～ 灰褐 5YR6/2	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧、触感はサラサラである。焼成は脆弱で、アバタ状になる。表面は橙色で内面は灰色を呈する。	平口縁の無文である。口唇部を溝鉢状に肥厚させる。	B7グリッド VII層 SD4 (SI5) №1256
第66図 65 図版37の65	深鉢 口縁部	— — — 7	外: 橙 5YR6/6 内: 同上	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。触感はサラサラで、焼成は脆弱でアバタ状である。	平口縁の深鉢である。口唇部を溝鉢状に肥厚させ、外周に刻みをいれる。口唇部直下1cm～2cmの間に、横位の連点文が施文される。	A5グリッド SI3 №1183
第66図 66 図版37の66	深鉢 口縁部	124 — — 6～7	外: 橙 5YR6/8 内: 同上～ 5YR6/6	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧、触感はサラサラである。焼成は脆弱で、アバタ状になる。表面が橙色で、内面は黒色を呈する。	平口縁の深鉢である。口唇部を僅かに開く形となる。	B6グリッド VII層 №18
第66図 67 図版37の67	深鉢 口縁部	— — — 7	外: 黒褐 5YR3/1 内: 赤褐 5YR4/8	大きさ1mm程の白色鉱物・赤色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧、触感はサラサラである。焼成は堅硬である。	平口縁の深鉢である。口唇部を肥厚させる。	B6グリッド SI5 №2148
第66図 68 図版37の68	深鉢 口縁部	— — — 7	外: 灰黄褐 10YR5/2 内: 同上	大きさ1mm程の白色鉱物・赤色鉱物の細粒が少量混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。整形は丁寧、触感はサラサラである。焼成は脆弱で、アバタ状になる。	平口縁の深鉢である。口唇部を肥厚させ、三条の細い押し引き文を施す。口唇上部に刺突文を施し、外周には刻みをいれている。	B6グリッド VII層 SD4 №1216

(mm)

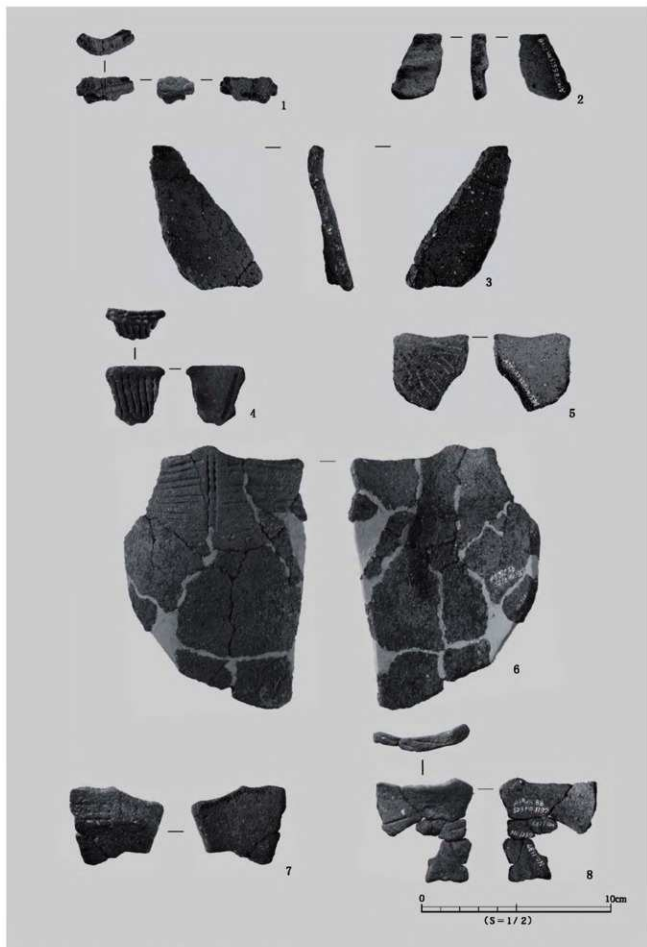
押図番号 図版番号	器 種 部 位	口径 底器 器厚 底部厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第67図 69 図版38の69	深鉢 底部	— 70 — 8 7	外: 橙 5YR6/6 内: にぶい橙 5YR6/3	大きさ1~4mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	底部の立ち上がり部分である。傾きはおよそ60°である。	B6グリッド VII層 №739
第67図 70 図版38の70	深鉢 底部	— 50 — 7 7	外: 明赤褐 2.5YR5/6 内: 同上	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	底部の立ち上がり部分である。傾きはおよそ65°である。	A7 グリッド VII層 №1148
第67図 71 図版14の71	深鉢 底部	— 60 — 9 10	外: 橙 5YR6/6 内: ぶい赤褐 5YR4/3	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	底部の立ち上がり部分である。傾きはおよそ60°である。	試掘坑 №4 5層
第67図 72 図版38の72	深鉢 底部	— 46 — 8~9 14	外: 明赤褐 5YR5/6 内: 灰褐 5YR4/2	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒が散見される。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	底部破片である。傾きはおよそ50°である。	B6グリッド SD4 №1211
第67図 73 図版38の73	深鉢 底部	— 61 — 6 8	外: 赤褐 5YR4/8~ 灰褐 5YR6/2 内: 赤褐 5YR4/8~ 黒褐5YR3/1	大きさ1~4mm程の白色鉱物・石英・片岩の細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	底部破片である。傾きはおよそ60°~65°である。	A6グリッド SK3 №1674 A6グリッド S14 №1667 A6グリッド VII層 №1406
第67図 74 図版38の74	深鉢 底部	— 76 — 6 8	外: 橙 2.5YR5/8 内: 明赤褐 2.5YR5/8	大きさ1~4mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はサラサラで、焼成は堅緻である。	底部の立ち上がり部分である。傾きはおよそ55°である。	A6グリッド SK3 №1756 A7グリッド VII層 №1631
第67図 75 図版38の75	深鉢 底部	— — — 8 8	外: にぶい赤褐 5YR4/4 内: 明赤褐 2.5YR5/8	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	底部の立ち上がり部分である。少破片のため、底径は不明である。傾きはおよそ50°である。	B3・4グリッド SX1 №2151
第67図 76 図版38の76	深鉢 底部	— — — 8~9 11	外: 明赤褐 5YR5/8 内: 赤褐 5YR4/6	大きさ1mm程の白色鉱物・石英・チャートの細粒が多量に混入している。丁寧に整形、触感はザラザラで、焼成は脆弱である。	底部の立ち上がり部分である。少破片のため、底径は不明である。傾きはおよそ60°である。	A5グリッド S2 上 №1179
第67図 77 図版39の77	深鉢 底部	— 42 — 9 14	外: 橙 5YR6/8 内: にぶい橙 5YR6/4	大きさ1~2mm程の白色・赤色・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒や、3~5mm程の石灰岩の粒が散見される。整形は丁寧に、触感はザラザラである。焼成は堅緻である。	平底の底部である。立ち上がりは緩やかで約60°である。第67図63の胎土に類似している。	B4グリッド SX1 0/20cm №1382
第67図 78 図版39の78	深鉢 底部	— 53 — 6~9 13	外: 明赤褐 5YR5/8 内: 明赤褐 5YR5/6	大きさ1~2mm程の白色・赤色・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒や、3~5mm程の石灰岩の粒が散見される。整形は丁寧に、触感はザラザラである。焼成は堅緻である。	平底の底部である。立ち上がりは緩やかで約60°である。第58図38, 39, 40の胎土に類似している。	A6グリッド SK3 №1677 №1694 №1736 №2205

(mm)

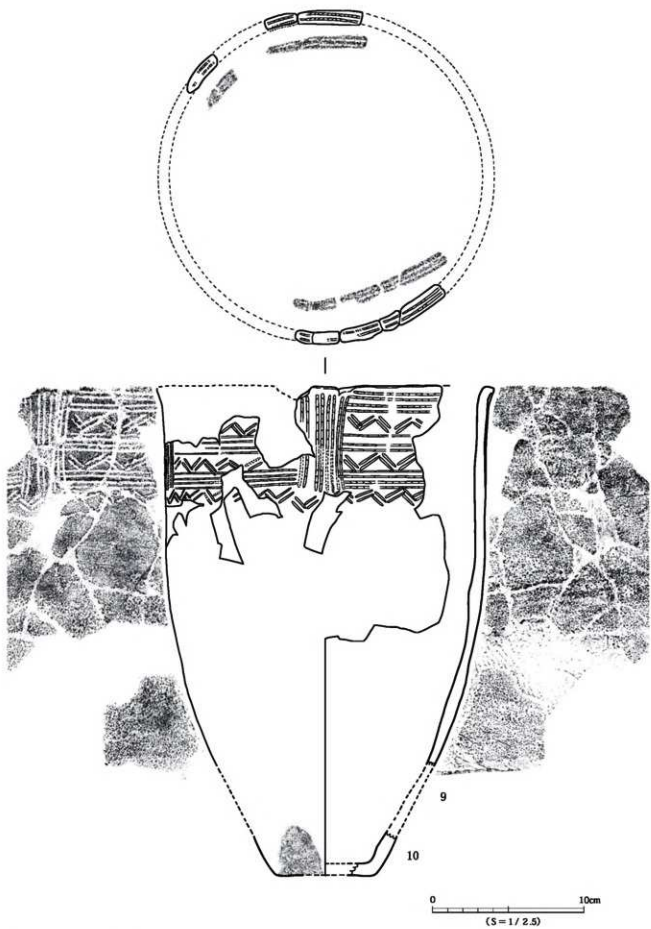
押図番号 図版番号	器 種 部 位	口径 底器 器厚 底部厚	色 調	胎土・焼成	備 考	出土地点
第68図 79 図版39の79	深鉢 底部	— — 7~9 13	外: 橙 5YR6/6 内: 橙 5YR6/8	大きさ1mm程の白色鉱物の細粒が多量に混入している。2mm~4mm程の石英なども散見される。整形は丁寧、触感はやささらで、焼成は堅緻である。	平底の底部である。立ち上がりは緩やかで約55°である。	A6グリッド SI4 SD1 下 No1494
第68図 80 図版39の80	深鉢 底部	— — 5 4	外: 橙 5YR6/6 内: 同上	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。触感はやささらで、焼成は脆弱である。	平底のミニチュア底部である。立ち上がりは緩やかで約55°である。	A5グリッド SI2 No1366
第68図 81 図版39の81	深鉢 底部	— 52 — 5~9 13	外: 橙 5YR7/6 内: 橙 5YR6/6	大きさ1mm程の白色鉱物・黒色鉱物の細粒が多量に混入している。触感はやささらで、焼成は脆弱でアバタ状になる。	平底の底部である。立ち上がりは緩やかで約60°である。	A5グリッド SI2 上 No1176
第68図 82 図版39の82	壺 口縁部	140 — — 6 —	外: 明赤褐色 2.5YR5/6 内: 橙 2.5YR6/8	大きさ2~3mm程の石英の粒が多量に混入しており、1~2mm程の白色・赤色の細粒が少量に混入している。整形は丁寧、触感はやささらである。焼成は堅緻である。	頸部がすぼまる、三角口縁の壺で、無文の口縁部である。	A6グリッド SK3 No1658 No1661
第68図 83 図版39の83	壺 口縁部	— — 7~8 —	外: 橙 2.5YR6/8 内: 橙 5YR6/8	大きさ1mm程の白色・黒色の細粒が多量に混入しており、大きさ2~3mm程の石英の粒が少量混入している。整形は丁寧、触感はやささらである。焼成は堅緻である。	三角口縁の壺で、無文の口縁部である。	B7グリッド SI5 SD4 No2135
第68図 84 図版39の84	甕 胴部	— — 4~6 —	外: にぶい橙 5YR6/4 内: にぶい黄橙 10YR6/4	0.5mm以下の光沢のある半透明白色鉱物粒と白色の砂粒が多量に混入している。大きさ2~3mm程の赤色鉱物の細粒と1mm程の黒色鉱物が少量に混入している。胎土は泥質で、整形は丁寧、触感はやささらである。焼成は堅緻である。	粘土接合部で外れている。	A7グリッド VII層 No395
第68図 85 図版39の85	甕 底部	— 60 — 8~11 11	外: 橙 5YR6/6 内: にぶい黄橙 10YR7/4	0.5mm以下の光沢のある半透明の白色鉱物・黒色鉱物粒が多量に混入している。大きさ2~3mm程の赤色鉱物の細粒が少量に混入している。胎土は泥質で、整形は丁寧、触感はやささらである。焼成は堅緻である。	平底の底部である。立ち上がりは緩やかで約60°である。	A6グリッド SK3 No1723
第68図 86 図版39の86	甕 底部	— 35 — 6 4~6	外: 橙 5YR6/8 内: 同上	大きさ1~2mm程の赤色鉱物の細粒が少量混入している。胎土は泥質で、整形は丁寧、触感はやささらである。焼成は堅緻である。	外底が上げ底状のように整形される。	B5グリッド VII層 No890



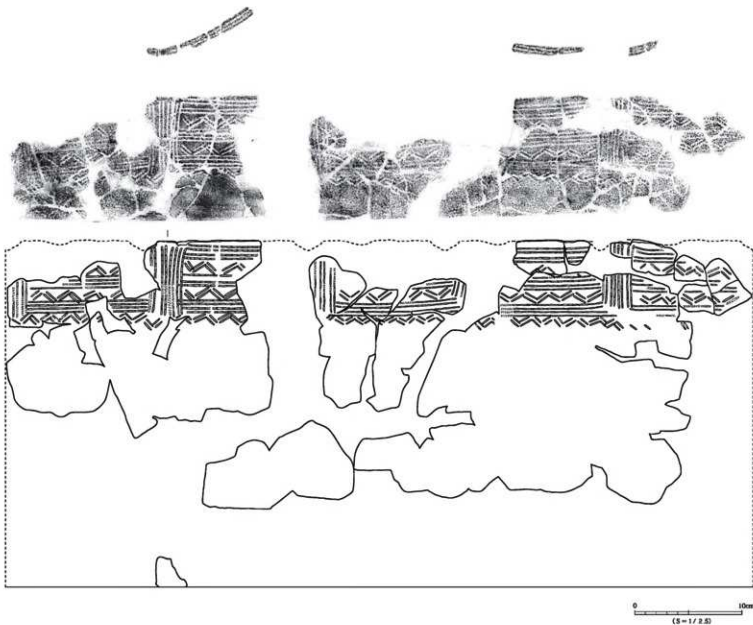
第44圖(図版 18) 第I群土器及び第II群土器 (1)



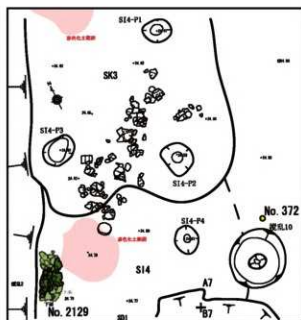
図版18(第44図) 第I群土器及び第II群土器 (1)



第45圖(図版21) 第Ⅱ群土器(2)



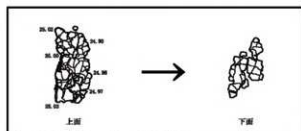
第46圖(圖版22) 第Ⅱ野土器(2)



第47図 第45図9・10出土状況 (S-1/30)



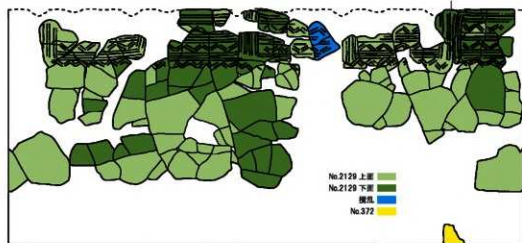
図版19 第45図9上面出土状況(南より)



第48図 第45図9取上状況



図版20 第45図9上面出土状況(西より)



第49図 第45図9・10接合状況 (S-1/3)

第45図9・10 土器出土状況および接合状況

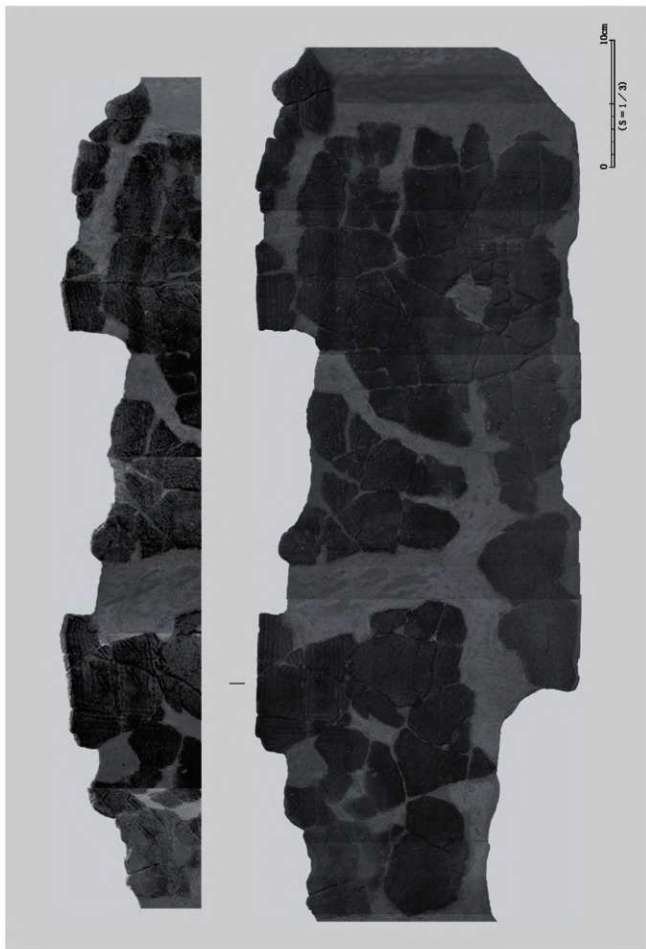
第47図は、第45図9の出土状況で上下に折り重なるように出土している。底部資料(第45図10)は、A7グリッドのVII層から出土しており、胎土及び色調の近い土器を推定底部として、推定復元を試みた。

第45図9は、攪乱②からの土層確認中に確認された、S14から出土する土器である。接合状況は、上面取り上げの資料を確認すると、口縁部破片の欠如がみられ、下面取り上げの資料には口縁部破片が残存している状況である。攪乱②から出土する土器と接合できる資料も数点出土していることから、おそらく、攪乱②による口縁部の欠如が考えられる。

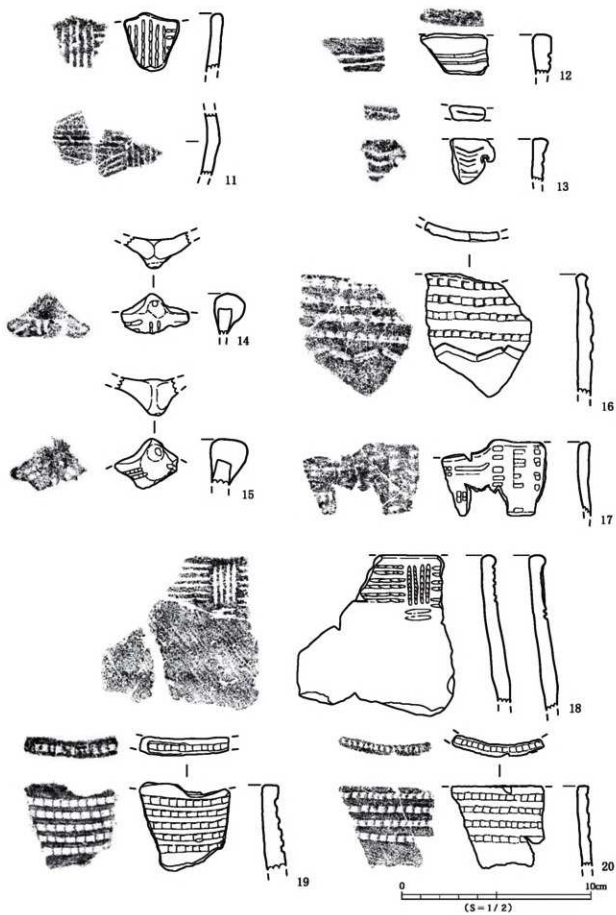
名座原遺跡で出土した萩堂式土器でも古手の大型土器である。



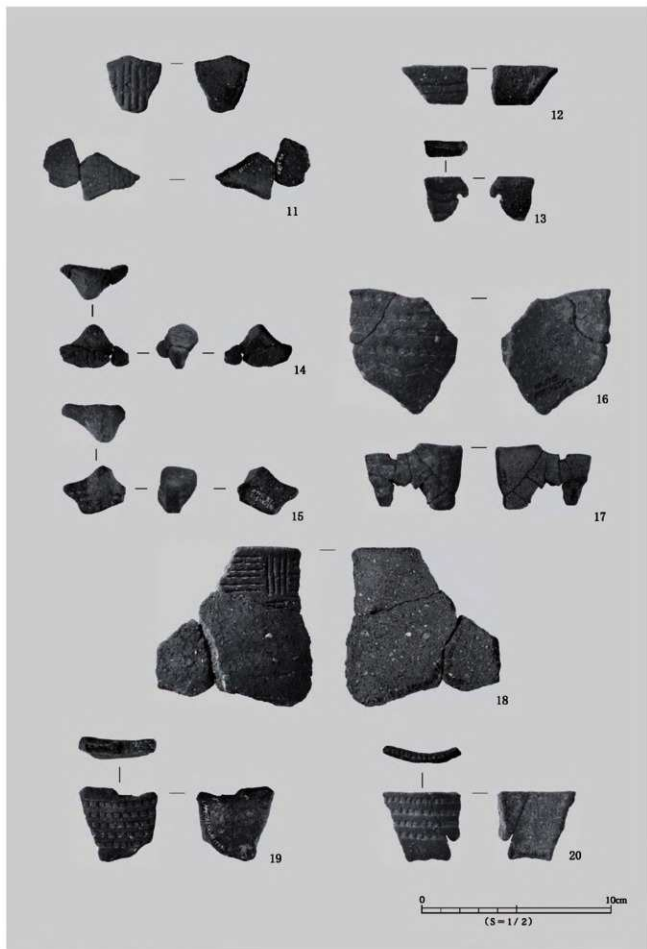
图版21(第45图) 第II群土器 (2)



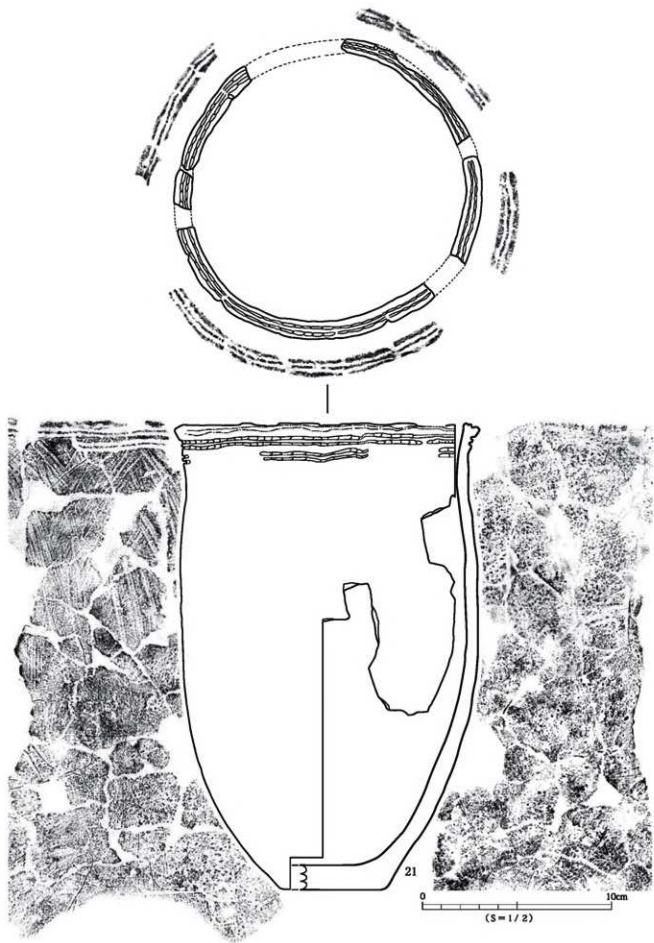
图版22(第46图) 第II群土器 (2)



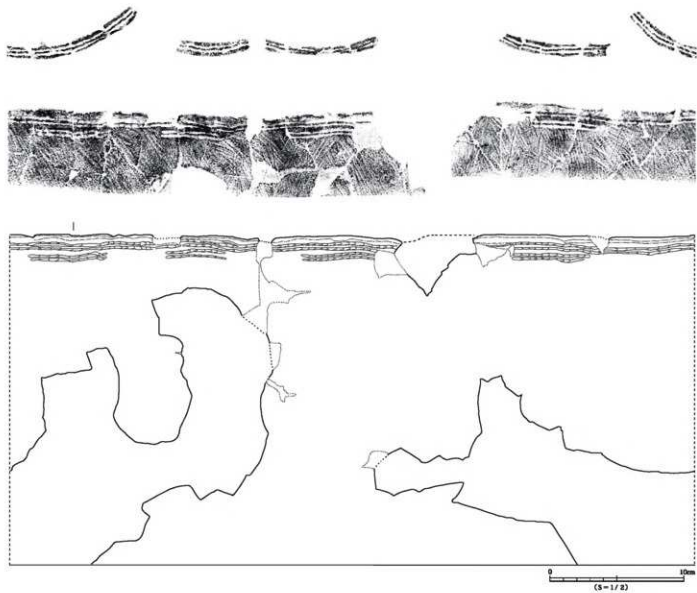
第50圖(圖版23) 第Ⅱ群土器(3)



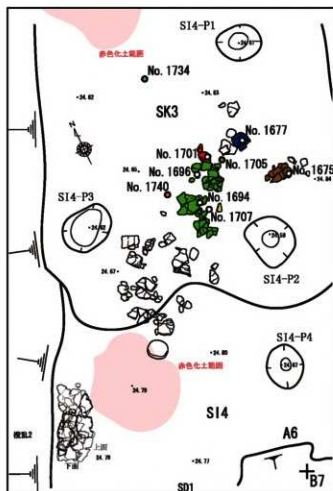
图版23 (第50图) 第Ⅱ群土器 (3)



第51圖(圖版25) 第II群土器 (4)



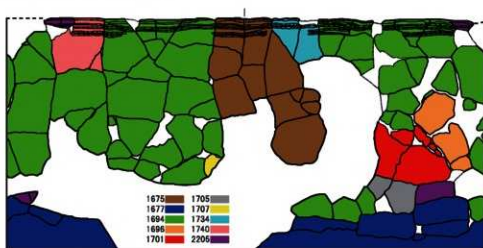
第52圖 (圖版26) 第Ⅱ群土器 (4)



第53図 第51図 21出土状況 (S = 1/20)



図版 24 第51図 21土器出土状況 (南より)



第54図 第51図 21接合状況 (S = 1/4)

第51図 21土器出土状況および接合状況

第53図は、第51図 21の出土状況で口縁部から底部にかけて、残存状況のよい出土であった。土器の取り上げ方法は、SK3もしくはSI4から出土する土器が密集している事から、同質の土器については破片一括として取り上げ、これに番号を与えて接合した。口縁部と底部はほぼ同レベルでの検出となる。いずれもSK3の中央に集中し、鍋底状の底に貼りつくように出土している。文様は萩堂、器形は大山である。

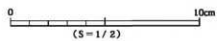
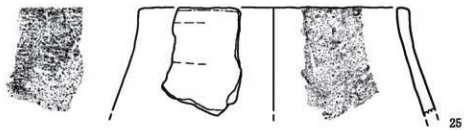
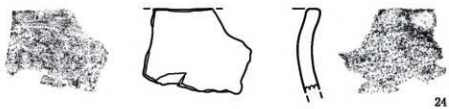
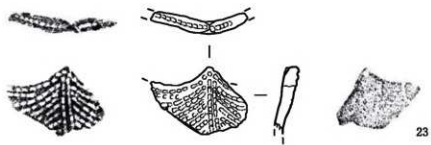
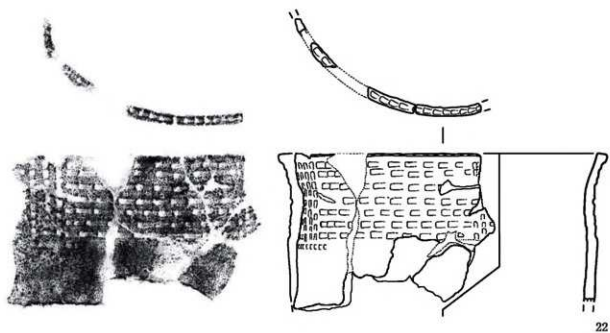
破片一括資料は、10ヶ所にのぼる。



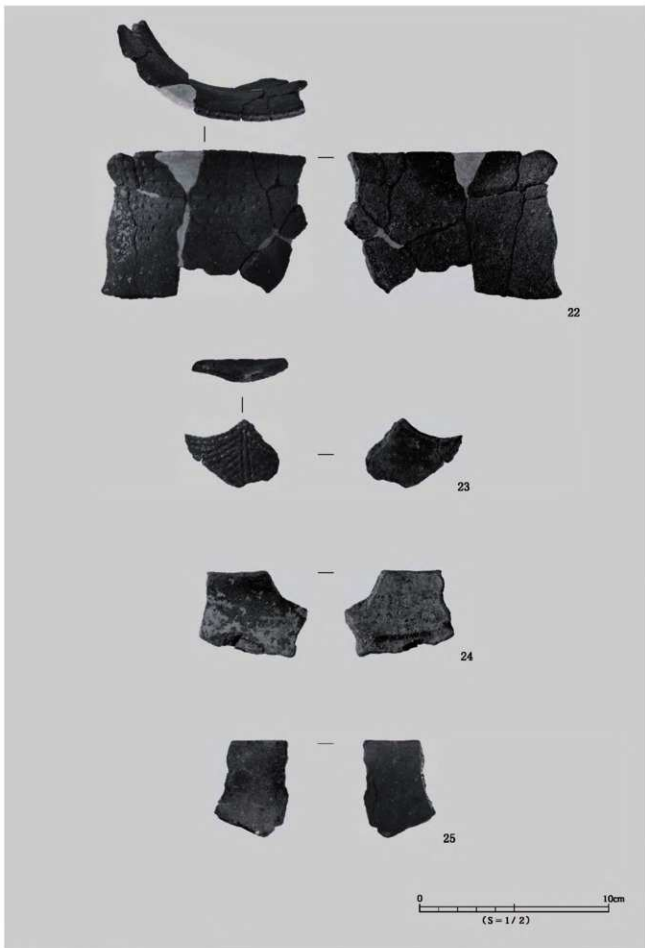
圖版25(第51圖) 第II群土器 (4)



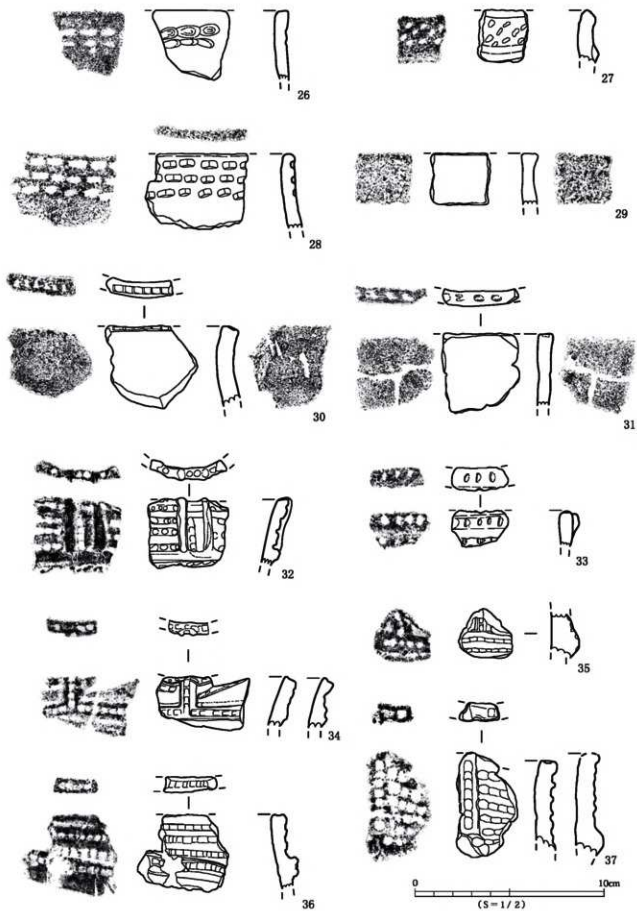
图版26(第52图) 第II群土器 (4)



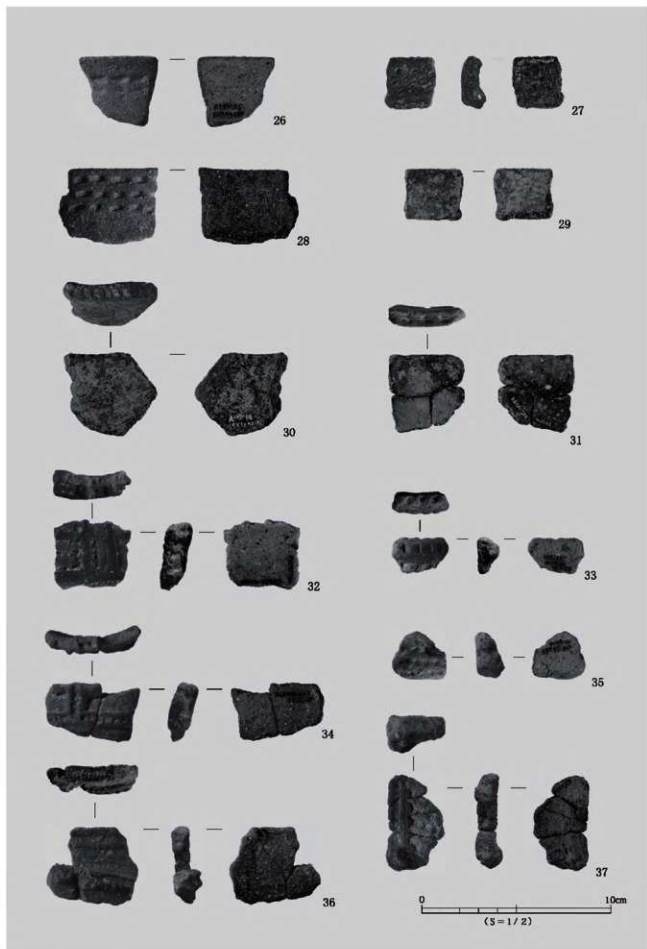
第55圖(圖版27) 第II群土器 (5)



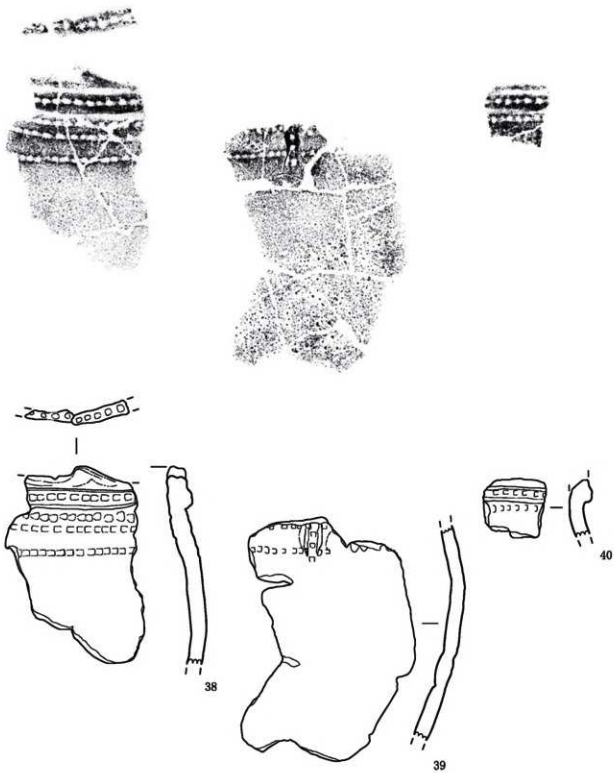
図版27(第55図) 第II群土器 (5)



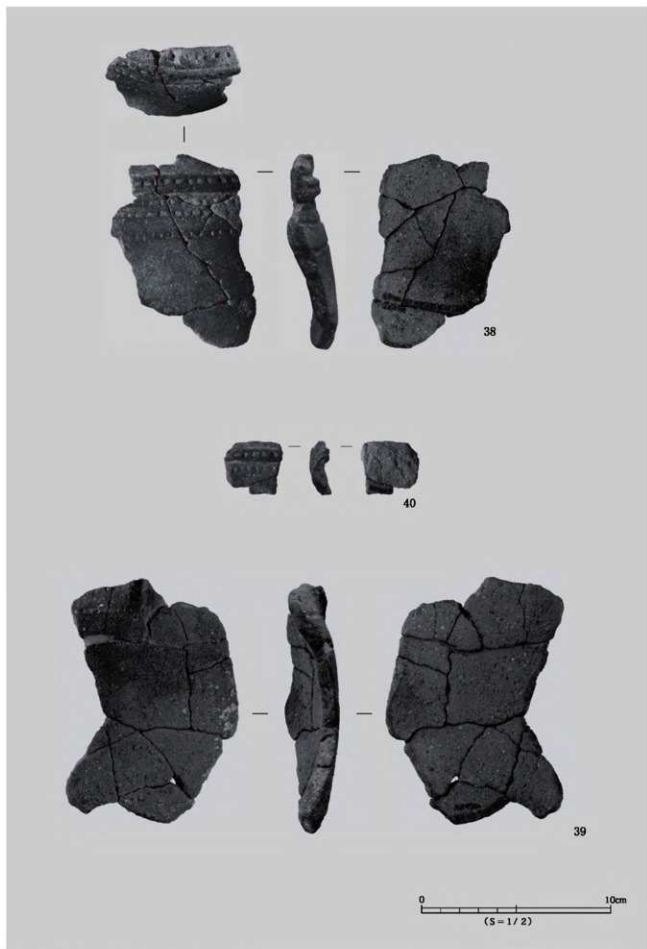
第56圖(圖版28) 第II群土器 (6)



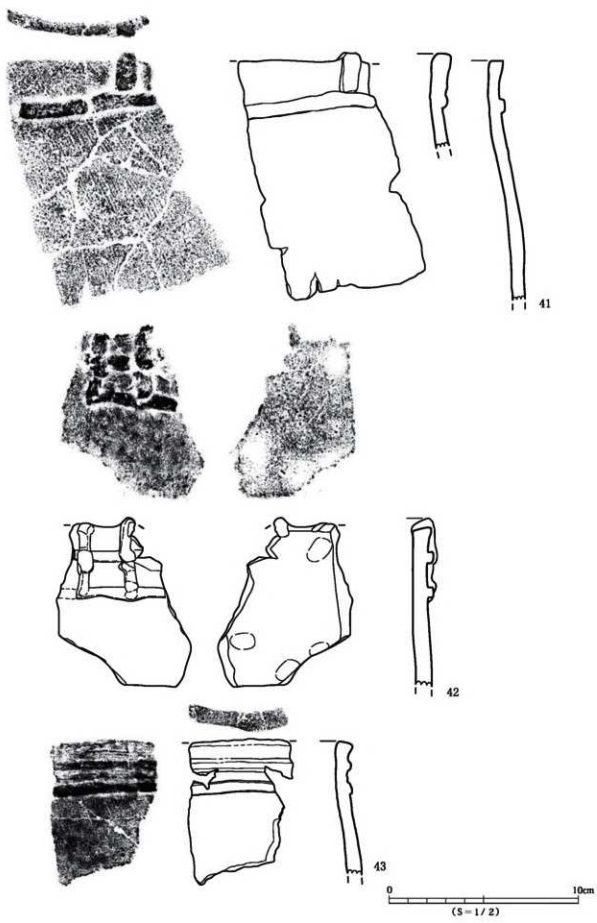
图版28(第56图) 第II群土器 (6)



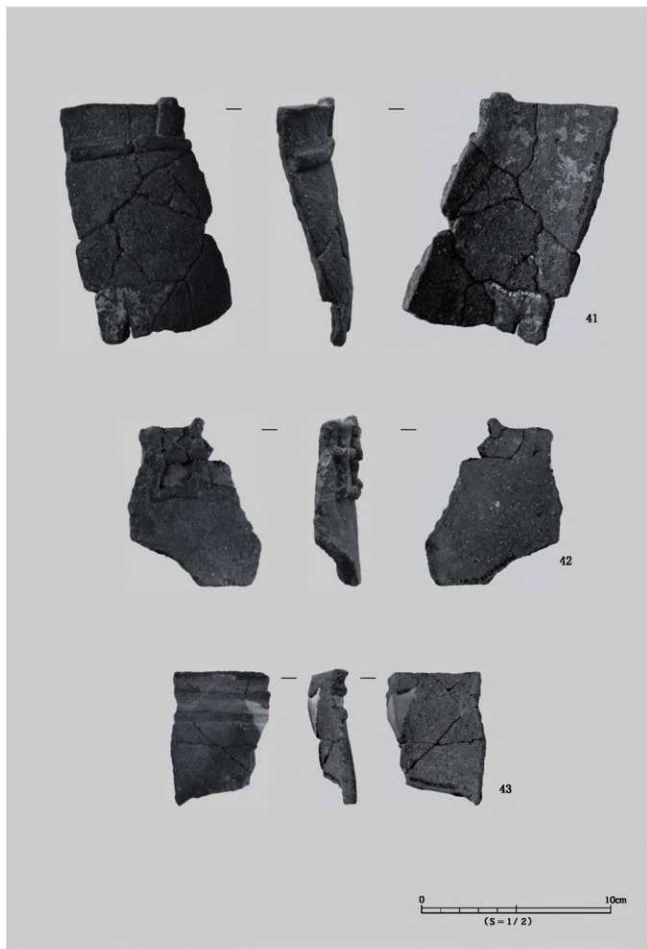
第57圖(圖版29) 第II群土器 (7)



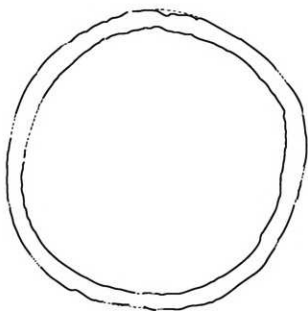
图版29(第57图) 第II群土器 (7)



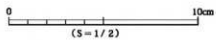
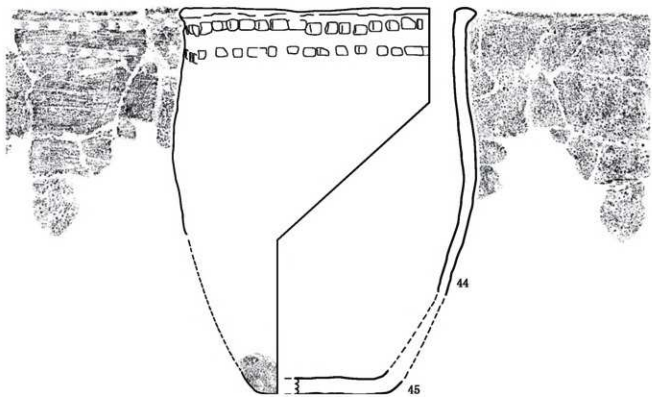
第58圖(圖版30) 第Ⅱ群土器 (8)



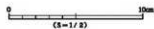
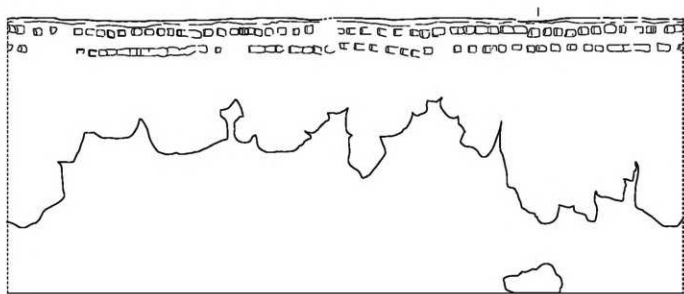
图版30(第58图) 第II群土器 (8)



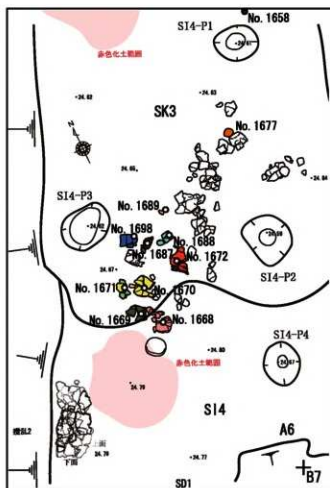
I



第59圖(圖版32) 第II群土器 (9)



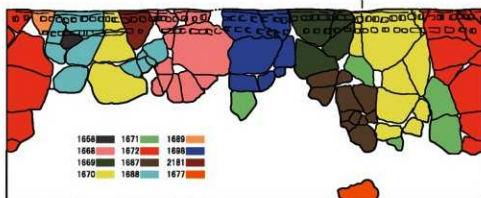
第60圖(原図33) 第Ⅱ群土器(9)



第61図 第59図44・45出土状況 (S = 1/20)



図版31 第59図44土器出土状況(南より)



第62図 第59図44・45接合状況 (S = 1/40)

第59図44・45土器出土状況および接合状況

第61図は、第59図44・45の出土状況である。土器の取り上げは、第51図21と同じくSK3から出土する同質の土器については、破片一括として取り上げ、これに番号を与えて接合した。

第59図44のNo.1670・No.1688とNo.1672は口縁部を東・南向き、表面を上にして検出された。No.1668とNo.1669は口縁部を西と南西向き、裏面を上にして検出された。口縁部及び胴部は、SK3の南側に集中し、鍋底状の縁辺部に貼りつくように出土している。第59図45の底部No.1677は、口縁・胴部と離れ第51図21の底部と一緒に出土している。

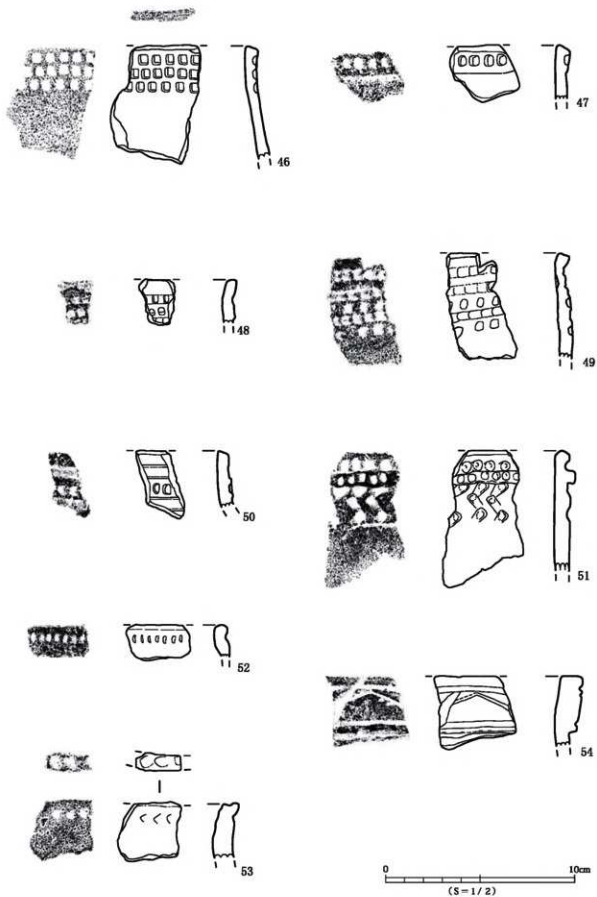
器形は頸部強調形、文様は大山であるが、口縁部が肥厚する土器である。破片一括資料は、12ヶ所にのぼる。



图版32(第59图) 第II群土器 (9)



图版33(第59图) 第II群土器(9)



第63圖(圖版34) 第II群土器 (10)



46



47



48



49



50



51



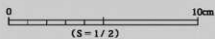
52



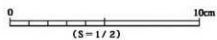
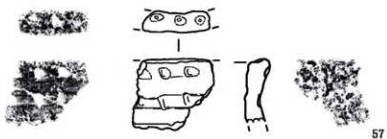
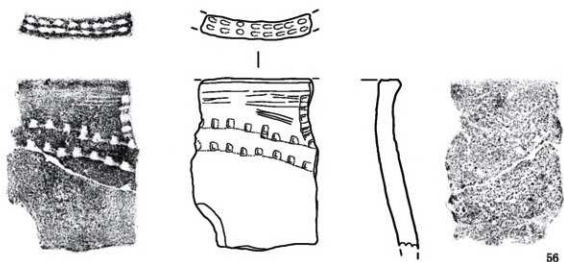
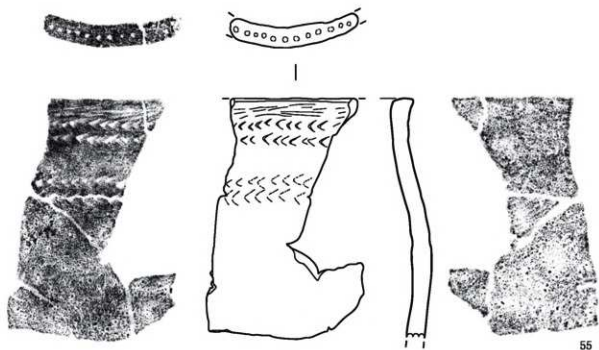
53



54



图版34(第63图) 第Ⅱ群土器 (10)



第64圖(圖版35) 第Ⅲ群土器 (1)



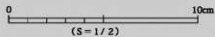
55



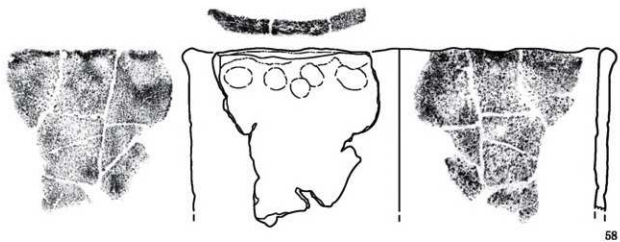
56



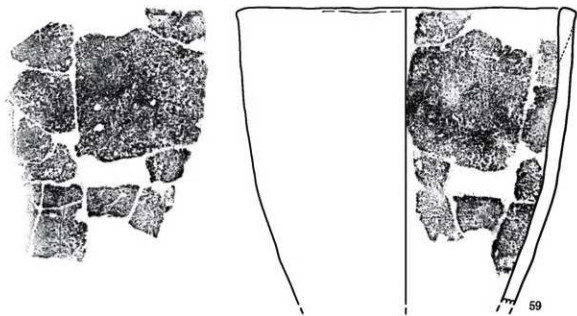
57



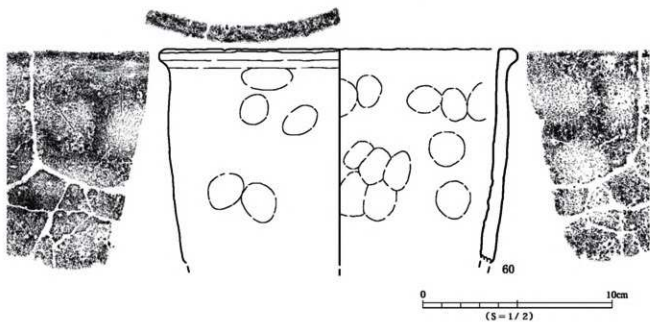
图版35(第64图) 第Ⅲ群土器 (1)



58



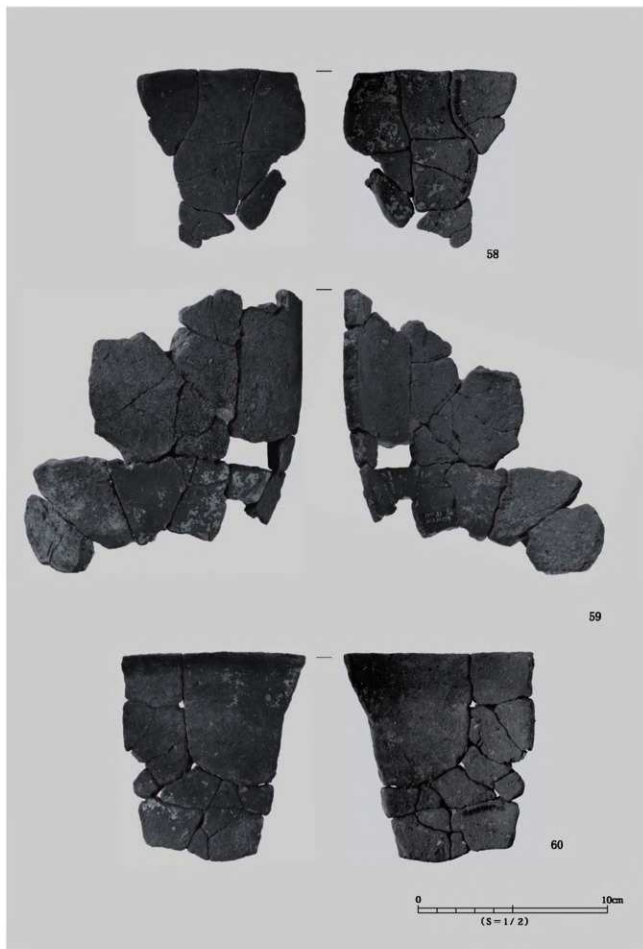
59



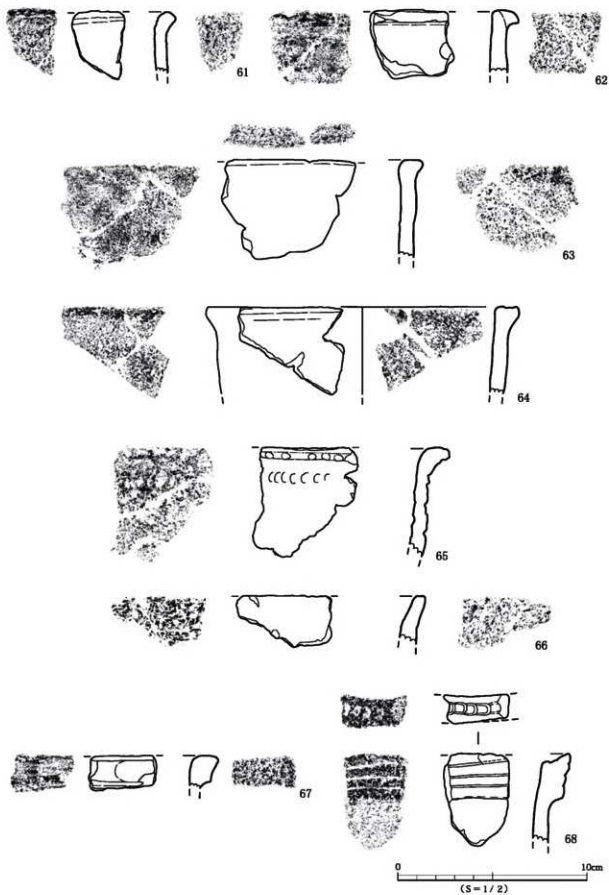
60

0 10cm
(S=1/2)

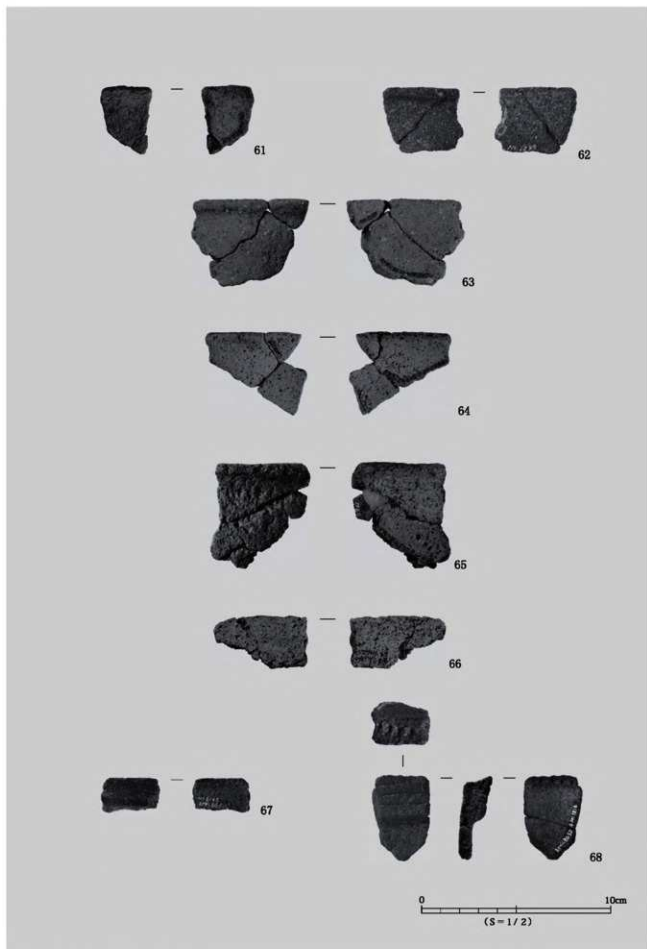
第65圖(圖版36) 第三群土器(2)



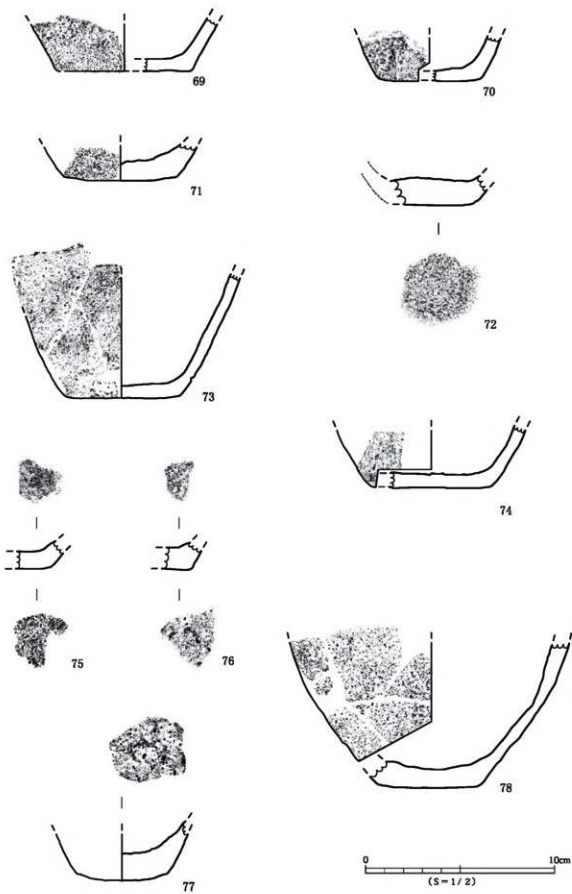
图版36(第65图) 第Ⅲ群土器 (2)



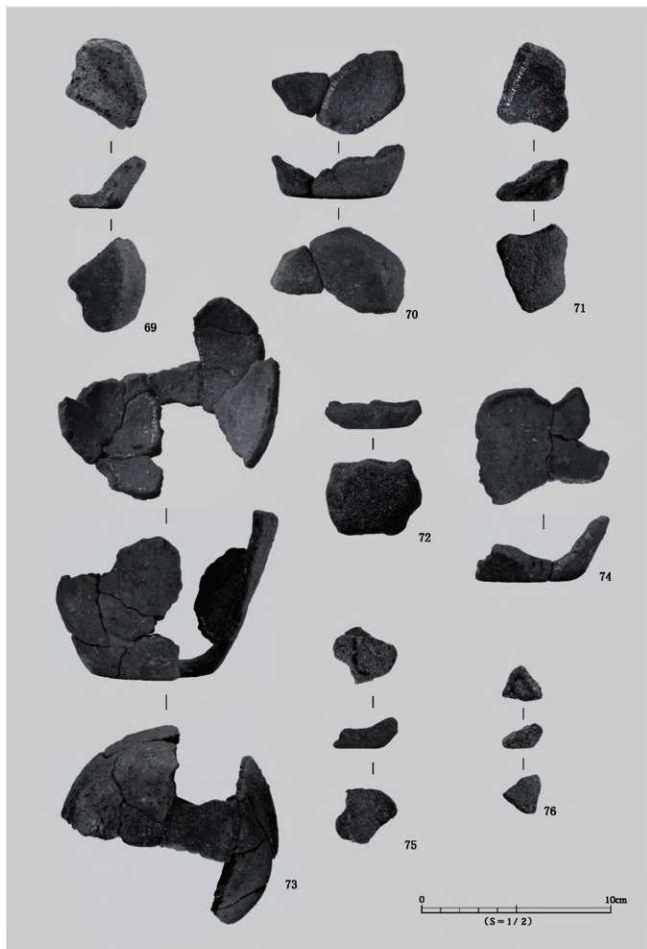
第66圖(圖版37) 第三群土器 (3)



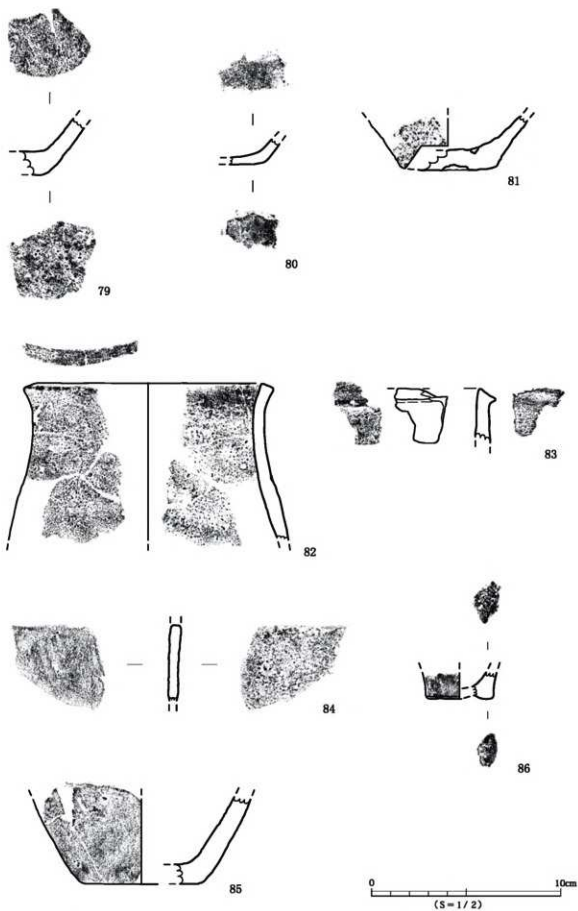
图版37(第66图) 第Ⅲ群土器 (3)



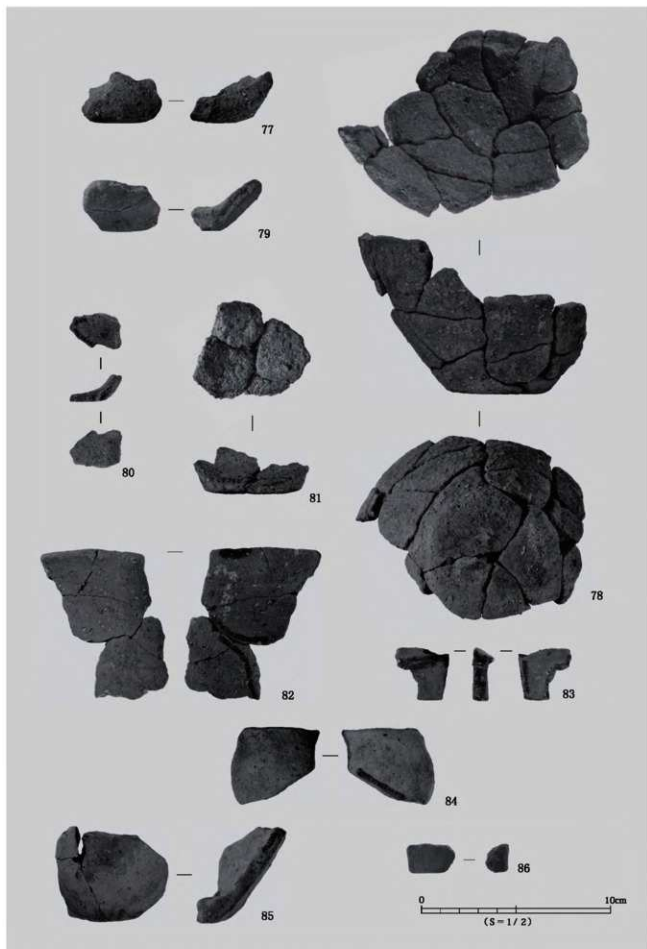
第67圖(図版38) 第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器底部



图版38(第67图) 第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器底部



第68圖(図版39) 第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器、第Ⅳ群土器及び第Ⅴ群土器



图版39(第67・68图) 第Ⅱ群土器及び第Ⅲ群土器、第Ⅳ群土器及び第Ⅴ群土器

2 石器

今回の調査で得られた石器資料の器種としては、敲石及び磨石の用途を有するものが主体になると考えられ、その他に石斧・クガニシ?・石皿・熱田原型石器・石鏃・剥片等がある(試掘調査で得られた資料も含む)。今回は、残存状態が概ね良好で、器種の判別が比較的容易な資料を中心に図示した(第69~78図)。図示した資料の各々の詳細については、第10表をご覧ください。

なお、ここでは、第69~78図となる挿図の垂直方向を「縦軸」とし、それに直角に交わり挿図の左右に伸びる水平方向を「横軸」と呼称する。また、縦軸・横軸に直交する方向を「奥行軸」と呼称する。第10表に示した石器資料の計測値の「最大長」は、各転回図中の石器表面図に関して縦軸方向での最大長であることを示す。同様に、「最大幅」は表面図の横軸方向での最大長、「最大厚」は表面図の奥行軸方向での最大長であることを示す。石器表面図については、挿図の各転回図中に「表」と表記した。

A 石斧

第6表参照。石斧となる資料は、磨製石斧が主体になると考えられる。今回図示はしていないが、打製石斧の可能性を有する資料が1点出土している。刃部を欠失しているが、平面形は涙形に近く、断面形は概ね扁平である。石材は、片状砂岩。最大長99mm。最大幅74mm。最大厚15mm。現存重量137g。B8グリッドⅦ層(Na2191-1)出土。

磨製石斧となる資料は、その製作過程から、①母岩を粗割し、石斧の形状に近づけたもの(第Ⅰ類)、②調整剥離までのもの(第Ⅱ類)、③敲打までのもの(第Ⅲ類)、④研磨を施した完成品(第Ⅳ類)の4段階に分けた。その他に石斧が折損した後に敲石に転用したのものがあるが、そのような資料については「敲石・磨石類」の項で取り扱う。第Ⅰ類となる資料は、粗い加工を施していると推測され、その形状が石斧に近いものを、ここに含めた。形状の類似は偶然であることも考えられ、本来は第Ⅰ類に含めることが適切ではない資料もあるかもしれない。第Ⅱ・Ⅲ類となる資料で、刃部が欠失しており基部のみが残存するものに関しては、本来は完成品(第Ⅳ類)に含めるべきものがある可能性が考えられる。なぜなら、刃部のみに研磨を施して使用し、基部となる部分は調整剥離、または敲打のみに止めているものが含まれる可能性が推測されるからである。また、第Ⅱ・Ⅲ類には、打製石斧となる資料が含まれている可能性についても否定はできない。磨製石斧として図示した資料は、すべて第Ⅳ類となるものである。

第Ⅰ類となる資料は、計10点である。使用される石材の内訳としては、緑色片岩2点・緑色千枚岩5点・砂岩3点である。第Ⅱ類は計12点で、全体形の窺えるものが3点、基部のみのものが9点である。石材は、全体形の窺えるものが緑色片岩2点・緑色千枚岩1点、基部のみのものが緑色片岩4点・緑色千枚岩1点・緑色岩3点・砂岩1点である。第Ⅲ類は計5点で、基部のみのものが3点、刃部のみのものが2点である。石材は、基部のみのものが緑色片岩3点、刃部のみのものが緑色片岩1点・変輝緑岩1点である。第Ⅳ類は、試掘調査で得られた資料(第69図2)を除くと、計22点である。その内訳は、全体形の窺えるものが4点、基部のみのものが11点、刃部のみのものが7点となる。石材の内訳は、全体形の窺えるものが緑色片岩1点・緑色千枚岩2点・緑色岩1点、基部のみのものが緑色片岩6点・緑色千枚岩2点・緑色岩3点、刃部のみのものが緑色片岩2点・緑色千枚岩3点・緑色岩2点である。第Ⅰ類から第Ⅳ類までの石斧に使用される石材としては、緑色片岩(21点)が最も多い。次に緑色千枚岩(14点)・緑色岩(9点)が多く、砂岩(4点)・変輝緑岩(1点)は少ない。

第Ⅳ類の刃部が確認できる資料では、その形態が両刃となるものが主体であるが、片刃になると判

断される資料が3点得られている。第69図1は、ほぼ完形の片凸刃となる資料である。研磨が明確に確認できるのは、凸刃側の刃面にほぼ限られる。基部への研磨は、不徹底かつ部分的なものである。残る2点の片刃となる石斧資料は、今回は図示していない。1点は、基端を欠失するが、ほぼ全体形の窺える資料である。サイズは、最大長74mm・最大幅40mm・最大厚12mm・現存重量63gとなる。小形の片凸刃石斧である。石材は、緑色千枚岩。凸刃側となる刃面を中心に研磨を施すが、全体的に調整剥離の痕跡が明瞭であり、粗雑な成形である。A3グリッドVII層(№1108)出土。もう1点は、片凸刃石斧の刃部の細片かと推測される資料である。両主面の刃面に研磨を施しているのがわかる程度で、詳細については不明である。石材は、緑色岩。B3グリッドSX1(№2159-1)出土。

第71図15は、石斧となる資料と推測されるが、刃部が残存していない。基部に、溝状の凹面を設けている。

B 敲石・磨石類

第7表参照。ここで扱うのは、敲石、または磨石となる資料であるが、敲石と磨石の両方に使用したと判断されるものが比較的多かった。また、破片となる資料が多いため、敲石・磨石等の器種を明確に判別することが困難であった。そのため、ここでは、両者を峻別せず、一括して扱うこととする。敲石・磨石類は、今回得られた石器資料の中で主体となる器種である。

明らかに磨石専用と判断できるような、磨面のみを有する完形の石器資料は、今回の調査では1点も得られていない。

磨面を有し、明確な敲打痕が確認できない破片資料(第I類)に関しては、計46点が得られている。これらは、磨石、または敲石兼磨石となる資料であろう。使用される石材の内訳としては、砂岩(19点)・緑色岩(16点)・片状砂岩(5点)・緑色千枚岩(3点)・緑色片岩(2点)・変質安山岩(1点)が得られており、砂岩・緑色岩を石材とする資料が多い。

敲石兼磨石(第II類)となる資料が、図示したものも含めて計23点得られている。全体形の窺えるものが10点あり、その内の9点を第72図17・18、第73図、第74図22~24、第75図26に図示した。残る1点は、長軸60mmで重さ258gの小形の自然円礫を利用したもので、敲打痕・磨面ともにあまり明瞭ではない。使用した回数がかなり少ないのではないかと推測される。石材は、緑色岩。B6グリッドSD4(№1221)出土。その他の13点は、いずれも破片となる資料である。第II類の使用石材には、片状砂岩(8点)・緑色岩(7点)・砂岩(6点)・緑色千枚岩(1点)・緑色片岩(1点)があり、片状砂岩・緑色岩・砂岩を石材とする資料が多い。

主に敲石としての使用が想定される資料(第III類)が、図示したものも含めて計11点得られている。その内、自然礫をそのまま敲石に使用したと推測されるものが7点、折損した石斧を敲石に転用したと考えられるものが4点ある。石斧転用の敲石4点は、すべて図示している(第70図9~11、第71図12)。第III類の使用石材には、緑色片岩(4点)・緑色千枚岩(3点)・砂岩(3点)・緑色岩(1点)がある。

第72図16は、磨石となる資料と推測される。河原石となるような自然礫を、そのまま使用している。明確な敲打痕は、みられない。おそらく、本資料は重量が重かったため、敲打のような連続した動作を伴う用途に不向きであったのではなかろうか。

第72図17・18、第73図、第74図22~24、第75図26は第II類となる資料で、概ね全体形の窺えるものである。図示した資料は、平面形が石鏃状や円形、または楕円形を呈し、全体の形状が定形的である。河原石等の自然円礫をそのまま使用するものが、主体であろう。磨石としての使用面は、表裏両面を

中心とするようである。表裏面の中央に、敲打による凹みを有するものが多い。敲打に関しては石器側面も多用されるようであり、上下左右となる側面の周囲4箇所、または側面の両側2箇所を中心に敲打に使用していると推測される。いずれの資料も、片手で持って作業するのに概ね適した形状と重さである。

第74図25、第75図28～30となる4点は、第Ⅲ類となる資料である。25・28・29は、一部に磨面を有する可能性があり、ある程度磨石としての使用も考えられるが、そうだとした場合の使用頻度はかなり低いと推測される。4点ともに、自然礫をほぼそのまま使用していると推定されるが、全体の形状がややいびつで磨面として使用できるような平滑面に乏しかったり、細長い棒状を呈していたため、磨石としての使用に適さなかったと考えられる。

第70図9～11、第71図12は、折損した石斧を敲石に転用したものと推測される。石斧転用の敲石となる資料では、石斧の刃部または側面を敲打に使用しており、主面に敲打の明らかな痕跡を有するものは確認できていない。

C クガニイシ?

第75図27は、「クガニイシ」と呼称される石器に形態的特徴が類似する資料で、試掘調査の際に出土したものである。このような特徴を有する資料は、本遺跡ではこの1点のみが得られている。ただし、他遺跡で検出されているクガニイシに比べると、本資料はサイズがやや小さいようである。たとえば、高嶺遺跡(注1)出土のクガニイシ1点の重さは、5,180gとなっている。また、前原遺跡(注2)出土のクガニイシ3点の重さは、各々、4,500g・1,380g・4,000gである(最後のものは、破損資料の重さ)。喜友名貝塚(注3)出土のクガニイシ1点は、重さが2,190gである。これらの資料に比べると、本遺跡出土のものは重さ723gで、軽量サイズとなっている。

D 石皿

第8表参照。石皿と判断される資料は、計13点得られている。それらは、使用面が弧状に凹むもの(第Ⅰ類)、使用面が平坦なもの(第Ⅱ類)、小片資料であるために使用面の形状が判然としないもの(第Ⅲ類)の3つに分けられる。第Ⅰ類となる資料は、第76図に示した2点のみである。第Ⅱ・Ⅲ類となるものは、今回は図示していない。第Ⅱ類には、厚みのある石塊を利用するものと板状の石材を利用するものがある。第Ⅱ類に関しては、砥石としての機能を有するものも含まれることが考えられるが、明確に判別することが困難であったため、今回はすべて石皿として分類した。

第Ⅰ類は、上述したように図示した2点のみで、使用される石材は砂岩と片状砂岩である。第Ⅱ類は計9点得られており、石材としては緑色岩(3点)・砂岩(4点)・片状砂岩(2点)がある。第Ⅲ類となる資料は計2点で、石材は緑色岩と片状砂岩である。

E 熱田原型石器

第77図に示した資料は、近年、仲宗根求氏により「熱田原型石器」として提唱されるものに該当すると判断される(注3)。その形態的特徴としては、「平面観は長方形が主体でありながらも、中には細長く短冊状と呼ぶにふさわしいもの」があり、「上下両端に鋭利な刃を有し(双刃)、厚さが非常に薄く、均一な板状に整える」のが大きな特徴であるという(注4)。サイズとしては、大きいものでは長さ6.4cm・幅2.2cmや長さ7.4cm・幅3.8cmとなるものがあり、逆に小さいものでは長さ2.8cm・幅1.5cm・重

さ3.0gや長さ3.1cm・幅1.0cm・重さ1.7gのものがあるという(注5)。

今回の本遺跡での調査では、上述したような特徴を有する石器資料が、図示したものも含めて計7点得られている。図示していない3点の資料は、2点が刃部周辺の小片資料で、残る1点は刃部の残存しない基部となる資料である。刃部資料となる1点は、最大長14mm・最大幅16mm・最大厚2mm・現存重量0.59gで、石材は頁岩である。刃部には、ほぼ片刃となるように研磨調整を施すようである。A3グリッドSK1(№2158-2)出土。もう1点は、最大長20mm・最大幅16mm・最大厚3mm・現存重量1.73gで、石材は緑色千枚岩である。今回の調査で得られた熱田原型石器の石材では、この1点のみが緑色千枚岩製である。小片資料であり、刃縁の形状が弧状を呈することから、あるいは厚みの薄い石斧の刃部である可能性もあろうか。刃部の形状は両刃となり、刃先角は小さい。A・B-5・6グリッド攪乱14(№2089-2)出土。基部資料1点は、最大長32mm・最大幅22mm・最大厚2mm・現存重量2.43gで、石材は頁岩である。両側縁の形状は、各々、研磨調整で直線的に整形する。両側縁は、平行である。A7グリッドVII層(№1537)出土。

これら7点の他に、熱田原型石器に関連して、頁岩に穿孔するものかと推測される資料が1点得られている。今回、図示はしていない。サイズは、最大長30mm・最大幅25mm・最大厚4mm・現存重量3.60gとなる。破損部に穿孔(?)した部分が半円状に確認できる。これが、人為的に穿孔したものであれば、孔の直径は約6mmとなる。ただし、加工の痕跡は、明瞭ではない。B4グリッドVI層(№2081-1)出土。

仲宗根氏は、熱田原型石器の特徴として、上下両端に鋭利な刃を有すること(双刃)を挙げている。本遺跡で今回得られた資料では、第77図33がこれに該当する。34は、欠失のため、片端の刃部の有無が不明である。35は、両端ともに原状を概ね知ることのできる資料かと推測されるが、刃部は片端のみに設けている。厳密に言えば、35を熱田原型石器に含めるべきではないのかもしれないが、全体の特徴は熱田原型石器に近似する。36は、刃部のみ破片資料ではあるが、そのサイズと使用される石材から熱田原型石器に類するものと判断した。残存面を見る限り、研磨が行き届き、丁寧な整形である。

F 石鏃

石鏃となる資料は、第78図37に示した1点のみである。先端が、欠失している。チャート製の凹基無茎鏃となる資料である。

G 剥片

第9表参照。ここでは、チャート及び石英が石材となる石鏃以外の資料について述べる。

チャートの剥片は、図示したものも含めて計20点が得られている。微細な破片が主体で、道具としての使用が想定しうるようなものは、第78図38・40に示した資料以外にない。最も軽いもので0.11g、最も重いものは4.69gである。チャートの剥片となる資料の総重量は、24.08gである。その他に、チャートの自然小円礫が1点得られており、重さは6.25gである。チャートの石核となるような資料は、今回の調査では得られていない。

石英の剥片は、図示したものも含めて計9点が得られている。その内の1点は、重さ21.72gの小片資料ではあるが、廃棄された石核である可能性も推量される。形状は、四角錐状となる。一面に、自然面を残す。B3・4グリッドSK1(№2143-11)出土。今回得られた石英を石材とする資料では、

これが最も重い。逆に、最も軽い剥片は、0.68gである。二次加工の有無がいずれの資料も判然とせず、道具としての使用が想定できるものは、第78図39に示した資料以外にない。石英の剥片(石核を含むか)となる資料の総重量は、82.14gである。その他に、石英の自然小円礫が4点得られている。最も軽いもので1.64g、最も重いものは12.97gである。4点の総重量は、23.09gとなる。

第78図38・40はチャート、39は石英の剥片資料である。挿图中に矢印で示した範囲が、刃部として想定することができる。ただし、いずれの資料も、道具として使用するために施す二次加工の痕跡が、明瞭に確認できるわけではない。40は、刃部の一部に細部加工を施すようであるが、全体的に摩耗しており、剥離により生ずるはずの稜が殆ど潰れて滑らかになっている。道具としての使用に伴う摩耗である可能性も考えられる。40は、石礫製作に伴って生じた失敗品を転用したものであろうか。

H 器種不明

磨面、あるいは研磨調整痕を有する器種不明の破片資料が、計95点得られている。これらの資料は、蔽石・磨石類や磨製石斧、または石皿等の破片であることが考えられる。便宜上、重さが100g以上になるもの(第Ⅰ類)と100g未満のもの(第Ⅱ類)に分けた。第Ⅰ類は8点、第Ⅱ類は87点が得られている。

第Ⅰ類となる8点の総重量は、1,285gである。石材ごとの内訳では、緑色岩5点(959g)・砂岩3点(326g)となる。()内に示した重さは、石材の種類ごとの総重量である(以下、第Ⅱ類についても同様)。第Ⅰ類となる資料で、最も重いものは282gである。石材は、緑色岩。

第Ⅱ類となる87点の総重量は、1,901gである。石材ごとの内訳は、緑色岩32点(548g)・緑色千枚岩8点(70g)・緑色片岩6点(164g)・砂岩39点(1,076g)・片状砂岩1点(29g)・変質安山岩1点(14g)となる。

石材が緑色岩・砂岩となるものが多いことや各資料の残存面の状態等から、これらの資料は本来は蔽石・磨石類となるものが主体であろうと推測される。

第Ⅰ類の層位ごとの出土状況としては、Ⅵ層(緑色岩1点)、Ⅶ層(砂岩1点)、Ⅷ層(緑色岩1点)、層位横転(緑色岩1点)である。遺構ごとの出土状況は、SD1(砂岩1点)、SI4(砂岩1点)、SK3(緑色岩1点)、SX1(緑色岩1点)となっている。

第Ⅱ類の層位ごとの出土状況は、Ⅴ層(緑色岩1点)、Ⅵ層(緑色片岩1点・砂岩3点)、Ⅶ層(緑色岩12点・緑色千枚岩5点・緑色片岩1点・砂岩15点)、Ⅷ層(緑色岩1点・緑色片岩2点・砂岩8点・片状砂岩1点・変質安山岩1点)、層位横転(緑色岩3点)、攪乱14(砂岩1点)である。遺構ごとの出土状況は、SD1(緑色岩1点・緑色千枚岩2点・砂岩3点)、SD2(緑色岩1点・緑色千枚岩1点・砂岩1点)、SD3(緑色岩1点)、SD4(緑色岩1点・緑色千枚岩1点・砂岩1点)、SI1(緑色岩1点・砂岩1点)、SI2(緑色岩3点・砂岩1点)、SI3(緑色岩1点)、SI5(緑色岩2点・砂岩2点)、SK1(緑色岩1点)、SK3(緑色岩1点・砂岩2点)、SX1(緑色岩2点・緑色片岩1点・砂岩1点)である。

試掘調査で得られた石器及び石材資料について

ここでは、平成18年度に実施した鏡水名座原A遺跡での試掘調査の際に出土した、石器及び石材資料について述べる。出土遺物は、すべて試掘坑4より得られている。

石器となる資料は、磨製石斧1点、蔽石・磨石類1点、クガニイシ?1点、器種不明4点が得られている。すべて、試掘坑4の5層より出土している。磨製石斧1点は、第69図2に図示した。蔽石・

磨石類1点は、磨石、または敲石兼磨石となる破片資料で、磨面のみが確認できる。石材は、緑色岩。重さ249g。クガニイシ?1点は、第75図27に図示した。器種不明4点は、磨面を有する破片資料で、敲石・磨石類または石皿になるものと推測される。使用される石材は、砂岩1点(222g)・片状砂岩2点(249g・11g)・緑色岩1点(72g)である。

石材資料としては、緑色千枚岩1点・砂岩2点が得られている。緑色千枚岩1点は重さ56gで、試掘坑から掘り出した土中より採取したものである。砂岩2点の内、1点は小形の自然円礫で、重さは143gである。試掘坑から掘り出した土中より採取。もう1点は、自然円礫が破砕したもので、重さ2.2kgの大形礫である。5層より出土。

小結

今回の鏡水名座原A遺跡での発掘調査では、石斧51点、敲石・磨石類81点、クガニイシ?1点、石皿13点、熱田原型石器7点、チャート製石鏃1点、剥片29点(チャート20点・石英9点)、器種不明99点となる石器資料が得られている(試掘調査で得られた資料を含む)。器種の判別できるものとしては、敲石・磨石類が最も多く、次に石斧の順となる。

今回得られた磨製石斧となる資料については、道具として完成したもの(第Ⅳ類)以外に、製作途中で何らかの理由により廃棄されたと推測される資料に関しても報告を行った。製作途中で廃棄する理由としては、素材の加工に失敗したということが最も考えやすい。今回、磨製石斧の第Ⅰ類としたものには、粗割の段階で破損したかと推測されるものや、最後まで加工を続け完成品とするには形状がやや不適格ではないかと考えられるものが含まれている。また、第Ⅱ類で全体形が窺えるとしたものに関しても、形状がややいびつであったり、サイズが小さかったりする。もちろん、これらの資料が磨製石斧の製作途中品として適切に分類されているかという問題はあるが、ここでは今回第Ⅰ～Ⅲ類に分類した資料が磨製石斧の製作途中で発生した失敗品であると判断しておく。先史時代の石斧製作に関しては、最近では大堀皓平氏等による研究及び問題提起もあり(注7)、今後注目される課題である。

今回の調査で、熱田原型石器が破片資料も含めて7点得られている。SI3やSK1等の遺構からも、出土している。熱田原型石器の使用用途について現状では判然としないが、実用品と考えるのであれば、その道具としての強度についても検討されるべきであろう。その点については、この種の石器でどのような材質のものを加工するのかについても検証されなければならないのは言うまでもない。また、第77図35に示した資料のように、特徴が熱田原型石器に近似するが、きちんとその定義に当てはまらないものについてはどのように分類しその性質について解釈するのかに関しても、今後検討されるべきであろう。

沖繩の先史時代の土器には、その胎土中の混入物に沖繩本島中部南側や同南部となる地域には産出しない岩石や鉱物が含まれるものがあることが、今までに度々指摘されてきている。これらの指摘は、基本的にはルーベ等を使用した肉眼観察によるものであるが、近年、理化学的分析によりそのことが実証されつつある(注8)。このような土器資料の検出は、沖繩本島北部や伊平屋島・伊是名島等の本島周辺離島ではなんの不思議もないが、沖繩本島中部南側や同南部となる地域ではその理由について何らかの説明が必要となる。伊波式・萩堂式土器や宇佐浜式土器等の同じ型式に属する土器資料は、出土した遺跡の所在する地域(市町村)が異なる場合でも、その形状だけではなく肉眼で観察するかわりに胎土の特徴も類似することが多い。つまり、同じ型式に属する土器は、その材料である素

地土も共通する手法でつくられたものである可能性が高いと考えられる。そのことは、極端な言い方をすれば、沖縄本島北部で製作されたものであろうが本島南部で製作されたものであろうが、同じ型式の土器はその胎土の特徴も同じであるということになる。ここで着目すべき点は、土器製作の基本である素地土づくりに際して重要となる混和材の選択である。同じ型式の土器の素地土には同じ混和材が使用されるのであれば、その混和材に沖縄本島北部の周辺でのみ産出する岩石や鉱物が含まれる場合、沖縄本島中部南側や同南部となる地域に居住する先史時代の人々は、北部まで行って混和材を直接採取するか、交易・交換によって混和材を手に入れるしかない(注9)。このような結果は、同地域の先史時代の人々が石器製作の材料となる石材を入手する方法について検討する際にも、同様のことがいえる。上述したような先史沖縄諸島人の土器の混和材に対するこだわりは、これが事実であれば、日常生活活動にある程度の拘束を加えるものであり合理的ではない。小林達雄氏は、土器の素地土における混和材の選択と配合に関して、「単なる素地土の物理的性質を調整することのみであるのではなく、むしろ土器製作の流儀・作法としての伝統・約束を背景にもつものである」と述べている(注10)。小林氏の見解に従えば、このような土器の混和材へのこだわりは先史沖縄諸島人の精神的支柱の一部であったといえよう。さて、では混和材は具体的にどのような場所で採取されたのであろうか。この点については、「土器の材料となった砂は、複数の地質を流域にもつ河川砂に由来する可能性が高い」とする見解がある(注11)。石器石材に関しては海岸や河川に分布する河原石等の自然礫を多く利用したであろうことが推測されるから(注12)、土器混和材の採取地と石器石材の採取地が同じ場所であることも考えられる。今後は、土器の胎土分析に基づく混和材採取地の検討に石器石材採取地を関連させながら検証することが大事ではないかと考える。また、沖縄本島中部南側や同南部に所在する先史時代遺跡から出土する土器資料の理化学的胎土分析の事例が増加すれば、上述したように先史沖縄諸島人の土器に対する考えの一端が明らかになる可能性もある。

今回の調査では、VII層や遺構等から、石英の小さな自然礫が4点出土している(第9表参照)。これらの資料を材料として石器を製作するにはサイズが小さすぎる感があるし、この種の礫を加工したと推測されるような装飾品等の石製品も得られていない。本遺跡周辺では石英は産出しなから、これらの小礫が外部から搬入されたことは確かであろうが、ではどのような経緯で持ち込まれたのであろうか。それについては、上述した土器混和材の他地域からの搬入が関係しているのではないかと推測される。つまり、これらの自然礫は、搬入された土器混和材となる砂礫に混じっていたものではないかと考えられる。このような石器石材とは考えにくい遺跡外部から持ち込まれた未加工の自然小礫の検出は、土器混和材の他地域からの搬入に関する一つの証となりうるものではなかろうか。今後は、搬入された土器混和材となる砂礫そのものを先史時代の遺跡から検出することも視野に入れて、調査を行う必要があらうと考える。

〔注〕

- 1 沖縄県教育委員会 『宮城島遺跡分布調査報告』 1989年3月 Fig.63-6 129頁
- 2 宜野座村教育委員会 『前原遺跡』 1999年3月 第73図1～3 111頁
- 3 沖縄県教育委員会 『喜友名貝塚・喜友名グスク』 1999年3月 第58図10 142頁
- 4 仲宗根求「熱田原型石器の提唱 — アッズ・ブレイドの類例集成」『廣友会誌』第5号 廣友会 2009年12月
- 5 注4文献に同じ。

- 6 注4文献に同じ。
- 7 大堀皓平「先史沖縄における磨製石斧製作 — 戦略束とその選択」『南島考古』No.29 沖縄考古学会 2010年6月、大堀皓平・瑞慶覧長順「本部町新里遺跡表探の磨製石斧」『紀要 沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年、大堀皓平「先史沖縄人の在地性 — 縄文時代後晩期から弥生時代前中期併行段階における石器石材」『南島考古』No.25 沖縄考古学会 2006年5月
- 8 上田圭一・矢作健二・橋本真紀夫「琉球列島の土器胎土分析研究 — 沖縄県下の土器胎土分析とその効果」『南島考古』No.28 沖縄考古学会 2009年5月
- 9 当然ながら、このような検討では、沖縄本島中部南側や同南部となる地域に居住する先史時代の人々が、土器製作を自ら行っていたことを前提とする。
- 10 小林達雄「総論 — 縄文土器の生態」加藤晋平・小林達雄・藤本強(編)『縄文文化の研究』5(縄文土器Ⅲ) 雄山閣出版 1994年
- 11 注8文献に同じ。
- 12 安里嗣淳「先史沖縄諸島人の交通」沖縄県立図書館史料編集室『史料編集室紀要』第17号 1992年3月

《参考文献》 ※《注》に示した文献を除く。

- 加藤晋平・鶴丸俊明『図録石器の基礎知識Ⅰ — 先土器(上)』柏書房 1980年
 加藤晋平・鶴丸俊明『図録・石器入門事典(先土器)』柏書房 1991年
 鈴木道之助『図録・石器入門事典(縄文)』柏書房 1991年
 白木原和美「クガニイシ」龍田考古会(編)『南西諸島の先史時代 — 白木原和美南島関係論文選』1999年
 中山清美「奄美諸島の石器・石製品」高宮廣衛・知念勇(編)『考古資料大観』第12巻(貝塚後期文化)小学館 2004年
 岸本義彦「沖縄諸島の石器・石製品」高宮廣衛・知念勇(編)『考古資料大観』第12巻(貝塚後期文化)小学館 2004年
 佐原真「Ⅳ 石器論」金閔恕・春成秀爾(編)『佐原真の仕事2 道具の考古学』岩波書店 2005年
 佐原真「Ⅰ 武器論」金閔恕・春成秀爾(編)『佐原真の仕事4 戦争の考古学』岩波書店 2005年
 本部町教育委員会『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』2005年3月
 北谷町教育委員会『伊礼原遺跡』2007年3月
 北谷町教育委員会『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡』2008年3月
 岡本孝之・仲宗根求「伊江島型石斧」『廣友会誌』第4号 廣友会 2008年12月
 本部町教育委員会『瀬底島・アンチの上貝塚』2009年3月

第6表 磨製石斧詳細一覧

揮図番号	分類	部位	石材	現存重量 (g)	出 土 地 点	備 考	通し 番号		
—	第 I 類	—	緑色片岩	174	A 7 グリッドV層 (No.1632)	粗割・破損	1		
—			緑色片岩	142	B 7 グリッドV層 (No.1617)	粗割	2		
—			緑色千枚岩	494	A 7 グリッドV層 (No.1124)	粗割	3		
—			緑色千枚岩	183	A 8 グリッドV層 (No.293)	粗割	4		
—			緑色千枚岩	464	A 7 グリッドV層 (No.1620・1626)	粗割・接合	5		
—			緑色千枚岩	108	A 6 グリッドSK 3 上 (No.1634)	粗割・破損	6		
—			緑色千枚岩	78	A 6 グリッドSK 3 (No.1663)	粗割・破損	7		
—			砂岩	133	B 7 グリッド層位横転 (No.2193-1)	粗割	8		
—			砂岩	368	A 8 グリッドSD 2 (No.1263)	粗割?・分類不適切?	9		
—			砂岩	542	B 3 グリッドSK 1 最下部 (No.1568)	粗割?・分類不適切?	10		
—	第 II 類	全体	緑色片岩	204	A 7 グリッドV層 (No.219・1118)	接合	11		
—			緑色片岩	188	B 6 グリッドV層 (No.609)		12		
—			緑色千枚岩	39	B 3 グリッドSK 1 (No.1451)	小形	13		
—			緑色片岩	310	A 4 グリッドVI層 (No.3)		14		
—			緑色片岩	312	A 7 グリッドV層 (No.1126)		15		
—			緑色片岩	343	B 7 グリッドV層 (No.1616)		16		
—			緑色片岩	194	B 3 グリッドSK 1 (No.1350)		17		
—			緑色千枚岩	160	B 8 グリッドV層 (No.706)		18		
—			緑色岩	180	A 4 グリッドSI 3 (No.1289)		19		
—			緑色岩	88	B 3 グリッドSK 1 上 (No.1320)	打製石斧?	20		
—	第 III 類	基部	緑色岩	59	B 3 グリッドSK 1 (No.1509)		21		
—			砂岩	59	A 7 グリッドV層 (No.1612)		22		
—			緑色片岩	76	B 8 グリッドV層 (No.1445)	第IV類?	23		
—			緑色片岩	160	A 8 グリッドSD 2 (No.1265)		24		
—			緑色片岩	149	A 5 グリッドSI 2 (No.1330)	第IV類?	25		
—			緑色片岩	147	B 7 グリッドSD 1 (No.1236)		26		
—			変輝緑岩	226	B 6 グリッドSI 5 (No.1364)		27		
第69図1			第 IV 類	全体	緑色片岩	267	A 8 グリッドV層 (No.1606)	片刃	28
第69図3					緑色岩	134	A 6 グリッドSI 2 上 (No.1209)	両刃	29
第69図4					緑色千枚岩	208	B 6 グリッドSD 1 (No.1292)	両刃	30
—	緑色千枚岩	63			A 3 グリッドV層 (No.1108)	片刃・小形	31		
第71図13	基部	緑色岩			276	A 3 グリッドSK 1 下 (No.1578)		32	
第71図14		緑色片岩			145	A 6 グリッドV層 (No.23)		33	
第71図15		緑色千枚岩			194	A 6 グリッドSD 1 下 (No.1317)		34	
—		緑色片岩			217	A 3 グリッドVI層 (No.2)		35	
—		緑色片岩			136	A 5 グリッドV層 (No.13)		36	
—		緑色片岩			207	A 8 グリッドSD 2 (No.1267)		37	
—		緑色片岩	192	B 6 グリッドSI 5 (No.1310)		38			
—		緑色片岩	168	B 4 グリッドSK 3 (No.1376)		39			
—		緑色千枚岩	185	B 6 グリッドSI 5 (No.1329)		40			
—		緑色岩	38	A 6 グリッドV層 (No.1637)		41			
—	第 IV 類	基部	緑色岩	94	B 4 グリッドSK 1 最下部 (No.1571・2200)	接合	42		
第69図5			緑色片岩	132	A 8 グリッドV層 (No.294)	両刃	43		
第69図6			緑色千枚岩	31	A 3 グリッドSK 1 上 (No.1481)	両刃	44		
第70図7			緑色千枚岩	88	A 7 グリッドSK 3 (No.1636)	両刃	45		
第70図8			緑色片岩	146	B 6 グリッドV層 (No.702)	両刃	46		
—			緑色千枚岩	5	B 6 グリッドV層 (No.1116)	両刃・細片	47		
—			緑色岩	35	B 6 グリッドSI 5 (No.1345)	両刃・小形・偏刃?	48		
—			緑色岩	16	B 3 グリッドSK 1 (No.2159-1)	片刃・細片	49		

第7表 敲石・磨石類詳細一覧(その1)

押図番号	分類	石材	現存重量 (g)	出土地点	備考	通し 番号
第72図16		砂岩	1,810	B7グリッドV層(№1237)		1
—		砂岩	328	A3グリッドV層(№11126)		2
—		砂岩	535	A4グリッドV層(№881)		3
—		砂岩	284	A5グリッドV層(№606)		4
—		砂岩	104	A5グリッドV層(№664)		5
—		砂岩	187	A7・8、B8グリッドV層(№553・923・1449)	接合	6
—		砂岩	582	B5グリッドV層(№607)	第Ⅱ類?	7
—		砂岩	734	B5グリッドV層(№635)		8
—		砂岩	384	B8グリッドV層(№1055)		9
—		砂岩	268	A7グリッドV層(№1623・2174-2)	接合	10
—		砂岩	508	A7グリッドV層(№2226)		11
—		砂岩	374	B7グリッドV層(№1700)	断面三角形	12
—		砂岩	566	A8グリッドSD2(№1268)	断面三角形	13
—		砂岩	141	B8グリッドSD3(№1139・1425)	接合	14
—		砂岩	740	A5グリッドSI2(№1288)		15
—		砂岩	66	A6グリッドSI4(№1665)		16
—		砂岩	113	B6グリッドSI5(№1338)		17
—		砂岩	336	A3グリッドFSK1上(№1519)		18
—		砂岩	80	B3グリッドFSX1上(№1327)		19
—		片状砂岩	190	A6グリッドV層(№1231)		20
—		片状砂岩	314	A7グリッドV層(№1627)		21
—		片状砂岩	348	A5グリッドSI2(№1274)		22
—		片状砂岩	40	A3グリッドFSK1上(№1482)		23
—	第Ⅰ類	片状砂岩	916	A6グリッドFSK3(№1725)		24
—		緑色岩	173	A6グリッドVI層(№5)		25
—		緑色岩	823	A7グリッドV層(№1119・1120・1121)	接合	26
—		緑色岩	824	A7グリッドV層(№1125)		27
—		緑色岩	288	B7グリッドV層(№704)		28
—		緑色岩	1,215	A7グリッドV層(№1229)		29
—		緑色岩	158	A7グリッドV層(№1619)		30
—		緑色岩	381	B7グリッドV層(№1615)		31
—		緑色岩	198	B7グリッド層位横転(№2185-4)		32
—		緑色岩	146	A・B-4・5グリッド擾乱乱(№2076-1)		33
—		緑色岩	179	B8グリッドSD3(№1141)		34
—		緑色岩	114	B8グリッドSD3(№1143)		35
—		緑色岩	645	B6グリッドSD4(№1222)	断面方形	36
—		緑色岩	98	B6グリッドSD4(№1357)		37
—		緑色岩	757	A6グリッドSI2上(№1203)		38
—		緑色岩	923	A5グリッドSI3(№1284)		39
—		緑色岩	85	B3グリッドFSX1(№2210-1)		40
—		緑色千枚岩	258	A7グリッドV層(№1611)		41
—		緑色千枚岩	235	B6グリッドSD4(№1217)		42
—		緑色千枚岩	354	B7グリッドSD4(№1355)		43
—		緑色片岩	250	B7グリッドV層(№304)		44
—		緑色片岩	268	B4グリッドFSX1(№1404)	第Ⅱ類?	45
—		変質安山岩	460	A6グリッドSI2(№1204・1270・1271)	接合・第Ⅱ類?	46

第7表 敲石・磨石類詳細一覧(その2)

挿図番号	分類	石材	現存重量 (g)	出土地点	備考	通し 番号
第72図17	第Ⅱ類	緑色片岩	953	A 7 グリッドVII層 (No.1630)	完形	47
第72図18		片状砂岩	642	A 8 グリッドVII層 (No.2222)	完形	48
第73図19		片状砂岩	860	B 8 グリッドVII層 (No.1604)	完形	49
第73図20		砂岩	773	A 4 グリッドVII層 (No.1307)	一部欠失	50
第73図21		砂岩	682	A 6 グリッドS I 4 (No.1666)	完形	51
第74図22		片状砂岩	1,120	B 7 グリッドVII層 (No.1474)	一部欠失	52
第74図23		片状砂岩	938	A 7 グリッドVII層 (No.1500)	一部欠失	53
第74図24		片状砂岩	865	B 6 グリッドVII層 (No.703)	一部欠失	54
第75図26		砂岩	316	A 7 グリッドVII層 (No.1641)	一部欠失	55
—		緑色岩	258	B 6 グリッドSD 4 (No.1221)	完形・小形	56
—		緑色岩	235	A 7 グリッドVII層 (No.1005)	部分残存	57
—		緑色岩	363	B 7 グリッドVII層 (No.1426)	部分残存	58
—		緑色岩	271	A・B-5・6グリッド攪乱14 (No.2075-1)	部分残存	59
—		緑色岩	608	B 6 グリッドS I 5 (No.1316)	部分残存	60
—		緑色岩	100	B 6 グリッドS I 5 (No.1346)	小片	61
—		緑色岩	131	B 3 グリッドS X 1 (No.1403)	小片	62
—		緑色千枚岩	863	A 6 グリッドSK 3 (No.1684)	部分残存	63
—		砂岩	237	B 5 グリッドVII層 (No.608)	部分残存	64
—		砂岩	152	A・B 6 グリッド攪乱 2 (No.2034)	部分残存	65
—		砂岩	261	B 3 グリッドS X 1 (No.1598)	部分残存	66
—	片状砂岩	177	A 7 グリッドVII層 (No.924)	部分残存	67	
—	片状砂岩	696	A 7 グリッドVII層 (No.2176)	部分残存	68	
—	片状砂岩	100	B 6 グリッドSD 4 (No.1218)	部分残存	69	
第70図9	第Ⅲ類	緑色片岩	451	A 7 グリッドVII層 (No.1478)	一部欠失・石弁転用	70
第70図10		緑色片岩	241	B 6 グリッドS I 5 (No.1388)	部分残存・石弁転用	71
第70図11		緑色千枚岩	257	B 5 グリッドS I 2 最下部 (No.1550)	部分残存・石弁転用	72
第71図12		緑色片岩	362	A 7 グリッドVII層 (No.1642)	部分残存・石弁転用	73
第74図25		緑色岩	343	B 7 グリッドVII層 (No.1703)	一部欠失	74
第75図28		砂岩	389	B 3 グリッドS X 1 上 (No.1325)	完形	75
第75図29		砂岩	989	A 7 グリッドVII層 (No.1625)	部分残存	76
第75図30		緑色千枚岩	292	A 3 グリッドSK 1 下 (No.1580)	完形・棒状形・両端使用	77
—		緑色千枚岩	219	A 5 グリッドS I 3 (No.1279)	一部欠失・やや扁平・側面2箇所を使用	78
—		緑色片岩	277	B 8 グリッドVII層 (No.952)	一部欠失・平面楕円形?・断面半月形・側面使用	79
—		砂岩	165	B 6 グリッドSD 4 (No.1355)	完形・棒状形・片端のみ使用	80

第8表 石皿詳細一覧

挿図番号	分類	石材	現存重量 (g)	出土地点	備考	通し 番号
第76図31	第Ⅰ類	砂岩	1,722	A 5 グリッド S I 2 (№1273)	部分残存	1
第76図32		片状砂岩	1,465	A 8 グリッド VII層 (№1606)	部分残存	2
—	第Ⅱ類	緑色岩	419	A 7 グリッド VII層 (№2174-1)	小片	3
—		緑色岩	569	B 6 グリッド S I 5 (№1332)	小片	4
—		緑色岩	336	B 6 グリッド S I 5 (№1343)	小片	5
—		砂岩	335	B 7 グリッド VII層 (№148・149・150・302・303)	小片・接合	6
—		砂岩	404	B 8 グリッド VII層 (№206)	小片	7
—		砂岩	2,000	A 8 グリッド VII層 (№1607)	部分残存・板状形	8
—		砂岩	119	B 3 グリッド S X 1 (№1516)	小片・板状形	9
—		片状砂岩	1,450	A 7 グリッド VII層 (№1621)	小片	10
—		片状砂岩	2,600	B 7 グリッド VII層 (№1614)	部分残存・表裏両面 使用	11
—		第Ⅲ類	緑色岩	535	A 3 グリッド S K 1 上 (№1484)	小片
—	片状砂岩		238	B 6 グリッド VII層 (№1172)	小片	13

第9表 チャート・石英資料詳細一覧

採回番号	石材	種別	現存重量 (g)	出土地点	備考	通し 番号
第78図38	チャ ー ト	剥片	2.87	調査区西側Vb層(№2053)	暗灰(N3/)	1
第78図40			0.80	B3・4グリッドSX1(№2143-17)	灰(N4/)	2
—			4.69	B1グリッドV層(№2043-1)	暗赤-灰(2.5GY4/1)	3
—			0.77	A7グリッドVI層最下部(№2091-2)	黒(N2/)	4
—			0.38	A5グリッドVII層(№874)	極暗赤褐(10R2/2)	5
—			0.67	A5グリッドVII層(№682)	暗赤灰(10R3/1)	6
—			1.66	A6グリッドVII層(№720)	暗緑灰(10GY4/1)	7
—			0.29	A7グリッドVII層(№340)	緑灰(10GY5/1)	8
—			1.40	A8グリッドVII層(№256)	黒(N2/)	9
—			0.56	B7グリッドVII層(№1448)	緑灰(10GY5/1)	10
—			2.70	B8グリッドVII層(№213)	暗オリーブ灰(2.5GY4/1)	11
—			0.41	B8グリッドVII層(№182)	灰白(N7/)	12
—			0.30	B8グリッドVII層(№524)	緑灰(10GY5/1)	13
—			1.44	A・B6グリッドSD1上(№2106-1)	緑灰(7.5GY6/1)	14
—			0.49	A・B6グリッドSD1上(№2106-2)	緑灰(10GY5/1)	15
—			0.39	A6グリッドSD1(№2141-16)	灰(N4/)	16
—			0.57	B6グリッドSI5(№2147-16)	緑灰(10GY6/1)	17
—			0.45	B6グリッドSI5(№2147-16)	明オリーブ灰(5GY7/1)	18
—			3.13	B6グリッドSI5(№2148-29)	灰白(2.5GY8/1)	19
—			0.11	A3グリッドSK1(№2163-5)	灰白(2.5GY8/1)	20
—	自然小円礫	6.25	B1グリッドV層(№2043-4)	黒(N2/)	21	
第78図39	石 英	剥片	3.58	調査区西側V層最下部~VI層(№2060-8)		22
—			15.38	調査区西側V・VI層(№2062-1)		23
—			1.42	調査区西側V・VI層(№2062-2)		24
—			6.23	調査区西側V・VI層(№2062-3)		25
—			3.51	A3グリッドVII層(№1109)		26
—			0.68	A7・8グリッドVII層(№1012)		27
—			21.72	B3・4グリッドSK1(№2143-11)	石鉄?	28
—			13.58	B4グリッドSX1(№2157-2)		29
—			16.04	B4グリッドSX1(№1378)		30
—			1.64	A7・8グリッドVII層(№262)	長軸16mm	31
—		4.76	A7グリッドVII層(№8115-7)	破砕・長軸21mm	32	
—		12.97	A6グリッドSD1(№2141-10)	長軸32mm	33	
—		3.72	B6グリッドSI5(№2148-30)	長軸21mm	34	

※ チャートの色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版 標準土色帖』(2010年版)に準拠した。

第10表 石器観察一覧

博覧番号 図版番号	器種	分類	石材	残存 状況	計測値 (mm・g)				特徴	出土 地点
					最大長	最大幅	最大厚	現存 重量		
第69図 1 図版40の1	石斧	第IV類	緑色片岩	一部欠失	131	55	25	267	片凸刃。平面形は、バチ形。凸刃側となる主面の刃面及び基部に研磨が施される。ただし、基部の研磨は部分的なもので、その痕跡はあまり明瞭ではない。全体的に、調整痕跡及び敲打の痕跡が、よく残る。刃縁を部分的に欠失。	A 8 グリッド 層 №1606
第69図 2 図版40の2	石斧	第IV類	緑色千枚岩	部分残存	80	44	16	108	両凸刃。平面形は、折損のため明瞭ではないが、短冊形となるものか。主面の片側が、破損のため剥離している。研磨を残存する主面のほぼ全体に施すが、刃面周辺がより徹底している。側面には、敲打痕がみられる。刃縁は磨滅している。	試掘坑 4 層
第69図 3 図版40の3	石斧	第IV類	緑色岩	一部欠失	98	40	19	134	両凸刃。直刃か。刃部周辺を部分的に欠失するが、平面形は概ねバチ形になるものと推測される。研磨を、主面及び側面に施す。ただし、主面の基部及び側面の研磨は、不徹底で部分的なものである。	A 6 グリッド S 1 2 上 №1209
第69図 4 図版40の4	石斧	第IV類	緑色千枚岩	一部欠失	107	44	26	208	両凸刃。平面形はバチ形に近いが、ややいびつである。明らかな研磨は、刃部のみみられる。残存する刃縁は、ほぼ磨滅している。	B 6 グリッド S D 1 №1292
第69図 5 図版40の5	石斧	第IV類	緑色片岩	小片	65	56	33	132	両凸刃で円刃。刃部周辺のみが残存。残存面のほぼ全体に研磨を施す。刃縁を一部欠失。	A 8 グリッド 層 №294
第69図 6 図版40の6	石斧	第IV類	緑色千枚岩	小片	34	59	10	31	両凸刃で円刃。刃部周辺が部分的に残存。主面は平坦で、厚みは薄い。基部の研磨は不徹底。刃面の縁は、概ね明瞭。	A 3 グリッド S K 1 上 №1481
第70図 7 図版41の7	石斧	第IV類	緑色千枚岩	部分残存	64	41	17	88	両凸刃で直刃。刃面の片側は、形状が平刃に近い。平面形は、概ね短冊形。基部側を欠失。刃面及び側面の研磨が徹底している。	A 7 グリッド S K 3 №1636
第70図 8 図版41の8	石斧	第IV類	緑色片岩	部分残存	61	49	29	146	両凸刃。平面形は、バチ形か。基部側を欠失。残存面は荒れており、研磨の痕跡は不明瞭。刃縁は、かなり磨滅している。あるいは、敲石に転用したものか。	B 6 グリッド 層 №702
第70図 9 図版41の9	敲石・磨石類 (石斧転用)	第Ⅲ類	緑色片岩	一部欠失	105	56	46	451	両凸刃石斧の転用品と推測される。残存面は荒れており、研磨の痕跡は不明瞭。刃縁はかなり磨滅しており、やや平ら面をなす。刃部付近の欠失部分は、敲石としての使用時に破損したものか。基部側の破損面の縁は磨滅しており、丸みを帯びる。側縁部分に敲打の痕跡あり。	A 7 グリッド 層 №1478
第70図 10 図版41の10	敲石・磨石類 (石斧転用)	第Ⅲ類	緑色片岩	部分残存	93	53	34	241	石斧基部の転用品と推測される。表面の研磨の痕跡は不明瞭。石斧の側面を敲打に使用したものと推測され、両側面が凹む。	B 6 グリッド S 1 5 №1388
第70図 11 図版41の11	敲石・磨石類 (石斧転用)	第Ⅲ類	緑色千枚岩	部分残存	91	58	33	257	両凸刃石斧の転用品と推測される。円刃であろう。刃部の研磨の痕跡が明瞭である。主面の片側が、破損のため剥離している。石斧の側面を敲打に使用したものと推測され、両側面が凹む。	B 5 グリッド S 1 2 最下部 №1650

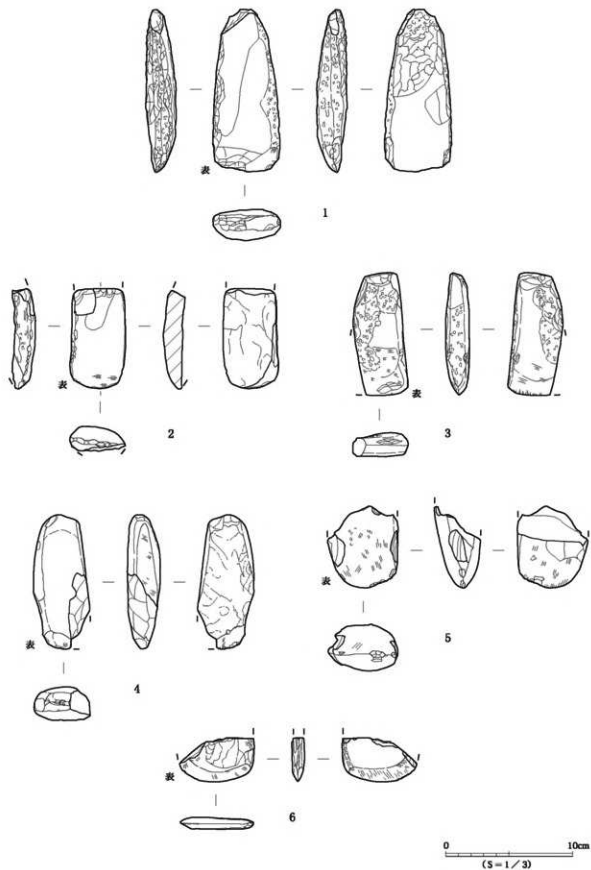
採掘番号 図版番号	器 種	分 類	石 材	残存 状況	計測値 (mm・g)			現存 重量	特 徴	出土 地点
					最大長	最大幅	最大厚			
第71圖 12 図版42の12	磨石・磨石類 (石斧転用)	第Ⅲ類	緑色片岩	部分残存	88	62	40	362	石斧の刃部側破片の転用品と推測される。刃部は、敲打による磨蝕及び割離のため、残存していない。あるいは、石斧の基礎側の破片とも考えられる。研磨の痕跡は、判然としない。側縁の一部に、敲打の痕跡あり。	A7グリッド Ⅴ層 №1642
第71圖 13 図版42の13	石斧	第Ⅳ類	緑色岩	部分残存	97	51	33	276	石斧の基礎側の破片であろう。平面形は、バチ形になる可能性が高い。全体的に丁寧に成形しており、側面の一部及び主面に研磨が明瞭に確認できる。側面及び基礎面に敲打痕がみられ、石斧成形の際の調整痕であることが推測されるが、石斧破損後に敲石へと転用した痕跡とも考えられる。	A3グリッド SK1下 №1578
第71圖 14 図版42の14	石斧	第Ⅳ類	緑色片岩	小片	55	50	32	145	石斧の基礎周辺の破片であろう。平面形は、バチ形か。研磨の痕跡は不明瞭。	A6グリッド Ⅴ層 №23
第71圖 15 図版42の15	石斧	第Ⅳ類	緑色千枚岩	部分残存	100	51	23	194	石斧の基部と推測される。刃部は、残存しない。成形に伴う調整痕は不明瞭。主面の片側と側縁に、幅16～23mmの凹面を施す。	A6グリッド SD1下 №1317
第72圖 16 図版43の16	磨石・磨石類	第Ⅰ類	砂岩	部分残存	154	112	98	1,810	大形の磨石の破片と推測される。残存面のほぼ全体に、磨面が確認できる。明確な敲打痕は、認められない。破損面の縁の一部に丸みがあり、現状のままの状態でも使用されていた可能性がある。	B7グリッド Ⅴ層 №1237
第72圖 17 図版43の17	磨石・磨石類	第Ⅱ類	緑色片岩	完形	138	95	42	953	自然の円縁をそのまま利用したものとして推測される。表裏面の片側の面のみ広い範囲で磨面、縦軸が通る側面の片側面に敲打の痕跡が確認できる。ただし、使用回数は少ないようである。	A7グリッド Ⅴ層 №1630
第72圖 18 図版43の18	磨石・磨石類	第Ⅱ類	片状砂岩	完形	101	79	49	642	表裏面及び横軸が通る側面を、磨面として利用したと推測されるが、その痕跡は必ずしも明瞭ではない。表裏面の各中央、及び縦軸が通る側面を、敲打に利用したと推定される。ただし、片側側面の敲打痕は、あまり明瞭ではない。	A8グリッド Ⅴ層 №2222
第73圖 19 図版44の19	磨石・磨石類	第Ⅱ類	片状砂岩	完形	134	86	50	860	表裏面を磨面として利用したと推測され、特に片側の面はその使用痕跡が明瞭である。敲打は、表裏面の各中央にその痕跡がみられ、回っている。敲打に伴う凹みの深い面は磨面としての使用があまり顕著でなく、明らかな磨面を有する面の凹みは浅いことから、磨面と敲打の使用面を、表裏面である程度使い分けていた可能性がある。側面の敲打の痕跡は不明瞭。	B8グリッド Ⅴ層 №1604
第73圖 20 図版44の20	磨石・磨石類	第Ⅱ類	砂岩	一部欠失	110	103	48	773	表裏面の片側が破損しているが、破損部の縁の一部に丸みを帯びており、現状のまま使用し続けていた可能性がある。表裏面に磨面を有する。原状を伴った片側の中央に、敲打による凹みがある。側面の敲打の痕跡はあまり明瞭ではないが、現状で見られる割離等の破損は側面側での敲打の際に生じたものではないかと推測される。	A4グリッド Ⅴ層 №1307

採掘番号 図版番号	器 種	分 類	石 材	残存 状況	計測値 (mm・g)			現存 重量	特 徴	出土 地点
					最大長	最大幅	最大厚			
第73図 21 図版44の21	敲石・磨石類	第Ⅱ類	砂岩	完形	110	106	40	682	表裏面に、明瞭な磨面を有する。片面にのみ、その中央に敲打による凹み一つ有する。その反対側の面は凸面となり、断面形は弧状を呈する。側面全体を敲打に使用していると推測される。表裏面と側面との間に、明瞭な稜を有する。	A 6グリッド S 1 4 №1666
第74図 22 図版45の22	敲石・磨石類	第Ⅱ類	片状砂岩	一部欠失	133	102	53	1,120	石材の風化が進むためか、脆く割れやすいようである。表裏面を磨面として使用したと推測されるが、その痕跡はあまり明瞭ではない。表裏面の片側の明瞭な敲打の痕跡がみられ、その中央にやや深い凹み一つ確認できる。側面の敲打痕は明瞭ではないが、その輪郭の定形性から、側面部全体を敲打に使用した可能性が高いと考える。	B 7グリッド Ⅷ層 №1474
第74図 23 図版45の23	敲石・磨石類	第Ⅱ類	片状砂岩	一部欠失	120	90	58	938	表裏面に、磨面を有する。表裏面の各中央に、敲打の痕跡がみられる。片側の面は敲打による凹みが明瞭に確認できるが、その反対側の面では敲打の痕跡があまり明瞭ではない。縦軸及び横軸が通る側面4箇所を、敲打に使用していると推定される。現状でみられる破損部分は、側面部での敲打の際に生じたものではないかと推測される。	A 7グリッド Ⅷ層 №1500
第74図 24 図版45の24	敲石・磨石類	第Ⅱ類	片状砂岩	一部欠失	136	87	56	865	火熱を被るものか、やや脆いようである。表裏面に磨面を有するが、敲打痕のある片面で確認できる磨面は、かなり部分的なものである。その片面の中央でみられる敲打の痕跡は明瞭で、凹み一つ有する。縦軸及び横軸が通る側面4箇所を、敲打に使用していると考えられる。現状でみられる破損部分は、側面部での敲打の際に生じたものではないかと推測される。	B 6グリッド Ⅷ層 №703
第74図 25 図版45の25	敲石・磨石類	第Ⅲ類	緑色岩	一部欠失	90	56	49	343	表裏面及び横軸が通る片側面に磨面を有するようであるが、その痕跡はあまり明瞭とはいえない。あるいは、石材がもともと有する滑らかな自然面である可能性もある。敲打の痕跡としては、縦軸が通る側面が主な使用面であろう。現状でみられる破損部分は、側面部での敲打の際に生じたものであろうか。	B 7グリッド Ⅷ層 №1703
第75図 26 図版46の26	敲石・磨石類	第Ⅱ類	砂岩	一部欠失	84	68	40	316	表裏面に、磨面を有する。横軸の通る両側面を、敲打の際の主な使用面としているようである。両側面ともに、敲打で大きく剥離したものと推測される。	A 7グリッド Ⅷ層 №1641
第75図 27 図版46の27	クガニシ?	—	砂岩	完形	108	85	56	723	形状がいわゆる「クガニシ」に類似するが、サイズが小さい。凸面となる表面の中央部周辺に不明瞭な敲打痕がみられ、その周囲を取り囲むように磨面がみられる。平坦となる裏面も磨面となり、縦軸が通る側面で厚みが薄くなる側(断面図中の表面図上辺)に平行して深い凹線がみられるが、あまり明瞭ではない。側面全体はある程度敲打に使用している可能性があるが、その痕跡は必ずしも明瞭ではない。	試験坑4 5層
第75図 28 図版46の28	敲石・磨石類	第Ⅲ類	砂岩	完形	83	60	56	389	横軸・奥行軸方向での断面形が、角の丸い三角形となる。三面各々の中央に、敲打による凹みがある。表裏面及び横軸が通る両側面に、部分的に磨面がみられる。磨石としての使用回数はいくつか少ないようである。縦軸が通る側面部での敲打の痕跡は、あまり明瞭ではない。	B 3グリッド S X 1 上 №1325

標記番号 図版番号	器 種	分 類	石 材	残存 状況	計測値 (mm・g)			現存 重量	特 徴	出土 地点
					最大長	最大幅	最大厚			
第75図 29 図版46の29	磨石・磨石類	第Ⅲ類	砂岩	部分残存	151	81	60	989	表裏面の磨石としての使用痕跡は、判然としない。あるいは、石材がもたらかる可能性もある。敲打面である可能性もある。敲打面は縦軸及び横軸が通る側面各々の片面のみにならるが、その使用回数は少ないようである。	A 7グリッド Ⅷ層 №1625
第75図 30 図版46の30	磨石・磨石類	第Ⅲ類	緑色千枚岩	完形	136	44	31	292	縦軸方向に長い棒状の自然礫を石材とする。石材の縦軸方向の両端を、敲打に利用している。	A 3グリッド SK 1下 №1590
第76図 31 図版47の31	石皿	第Ⅰ類	砂岩	部分残存	175	200	36	1,722	表裏面の片面のみを、石皿として使用している。断面形が弧を描く使用面の底面は、縦軸方向の2箇所よりゆかに凹む。裏面は概ね平坦で、磨いて使用するのに適している。	A 5グリッド S 1 2 №1273
第76図 32 図版47の32	石皿	第Ⅰ類	片状砂岩	部分残存	196	135	57	1,465	表裏両面を、石皿として使用している。使用面の断面形は、表裏面ともに弧状に凹む。	A 8グリッド Ⅷ層 №1605
第77図 33 図版46の33	熱田原石石器	—	頁岩	完形	33	17	2	2.23	平面形は、方形を呈する。縦軸方向の両端に、刃部を有する。両端ともに、表裏両側からの研磨により、刃面をつくりだす(両刃)。横軸が通る側面は、研磨調整により平坦に仕上げられる。基部表裏面への研磨調整の痕跡は、判然としない。	A 5グリッド S 1 3 №1277
第77図 34 図版46の34	熱田原石石器	—	頁岩	一部欠失	34	14	2	1.37	平面形は、方形を呈する。縦軸方向の片端に、刃部を有する。表裏両側からの研磨により、刃面をつくりだす(両刃)。反対側の端は、敲打により欠失している。そのため、研磨等の加工は確認できない。横軸が通る側面は、研磨調整により平坦に仕上げられる。基部表裏面への研磨調整の痕跡は、判然としない。	B 7グリッド SD 3 №1244
第77図 35 図版46の35	熱田原石石器	—	頁岩	一部欠失	50	23	3	4.74	敲打のため一部を欠失するが、本来は平面形が方形を呈すると推定される。縦軸方向の片端に、刃部を有する。表裏両側からの研磨により、刃面をつくりだす(両刃)。反対側の端に関しては、概ね原状を保つと考えるが、研磨調整等の加工は明確には確認できない。横軸が通る側面は、研磨調整により平坦に仕上げられる。基部表裏面への研磨調整の痕跡は、判然としない。	B 7グリッド 層位調整 №2184-1
第77図 36 図版46の36	熱田原石石器	—	頁岩	小片	18	24	4	2.12	刃部のみ破片資料のため、本来の形状は不明であるが、使用する石材の種類や残存する形状から、第77図33～35とほぼ同様の製品であると推定される。残存する表裏両面の全体に、研磨調整を施す。表裏両側からの研磨により、刃面をつくりだす(両刃)。残存する片面側面には、表裏片面側から刃面と同様の研磨調整を施すため、側面の厚みが薄くなっている。側面は、研磨調整により平坦に仕上げられる。	B 8グリッド Ⅷ層最下部 №2120-3
第78図 37 図版49の37	石鏃	—	チャート	一部欠失	10	17	3	0.52	先端部分が欠失するが、即基無基鏃になるものと推定される。押圧痕跡により、細部加工が施される。横軸・奥行軸方向での断面形は、紡錘形を呈する。全体の色調は、緑灰(7.5GY 5/1)を呈する。	B 3グリッド Ⅷ層 №1065

標記番号 図版番号	器 種	分 類	石 材	残存 状況	計測値 (mm・g)				特 徴	出土 地点
					最大長	最大幅	最大厚	現存 重量		
第78図 38 図版49の38	剥片	—	チャート	完形?	22	18	9	2.87	平面形は、形の崩れた台形状を呈す。矢印で示した範囲が、刃部として想定できる。刃部加工の痕跡は、明瞭ではない。全体の色調は、暗灰(N3/)を呈する。	調査区西側 VIb層 No.2053
第78図 39 図版49の39	剥片	—	石英	一部欠失?	19	22	8	3.58	平面形は、形の崩れた台形状を呈す。矢印で示した範囲が、刃部として想定できる。刃部加工の痕跡は、明瞭ではない。刃部の一部を、欠失している可能性がある(転回箇中の表面面の右側無縁上端部分)。	調査区西側 V層最下部～ VI層 No.2000-8
第78図 40 図版49の40	剥片	—	チャート	完形?	15	12	4	0.80	サイズの小さい薄い剥片である。矢印で示した範囲が、刃部として想定できる。使用の結果であろうか、全体的に摩耗し滑らかになっている。あるいは、石鑿製作に伴う失敗品を転用したものか。全体の色調は、灰(N4/)を呈する。	B3・B4 グリッド SX1 No.2143-17

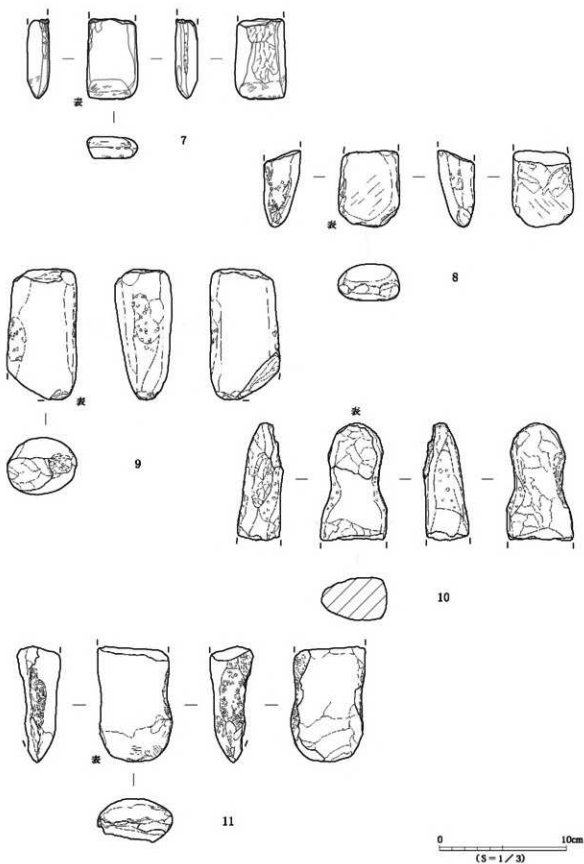
※ チャートの色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版 標準土色帖』(2010年版)に準拠した。



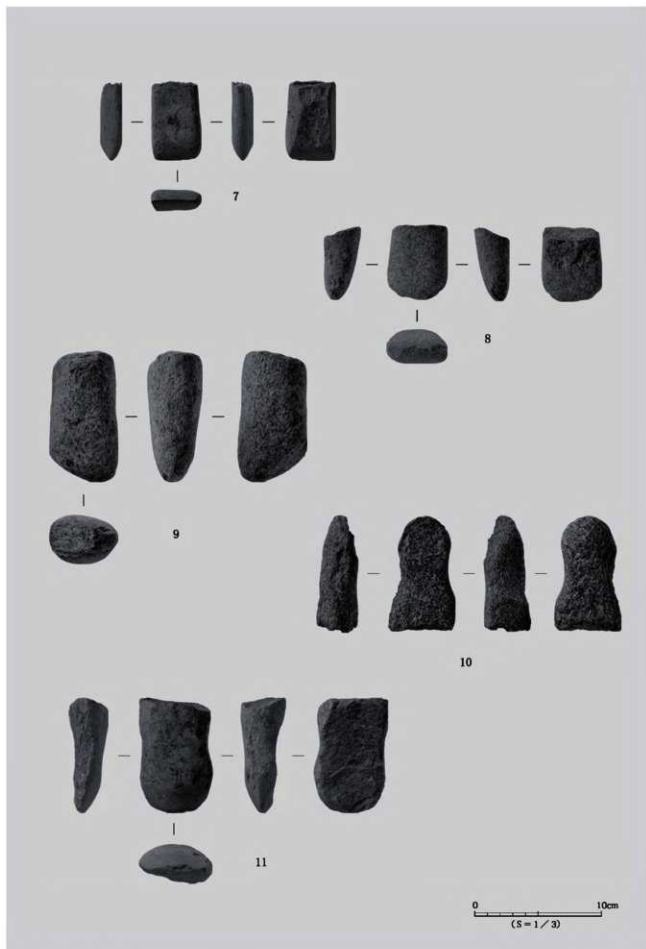
第69圖(圖版40) 石斧



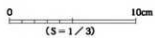
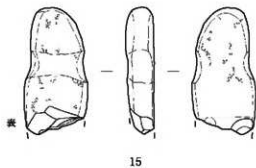
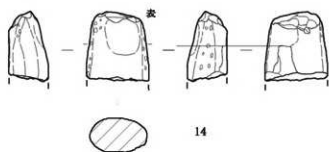
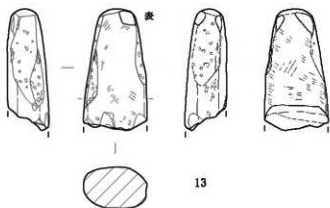
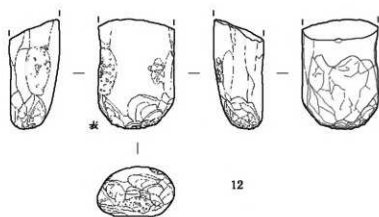
图版 40 石斧



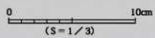
第70圖(圖版41) 石斧(7・8)
 蔽石・磨石類(9~11)



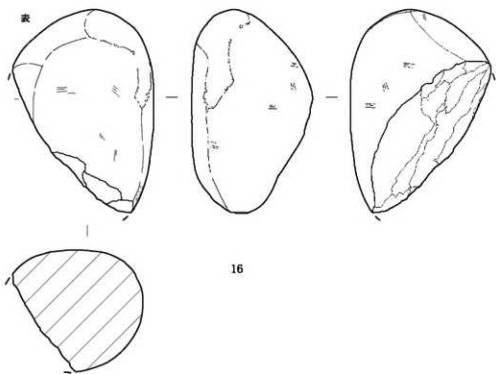
図版41 石斧 (7・8)
 敲石・磨石類 (9~11)



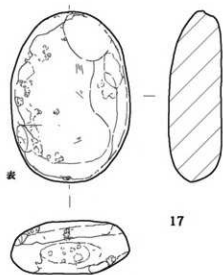
第71圖(圖版42) 敲石・磨石類 (12)
石斧 (13~15)



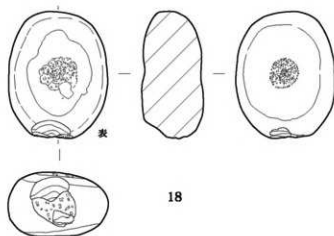
图版42 敲石・磨石類 (12)
石斧 (13~15)



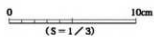
16



17



18



第72圖(圖版43) 蔽石・磨石類



16



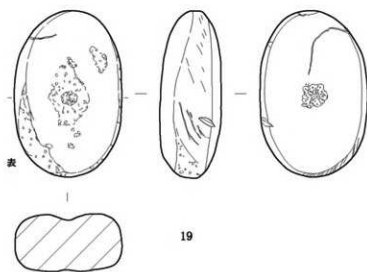
17



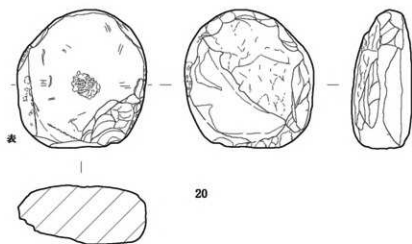
18

0 10cm
(S = 1/3)

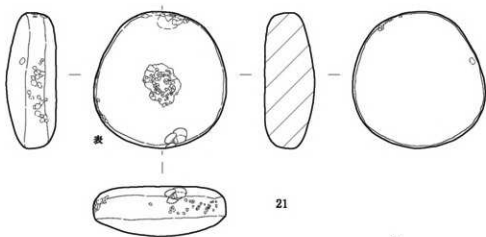
图版43 敲石・磨石類



19



20



21

0 ————— 10cm
(5=1/3)

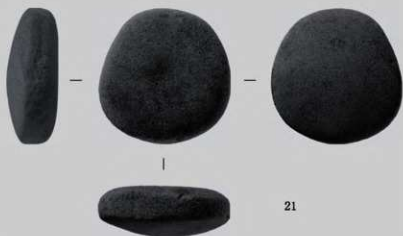
第73圖(圖版44) 敲石・磨石類



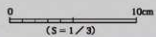
19



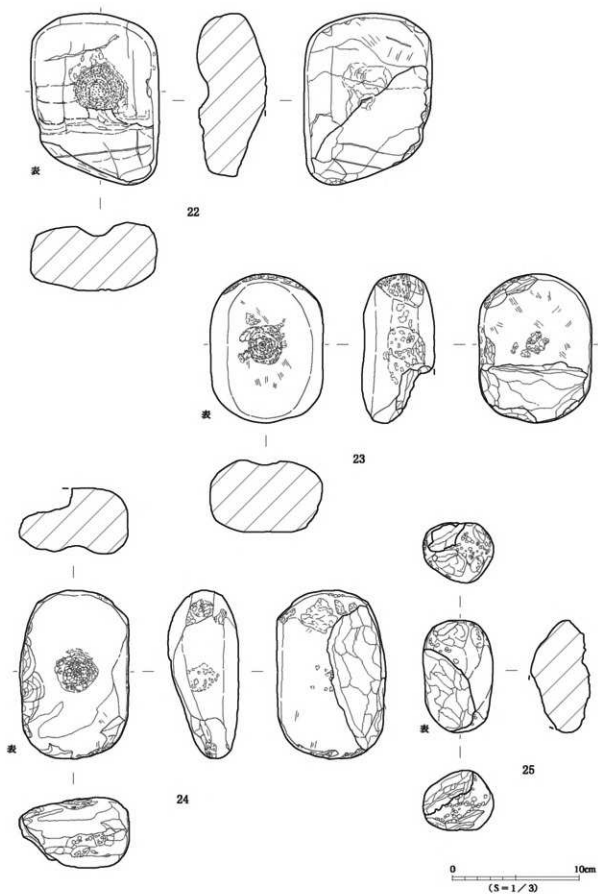
20



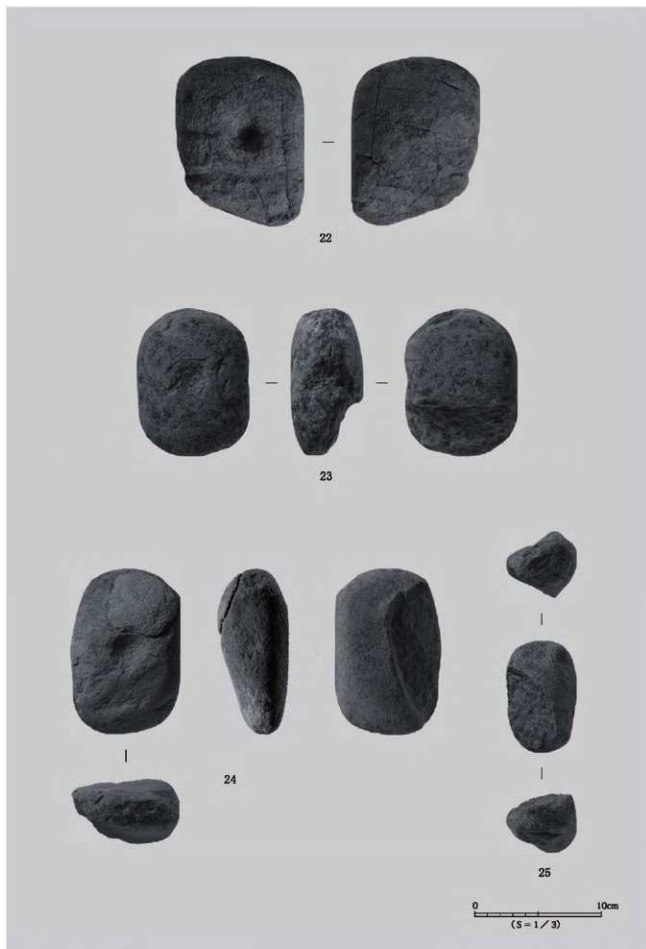
21



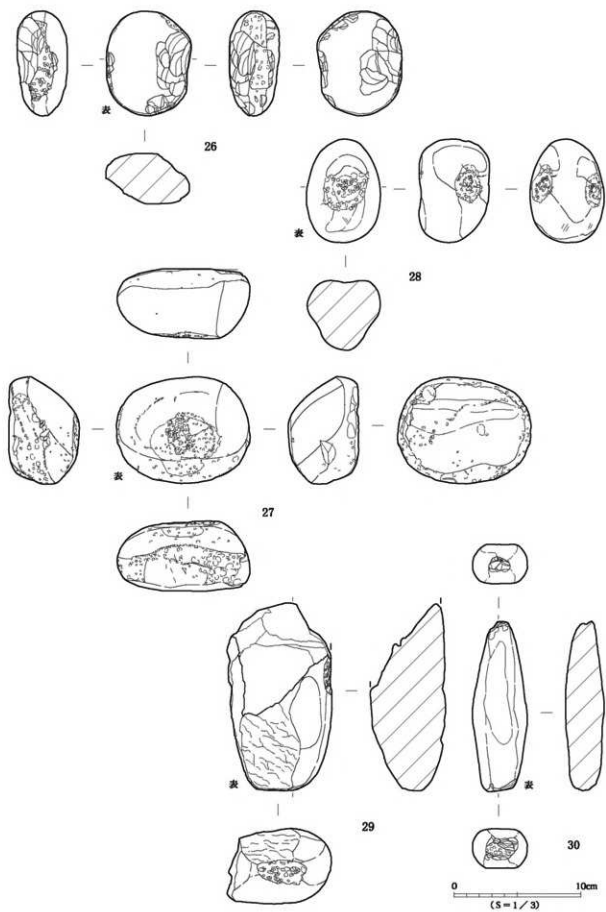
图版44 敲石・磨石類



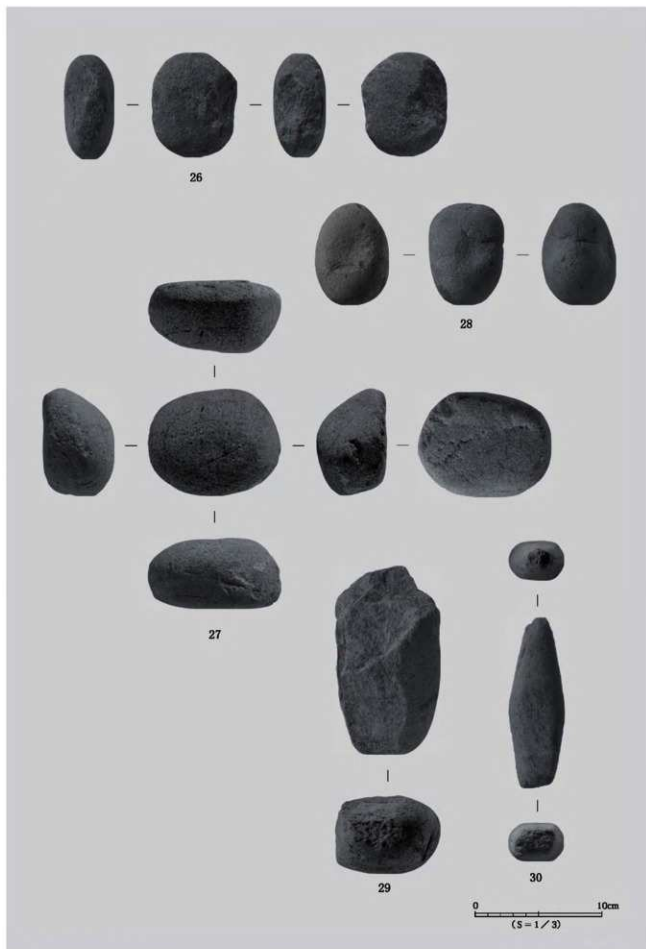
第74圖 (圖版 45) 敲石・磨石類



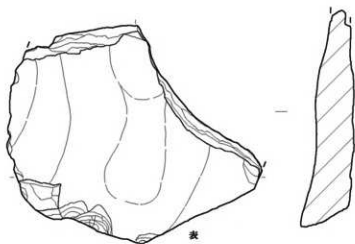
图版45 敲石・磨石類



第75圖(圖版46) 磨石・磨石類

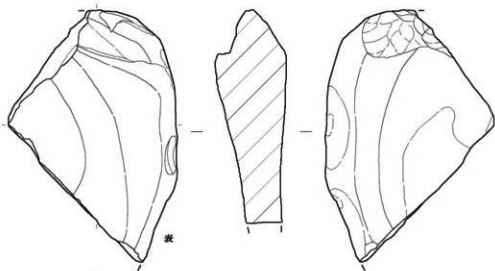


図版 46 敲石・磨石類



表

31



表

32



0 10cm
(S-1/3)

第76圖(圖版47) 石皿



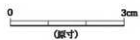
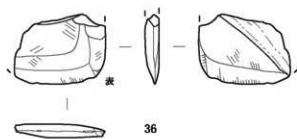
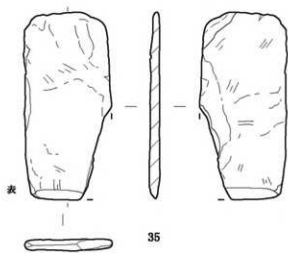
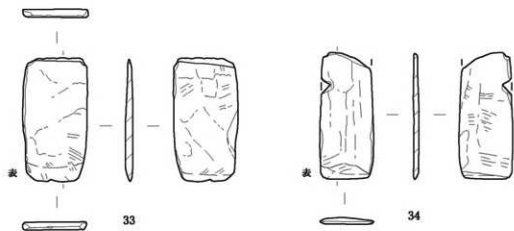
31



32

0 10cm
(S = 1/3)

图版47 石皿



第77圖(圖版48) 熱田原型石器



33

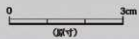
34



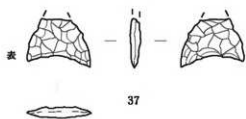
35



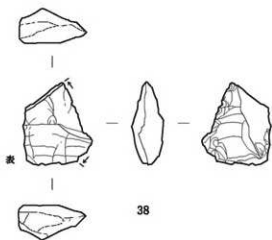
36



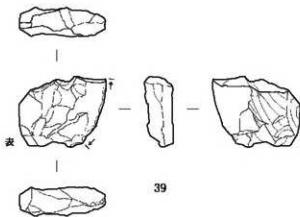
图版48 熱田原型石器



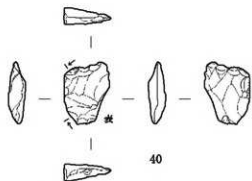
37



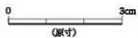
38



39



40



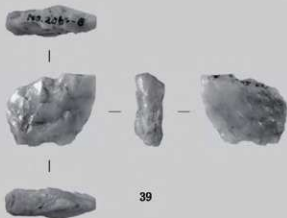
第78圖(圖版49) 石鏃 (37)
剥片 (38~40)



37



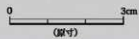
38



39



40



図版49 石鏃 (37)
剥片 (38~40)

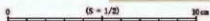
3 骨製品

SX1の底面近くよりジュゴンの肋骨製品が出土した。用途は不明であるが、人による加工痕が明瞭に残っている。特に切り離し部分には切り落とす際についたと考えられる擦痕が顕著である。また、付近から上下端に火を受けた痕と穴を穿ったような痕跡の見られるジュゴンの肋骨が出土したので合わせて報告する。

骨製品は、最大長：15.6cm、最大幅：2.4cm、最大厚：0.1cm、重さ：56gを測る。



第79図 骨製品



図版50 骨製品



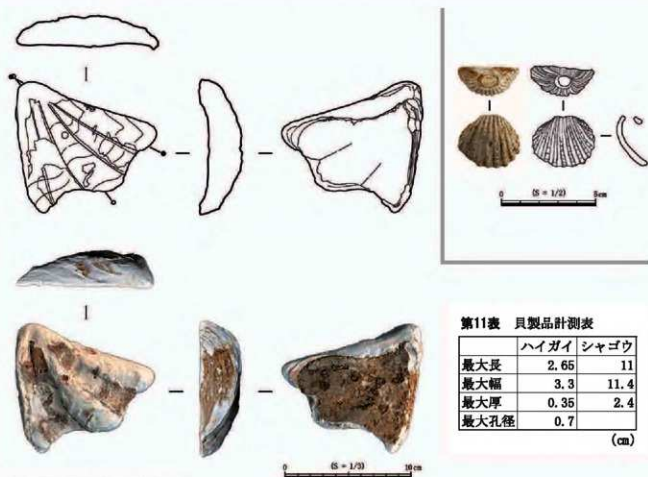
第80図 骨製品出土箇所



図版51 加工痕?の見える軟骨

4 貝製品

ハイガイ製の有孔貝製品とシャゴウ製の皿状貝製品が出土した。どちらも用途は判然としないが、遺跡内に意図的に持ち込まれていることから製品として扱った。ハイガイ製の有孔貝製品はV層下部～VI層（近代）出土で、詳細は不明である。シャゴウ製の皿状貝製品はSX1で出土しており、サイズは小さいが、全体を扁平に加工した様子がうかがえた。



第81図・図版52 貝製品

第11表 貝製品計測表

	ハイガイ	シャゴウ
最大長	2.65	11
最大幅	3.3	11.4
最大厚	0.35	2.4
最大孔径	0.7	

(cm)

5 その他（中国産・本土産・沖縄産・近代）

当遺跡からは近代以降の遺物として、陶磁器、金属・ガラス製品等が多数出土した。V層からの出土数が一番多く全体の65%を占めていた。遺物の内訳としては中国産9%、本土産16%、沖縄産72%現代遺物3%と沖縄産が圧倒的に多い。いずれも破片が多く分類は難しかったが、中国産磁器の中では青花が多く65%を占め、次に多いのが青磁で21%を占めていた。本土産磁器は20%が型絵染付けで、そのほとんどが砥部産であった。当遺跡の西側に位置する鏡水土砂場原A遺跡や北側に位置する垣花村跡でも本土産磁器は砥部産を中心としていた。

明確な遺構や遺物包含層は検出されていないが、第三章でも述べたように現地が小椋間切、小椋村を経て那覇市の字となることと、沖縄気象台が設置されていた事は確かであるので、これらの遺物は小椋村～沖縄気象台にかけての生活に関わる物と推測される。

第12表 器種別出土遺物一覧

出土遺物	器種別																											
	碗	小碗	皿	鉢	小鉢	水鉢	壺	壺	壺	火入	瓶	茶碗	杯	小杯	徳利	酒注	急須	提鉢	鍋	香炉	火炉	壺	灯明具	穴あき金具	円蓋状製品	磚子		
層位	不明	不明	産	産	産	瓦	口	産	産	不明	産	口	産	口	産	産	不明	不明	不明	口	口	産	産	産	産	産	産	
I～II層	11	1	1	1							1	1	1					1	1							1		
I～III層	2		3																									
IIIa層																												
IIIb層	1	1		2		1	1												1		3				1			
IIIc層	3	2				2				1										1								
IIId層	31	2	4		1	1												1	1	3					1	1		
III・IV層																												
V層	132	17	9	15	1	1	5			1	1							1	11	23	13	1	2	1	1	11	1	
V・VI層	65	4	2	7			10			1								1	8	6	6	1		2	1	1		
VI層	34	3	2	3		1	1	1				1		1				4	2	4	1	1						
VI・VII層	5	1				1	1													1								
攪乱	20	1	7	3		1	2						1					2	1	3	1	1		5	2	1		
計	304	32	28	31	1	4	22	1	3	2	3	1	1	1	1	1	1	2	27	33	33	2	5	5	3	5	17	3
%	41	3	3				3											3	4	4						2		

出土遺物	器種別																											
	角釘	瓦当軒瓦	平瓦	ガラス小瓶	ガラス瓶	ガラス片	缶	罎	金匱片	セメント	瑪?	タイル	磁塊	鉄製品	鉄片	陶管	銅片	ハブシ	プラスチック	フタ製品	フタ片	丸瓦	丸釘	厨子連(糸)	墨英	有段式平瓦	煉瓦	
層位																								網				
I～II層	1		32			2																		1				1
I～III層				1																								
IIIa層				3		1																						
IIIb層						1									1										3			
IIIc層						1																						
IIId層						3		1		1																		
III・IV層						1		4		3																		
V層	1		51	1	1	10	1	1		1		1	1	1	1				1	1	3	6	1		1		2	
V・VI層						1		1																				
VI層				12		2		1				1		1								1						
VI・VII層																												
攪乱		1	44			13				1	1		6		1	2	1			2	1	1	1	1	1	1	1	
計	2	1	148	1	1	36	1	1	6	1	1	1	7	1	3	3	2	1	2	2	2	7	13	1	1	1	4	819
%			18			4																						

出土遺物 層位	沖縄産無釉陶器																		計						
	鍋		德利	鉢	撥鉢		水鉢		壺		小壺		壺	香炉	火炉	器種不明									
	口	把手	蓋	胴	口	胴	口	胴	底	口	胴	底	耳	口	胴	底	口	不明							
I～II層													1					6	7						
I～III層																		1	1						
IIIa層																		2	2						
IIIb層					1				1			1					1	2	6						
IIIc層												2						1	3						
IIId層								1										9	10						
III～IV層																		1	1						
V層	1	2	1		3	2	1	22		1				1	1		1	2	98	1	32	169			
V～VI層					3	1	1	5				3	1				1		28			43			
VI層				1	1				1		1					1			10			15			
VI～VII層												1							1			2			
VII層																									
VII～VIII層																									
VIII層																									
攪乱							2		1			1					2				24	30			
計	1	2	1	1	8	5	2	29	1	2	1	1	7	1	1	2	2	1	1	1	3	183	1	32	289

出土遺物 層位	陶質土器														蔵骨器				瓦		円盤状製品	管	角 釘?	計									
	皿		鍋		急須		撥鉢	水鉢	鉢	火炉	灯明皿	壺	器種不明		身		丸瓦	平瓦	瓦当軒瓦	有段式					不明								
	口	胴	把手	蓋	胴	底	注口	蓋	胴	口	口	口	口	口	胴	底	不明	不明	不明	不明					不明	不明							
I～II層														1						32		1	1	1	36								
I～III層	1													1						1					3								
IIIa層																			3		4				7								
IIIb層														3							9	1			13								
IIIc層														1						1					3								
IIId層	1							1				1	1	13			2		3	3	11	1	1		38								
III～IV層																			1		3				4								
V層	3	1	2	2	1	2	2	1		1	1			5	91	7	4		3	51	20	11	1		209								
V～VI層			1									2									10				40								
VI層	1			1	1			1			1			5	1	1		1	1	12		1	1		28								
VI～VII層																									9								
VII層																																	
VII～VIII層																																	
VIII層																																	
攪乱			2		1									7	1	8		1	1	44	1	1	8	2	1	79							
計	1	7	2	3	3	2	2	2	1	1	1	1	2	1	2	1	6	157	9	13	3	2	1	7	148	1	1	68	17	1	2	1	469

出土遺物 層位	現代遺物														不明	計	総合計									
	ガラス瓶	ガラス小瓶	ガラス片	丸製品	鉄製品	金製品	鉄片	銅片	鉄塊	プラ製品	プラ片	煉瓦	磚子	缶				ハブラシ	セメント	タイル	陶管	穴あき金具	薬美			
I～II層			2	1									1												4	81
I～III層																									1	15
IIIa層			1																						1	11
IIIb層			1	3			1																		5	29
IIIc層			1																						1	14
IIId層			1	1				1					1												4	106
III～IV層			4				3																		7	12
V層	1	1	10	6	1	1	1	1				1	2	1	1	1	1		1				1	29	861	
V～VI層			1	1			1																		3	207
VI層			2				1			1								1							5	130
VI～VII層																									0	22
VII層																									0	1
VII～VIII層																										
VIII層																										
攪乱			13	1			1	1	6	2	1	1	1			1		2	5					35	215	
計	1	1	36	13	1	6	3	2	7	2	2	4	3	1	1	1	1	3	5	1	1	1	1	95	1704	

第14表 中国産白磁観察一覧

博覧番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第82図 1 図版53の1	小碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。 黒色粒・赤褐色 粒を多少含む。	内外面に施 釉。口唇部 内面を釉刺 ぎ。	乳白色。	なし。	外反する口縁で、口唇部 は舌状に成形される。型 成形。	西側 (A B 1234) V・VI層

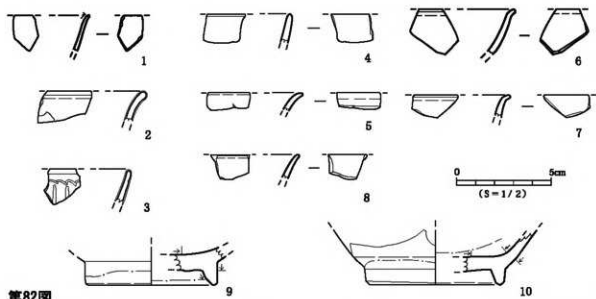
第15表 中国産青磁観察一覧

博覧番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 台径 (mm)	素地	施釉	釉調	貫入	備考	出土地点
第82図 2 図版53の2	碗 口縁部	(10.6) — —	灰白色で粗粒子。 黒色粒・赤褐色 粒を多く含む。	内外面に施 釉。	オリーブ 灰色	内外面に、 粗い貫入 あり。	外反碗で無文である。	B5 VI層最下部 ～VII層上部
第82図 3 図版53の3	碗 口縁部	— — —	乳白色で微粒子。 赤褐色粒を多量 に含む。	内外面に施 釉。	明オリー ブ灰色	内外面に、 粗い貫入 あり。	直口碗で外面に蓮弁文を 施す。蓮弁の剣先が簡略 化され、幅0.6～0.7cm程 の蓮弁を描く。	B3～7 攪乱⑤ V・VI層

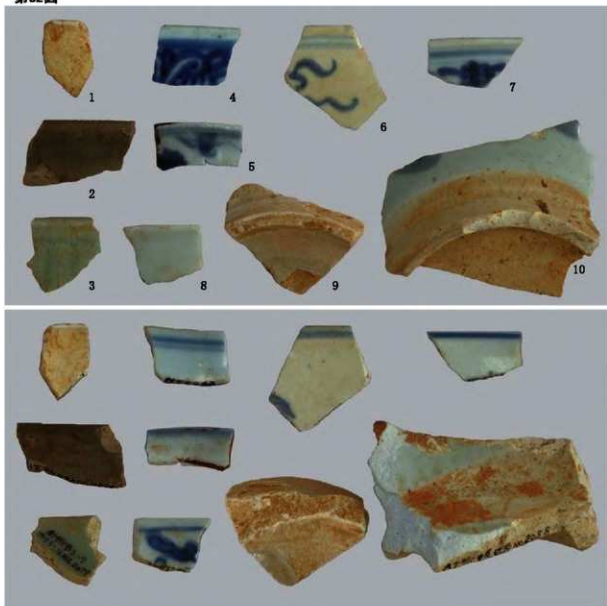
() 内は推定

第16表 中国産青花観察一覧

博覧番号 図版番号	器種 部位	口径 器高 台径 (mm)	素地	施釉	貫入	器形・文様	備考	出土地点
第82図 4 図版53の4	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。 黒色粒が散見さ れる。	内外面に施 釉。呉須の 発色はよい。	なし。	直口口縁である。外面 口唇部に波濤文が施さ れる。	—	西側 (AB123) V・VI層
第82図 5 図版53の5	碗 口縁部	— — —	白色で微粒子。	内外面に施 釉。	なし。	外反口縁である。外面 口縁部に2条の圓線が廻 らせ、下部には唐草文 様が施される。内面口 縁部には1条の太い圓線 が施される。	16世紀代	攪乱④以北 (A1234) III d 層
第82図 6 図版53の6	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。	内外面に施 釉。	あり。	外に開く口縁である。内 面に1条、外面に2条の 圓線を施し、下部には 文様が施される。	16世紀代	西側 (B1) V層
第82図 7 図版53の7	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。	内外面に施 釉。	なし。	外に開く口縁である。内 外面に1条の圓線を施し、 下部には文様が施される。	16世紀代	西側 (AB123) V層
第82図 8 図版53の8	碗 口縁部	— — —	灰白色で微粒子。 黒色粒が散見さ れる。	内外面に施 釉。	なし。	端反り口縁である。内面 口唇部に一本の圓線を 廻らせ、胴部に文様が 施される。	—	中央 (AB456) VI層
第82図 9 図版53の9	碗 底部	— — 70	黄白色で粗粒子。	内外面に施 釉。登付露 胎。見込み 部分は、蛇 目輪刺。	なし。	高台の内側は面取りがな される。粗製の碗。	—	西側 (AB123) V・VI層
第82図 10 図版53の10	碗 底部	— — 70	灰白色で微粒子。	内面は見込 み部分が蛇 目輪刺ぎ。 外面は高台 脇まで施釉。	なし。	高台は、面取りがなされる。	—	VI層



第82圖



圖版 53 中國產磁器

第17表 本土産磁器観察一覧

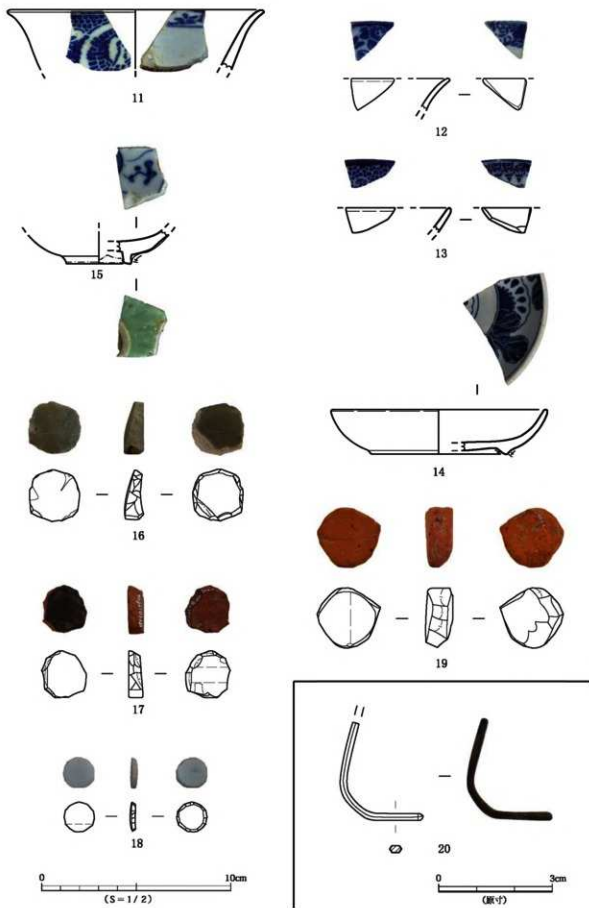
博覧 図版 番号	種別	形状	部位	口徑 器高 底徑	素地の色調 ／ 釉の発色	施釉・釉色・技法	文様等の特徴		推定 産地	推定 年代	出土地点
							外面	内 面			
第83図 11 図版54 の11	碗	外反	口 ～ 胴部	13.6 - -	薄灰色微粒子 ／ 鮮明	機械ロクロ成形、コバルトでの型絵染付後、透明釉をかける。	鶴丸文	口縁部に一糸の圓線を引き、口唇部との間に梅花	砥部	大正 ～ 昭和	VI層 中央
第83図 12 図版54 の12	碗	外反	口縁部	- - -	薄灰色微粒子 ／ 青みがかかる	機械ロクロ成形、コバルトでの型絵染付後、透明釉をかける。	草花文	口縁部に一糸の圓線を引き、口唇部との間に草花	砥部	大正 ～ 昭和	西側 V層
第83図 13 図版54 の13	碗	直口	口縁部	- - -	薄灰色微粒子 ／ やや青みがか かる	機械ロクロ成形、コバルトでの型絵染付後、透明釉をかける。	梅花文	環珞文	砥部	大正 ～ 昭和	B1 V層
第83図 14 図版54 の14	皿	直口	口～底 部	11.5 2.2 7.2	灰色微粒子/ やや黄味がか る	型抜き 刷取刷り	芙蓉文	無し	瀬戸 美濃	大正	A2Ⅲc ～ V層直上
第83図 15 図版54 の15	皿	不明	底部	- - 3.4	白色微粒子/ 鮮明	型抜き クロム青磁染付	型で花 をイメ ージ?	仙芝祝寿文	瀬戸 美濃	大正	B1V層

第18表 円盤状製品観察一覧

博覧番号 図版番号	種類	器種	部位	残存 状況	計 測 値 (mm・g)				備 考	出土地点
					最大径	最小径	最大厚	現存重量		
第83図16 図版54の16	中国産青磁	碗	腰部	完	27	26	10	8	細かく打割しているが、内側からの打割が多いようである。形状はやや楕円形を呈する。	西側 V層
第83図17 図版54の17	沖縄産無釉陶器	壺	胴部	完	25	22	7	6	内側からと外側からの打割が半分ずつ行われているため、平行四辺形状を呈する。	B1 V層
第83図18 図版54の18	本土産近代磁器	小碗	胴部	完	16	16	3	0.97	小型の製品であるが、内外面ともに整っている。内側から細かく打割している。	西側 V・VI b層
第83図19 図版54の19	明朝系の赤瓦	不明	胴部	完	32	30	13	14.07	粗く打割している。内側からの打割が多いようである。	B1 V層

第19表 管観察一覧

博覧番号 図版番号	残存状況	備考	出土地点
第83図20 図版54の20	竿部	切断面は研磨されている。 残存部は3.9 cm を測る。3.5×2mm の六角形。 均等に曲げられているので、何かの代用品かもしれない。	西側 (AB 1234) Ⅲd層 (V層直上)



第 83 图 (图版 54) 本土産磁器・円盤状製品・管

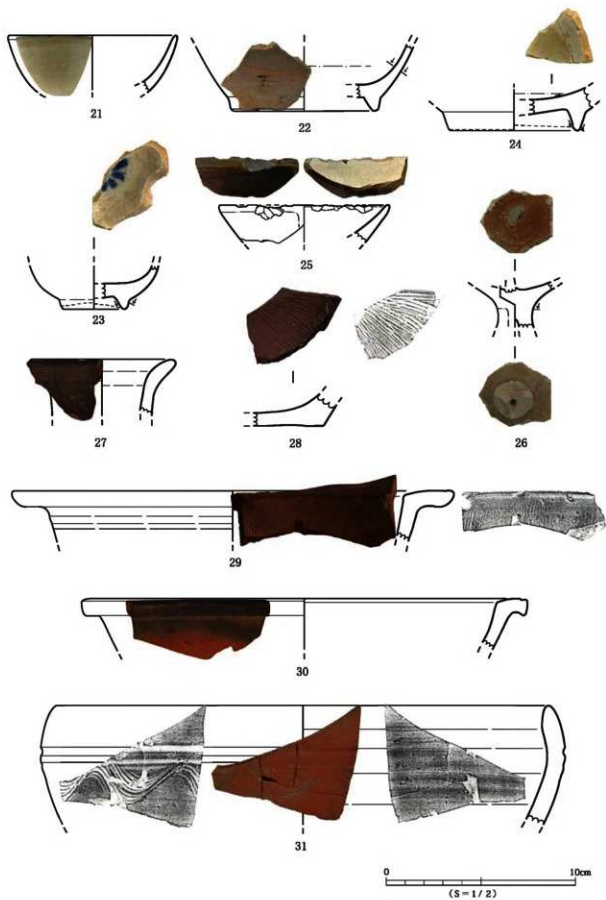
第20表 沖縄産陶器観察一覧

標図番号	器種 部位	口徑 器高 底徑	胎土	釉の状態		施釉範囲	備考	出土地点
				外面	内面			
第84図21 図版55の21	小碗	9.4 — —	黄褐色/微粒子	鉛釉	透明釉	—	—	B1 V層
第84図22 図版55の22	碗	— — 3.2	黄褐色/微粒子	灰釉	灰釉	腰部および見込み 手前	—	中央 (AB456) VI層
第84図23 図版55の23	小碗	— — 3.2	黄褐色/粗粒子	白化粧 + 透明釉	白化粧 + 透明釉	畳み付けのみ掻き 落とし	見込みにコバルトで 菊花文を描く	B1 V層
第84図24 図版55の24	碗	— — 7.0	黄褐色/微粒子	白化粧 + 透明釉	白化粧 + 透明釉	畳み付けのみ掻き 落とし	蛇の目軸測ぎ	B1 V層
第84図25 図版55の25	不明	9.4 — —	黄褐色/微粒子焼成 により還元がすすむ	鉛釉	白化粧 + 透明釉	—	口縁周辺の欠けは人 為的(煙草の灰落とし等) か?	B1 V層
第84図26 図版55の26	灯明具	— — —	灰白色/微粒子	灰釉	無	—	—	B1 V層
第84図27 図版55の27	小壺	7.8 — —	赤色/微粒子	自然釉	自然釉	—	—	B1 V層
第84図28 図版55の28	摺鉢	— — 8.8	赤褐色/微粒子	自然釉	自然釉	—	喜名焼き?もしくは湯 田焼?	A1 VIb層
第84図29 図版55の29	摺鉢	23.4 — —	赤褐色/微粒子	自然釉	自然釉	—	縹目は不規則	A2 V層
第84図30 図版55の30	鉢	23.6 — —	赤色/微粒子	自然釉	自然釉	—	良く焼き締められてい る	西側 (A123) VI層
第84図31 図版55の31	水鉢	26.1 — —	赤色/微粒子	自然釉	自然釉	—	—	B8 V層

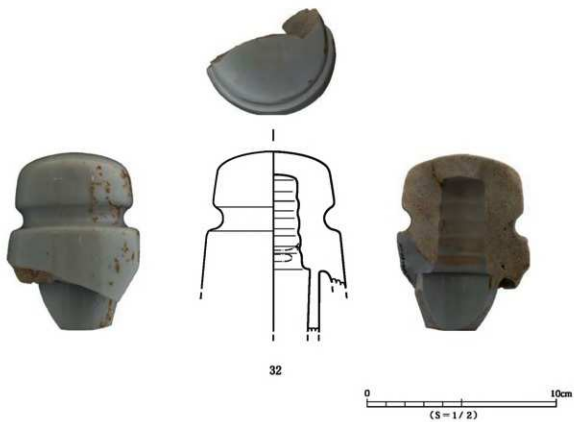
第21表 碁子観察一覧

標図番号 図版番号	器種	外径 内径	素地の色調/釉の発色	施釉・釉色・技法	施釉範囲	備考	出土地点
第85図32 図版56の32	碁子	5.8 2.4	青灰色・微粒子・青 みがかる	型抜き後、つけ掛け。	外面	素地に気泡が見られ る	北西側 (A12) V層

※碁子：電線とその支持物との間を絶縁するために用いる器具。一般には電柱・鉄塔などに装着される電力用または電信用のものを指す。



第84图(图版55) 冲縄産陶器



第85图 (图版 56) 铜子

6 自然遺物

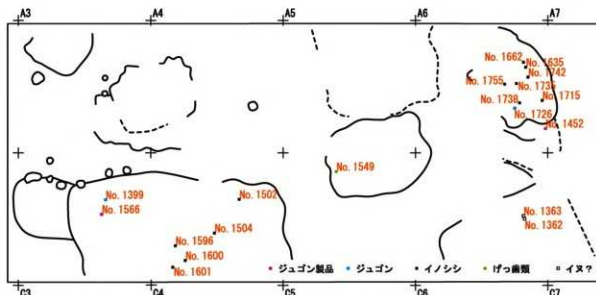
○獣・魚骨

第22表に示したとおり、いわゆる縄文時代後期の層から出土したのはイノシシ・ジュゴン・イヌ?・げっ歯類である。第86図にその出土位置を示した。種ごとにやままとまりを示しているようであった。全体に脊椎動物遺体は少なく、特に魚骨は確認できなかった。

VI層より上ではイノシシ(ブタ)・ネコ・ニワトリ・魚骨・サメ等が確認できた。

第22表 獣・魚骨出土一覧

名称	成/幼	地区	遺構	層序	部位	左右	箇所	遺物No							
イノシシ	-	A6	SD2	-	不明	-	不明焼骨	2136							
								A7	-	Ⅴ層上部	左	焼骨	2182		
								A6	SK3	-	上腕骨	右	～遠位端	1635	
												下顎	-	切歯	1662
												不明	-	-	1715
												不明	-	-	1735
	肩甲骨	右	関節窩	1738											
	不明	-	不明焼骨	2205											
	成獣(若)	B4	SX1-SD2	-	-	-20～-40cm	不明	-	1502						
						～-20cm	尺骨	左	近位端～	1504					
						最下位	不明	-	-	1596					
						SX1-SD2	上部	下顎	右	第3大臼歯	1600				
1601															
ジュゴン						-	A6	-	-	SD1	下位	肋骨?	1452		
	SK3	肋骨?	-	-	1726										
	B3	SX1	-20～-40cm	肋骨	-					1399					
イヌ?	未成獣?	B6	S15	-	下位	不明	-	下顎	1362						
	-							尺骨	右	焼骨	1363				
	未成獣?							尺骨	右	焼骨	2148				
げっ歯類	-	B5	S12	-	最下位	肋骨	-	1549							
イノシシ(ブタ)	成獣(若)	A1	-	-	VI層	脛骨片	-	-							
	-	B1	-	-	V層	不明	-	-							
	幼獣	西側	-	-	V層	上腕骨	-	-							
	大腸骨					-	近位端?								
ネコ	-	A3	-	-	VI層	-	-	大腸骨	右	～遠位端	-				
								左	近位端のみ	-					
								脛骨	右	近位端～	-				
								左	近位端のみ	-					
								踵骨	-	-	-				
								上腕骨	左右	骨幹のみ	-				
ニワトリ	-	B4	-	-	VI層	中足骨?	右	-							
魚骨	-	西側	B1	-	-	V・VI層	椎骨	-	-						
						V層	口	-	-						
						VI層	不明	-	-						
魚骨?	-	B1	-	-	V層	不明	-	-							
サメ	-	西側	-	-	VI層	椎骨	-	-							



第86図 遺構内出土獣骨分布図

○貝類

第23表に示したとおり、巻貝9科・二枚貝7科の16科が得られた。全体的に量は少なく、近代以降の層でしか確認できなかった。ほとんどが容易に採集できそうなものである。なお、V層出土のハイガイは混入物と考えられるので、同様にV層出土のリウキュウヒバリガイ・シャコガイ・フキアゲアサリが混入物である可能性も否めない。

第23表 貝類出土一覧

名称	科	地区	層序	網	部位	左右	数量	生息地	写真番号
カンギク	リュウテン	B8	V層	腹足	完形		1	浅い岩礁	1
サザエ(蓋)		西側	I~III層		完形		2	岩礁	2
		B1	V層		完形		1		
チョウセンサザエ(蓋)		西側	V・VI層		完形		1	岩礁、サンゴ礁の2~20mの海底	3
	B8	V層	完形			2			
ヤコウガイ(蓋)		B1	V層		破片		1	サンゴ礁の深い穴	4
センニンガイ	ウミナ	西側	V層		殻口以外		1	淡水の混じる河口の泥地	5
オオシマカニモリ	オノツノガイ	西側	V層下部~VI層		完形		1	岩礁	6
カヤノミカニモリ		西側	V層下部~VI層		完形		1	浅い岩礁のくぼみ	7
クワノミカニモリ		西側	V層下部~VI層		完形		1		8
		コオノツノガイ	西側		V層下部~VI層	完形		1	岩礁
コグツノブエガイ			表採		完形		1	潮間帯の砂泥地	10
マガキガイ	ソデガイ	A・B3・4	カクラン5		殻口以外		1	砂地の海底	11
ラクダガイ		南西側	V層直上		殻口以外		1		
ハナビラダカラ	タカラガイ	A・B6	カクラン2		トゲ状突起		1	やや深い海底	12
		B1	V層		完形		1	サンゴ礁	13
	西側	V層下部~VI層	完形			1			
シラクモガイ	アッキガイ	西側	V・VI層		完形		1	浅い岩礁	14
コオニコブシガイ	オニコブシ	B8	V層	完形		1	15		
サヤガタイモガイ	イモガイ	西側	V層下部~VI層	完形		1	岩礁	16	
ロウソクガイ		B8	V層	完形		1	浅い砂地	17	
ベニタケ	タケノコガイ	A・B3・4	カクラン5	殻口以外		1		18	
ハイガイ	フネガイ	A・B1~4	カクラン4	完形	左	1	内湾の浅い泥地	19	
		B1	V層	腹縁	不明	1			
		B8	V層	腹縁以外	左	1			
		西側	V層下部~VI層	完形	右	2			
リュウキュウヒバリガイ	イガイ	西側	V層下部~VI層	腹縁以外	左	1	浅い岩礁	20	
		B1	V層	腹縁	不明	1			
ウラクツキガイ	ツキガイ	西側	カクラン	完形	右	1	潮間帯下部-20m深の砂底	21	
		B7	カクラン6	完形	左右	2			
		B1	VI層	完形	左	1			
		西側	V層下部~VI層	完形	左	1			
		B6	VI層最下部	完形	左	1			
		A・B5・6	カクラン14	完形	左	1			
シャコガイ	シャコガイ	B1	V層	破片	不明	3	サンゴ礁	-	
カワラガイ	ザルガイ	西側	カクラン	完形	右	1	浅い砂地	22	
		A・B7	カクラン7	完形	左	1			
アラスジケマンガイ	マルスダレガイ	B1	VI層	完形	左	1	潮間帯白砂地	23	
フキアゲアサリ		B1	V層	完形	左	1			
リュウキュウナミノコ	ナミノコガイ	西側	V層下部~VI層	完形	左	1	粗い砂の波打際	25	



圖版57 貝類

第Ⅷ章 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鏡水名座原A遺跡は、沖縄本島南部に散在する狭小な石灰岩台地上に位置する。この石灰岩台地は、琉球層群那覇層を構成する石灰岩であり、その堆積年代は、約30万～70万年前の中期更新世とされている(氏家・兼子, 2006)。また同文献によれば、那覇層の石灰岩は、砕屑性石灰岩とサンゴ石灰岩との2種類が記載されているが、鏡水名座原A遺跡の位置する石灰岩は砕屑性石灰岩に分類されている。

平成20年度に行われた発掘調査では、縄文時代後期に推定される竪穴住居跡・土坑等の他、大型方形遺構(SX1)や住居跡内の炉跡・屋外炉などが検出された。

本報告では、大型方形遺構(SX1)を対象として、出土土器の付着物の放射性炭素年代測定を実施し、その覆土に含まれる花粉化石および微細な種実遺体や炭化物片などの産状を明らかにして、同時に、覆土の土壌としての理化学性を調べることにより、遺構の性格に関わる情報の検出を試みる。さらに、SI2遺構内の炭集中箇所については、微細な種実遺体や炭化物片などの産状を調べることにより、その性格について検討する。

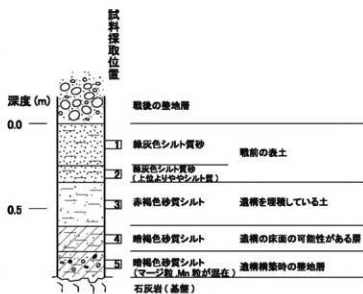
1. 試料

(1) SX1遺構

SX1遺構の検出された地点では、戦後の整地層の下位に厚さ約1mの堆積層が確認されている。戦後整地層の直下は、厚さ約35cmの緑灰色を呈するシルト質細砂層であり、その下部約10cmほどは上部に比べてシルト分がやや多い。このシルト質細砂層は、戦前の表土を構成していたと考えられている。その下位は、厚さ約25cmの赤褐色を呈する砂質シルト層であり、さらに下位は厚さ約30cmの暗褐色を呈する砂質シルト層となっている。赤褐色砂質シルト層は、SX1遺構を埋積している土であるとされ、その下位の暗褐色を呈する砂質シルトの層位は、上半部は遺構の床面、下半部は遺構構築時の整地層であるとされている。遺構の床面とされている層位は、異質な粗粒砕屑物などはなく、均質な層相を呈している。また、整地層とされている層位には、褐色土粒(いわゆるマーヅ粒)や黒色土粒(おそらくマンガング粒など)が混在している。

放射性炭素年代測定には、暗褐色砂質シルト層上半部より出土した土器片2点からそれぞれ採取した煤状の炭化物計2点を試料とする。ここでは便宜上、土器付着物1、土器付着物2という試料名を付す。なお、発掘調査所見によれば、試料の採取された土器は、いずれも縄文時代後期頃の年代が推定されている。

花粉分析、微細物分析および土壌理化学



第87図 SX1遺構覆土断面柱状図

分析の試料は、緑灰色シルト質細砂層の上部と下部、赤褐色砂質シルト層、暗褐色砂質シルト層の上部と下部の各層位からそれぞれ1点ずつ、合計5点を採取した。試料には、上位より順に試料番号1~5を付した。試料採取断面を柱状図にして第87図に示す。

本分析では、花粉分析の対象として、試料番号2から試料番号4までの3点を選択し、微細物分析には試料番号4を選択、土壌理化学分析には試料番号1~4までの4点を選択した。

(2)炭集中箇所

炭集中箇所は、SI2遺構より検出されている。検出された層位は、SX1遺構床面とされる層位とほぼ同様であり、同時期の遺構と考えられている。試料は遺構を構成する炭化物とその周囲の土壌を一括して採取した。本分析では、「KN SI2 炭化材サンプル」という試料名の付された試料を微細物分析の対象とする。

2. 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対

的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

(2)花粉分析

試料10ccを正確に秤取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭(微細な炭化植物片)の含量も求める。微粒炭は20 μ m以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表として示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

(3)微細物分析

SX1遺構の試料番号4は、試料1001.47gを常温乾燥後、水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20-30回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。炭集中遺構の試料は、200cc(388.49g)を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材を抽出する。現生標本との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。ヤンバルアカメガシワの種子(後述)の破片は、径2mm以上の個数を数え、径1-2mmは容量を表示する。炭化材は、70℃48時間乾燥後の重量(g)と最大角(mm)を表示する。

分析後は、種類毎に容器に入れて保管する。種実は、70%程度のエタノール溶液で液浸保存する。

(4)土壌理化学分析

pH(H₂O)はガラス電極法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、有機炭素はチューリン法、全窒素量は硫酸分解-水蒸気蒸留法(土壌標準分析・測定法委員会,1986、土壌環境分析法編集委員会,1997)、腐植形態はMI(Melanic index)による腐植簡易分析法(本名・山本,1992)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1)試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2)pH(H₂O)

風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

3) 全リン酸量(T-P₂O₅)

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅mg/g)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全リン酸量(P₂O₅mg/g)を求める。

4) 有機炭素(Org-C)

粉砕土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤とり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

5) 全窒素(T-N)

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(%)を求める。さらに、有機炭素量を全窒素量で除し、炭素率(C/N)を算出する。

6) MI(Melanin Index)による腐植簡易分析

風乾細土試料約1.0gを50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5%NaOH溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうした後、0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15minの遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約1mlを試験管にとり、0.1%NaOH溶液20mlを分注器で加え(NaOHの濃度は約0.1%となる)、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する(450nmの吸光度が1を越えた試料は、さらに0.1%NaOH溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、3時間以内に行い、結果の表示をMI(=K₄₅₀/K₅₂₀)で示す。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第24表に示す。土器付着物1は3,200±40BPであり、土器付着物2は3,320±30BPを示す。各試料の較正暦年代を第25表に示す。測定誤差をσの年代でみると、土器付着物1はcalBC1,499~calBC1,438、土器付着物2はcalBC1,634~calBC1,531となる。

第24表 放射性炭素年代測定結果

試料名	出土遺構	種類	補正年代BP	δ13C(‰)	測定年代BP	Code No.
土器付着物1	SX1遺構	スス状炭化物	3,200±40	-24.10±0.91	3,190±30	IAAA-83063
土器付着物2	SX1遺構	スス状炭化物	3,320±30	-22.43±0.66	3,280±30	IAAA-83064

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第25表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	較正暦年年代 (cal)						相対比	Code No.
		σ	cal BC 1,499	- cal BC 1,438	cal BP 3,449	- 3,388	1.000		
土器付着物1	3,203±35	σ	cal BC 1,599	- cal BC 1,594	cal BP 3,549	- 3,544	0.004	IAAA-83063	
		2σ	cal BC 1,531	- cal BC 1,411	cal BP 3,481	- 3,361	0.996		
土器付着物2	3,320±34	σ	cal BC 1,634	- cal BC 1,599	cal BP 3,584	- 3,549	0.362	IAAA-60002	
		2σ	cal BC 1,594	- cal BC 1,531	cal BP 3,544	- 3,481	0.638		
			cal BC 1,687	- cal BC 1,517	cal BP 3,637	- 3,467	1.000		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算と比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 花粉分析

結果を第26表に示す。分析の結果、いずれの試料からも花粉化石は検出されなかった。わずかに試料番号2から、シダ類孢子が4個体検出されるのみである。

微粒炭量は、試料番号2で約6,700個/cc、試料番号3で約1,800個/cc、試料番号4で約9,400個/ccである。

第26表 花粉分析結果

種 類	SX1		
	2	3	4
シダ類孢子			
シダ類孢子	4	-	-
合 計			
木本花粉	0	0	0
草本花粉	0	0	0
シダ類孢子	4	0	0
総 計	4	0	0
1ccあたりの微粒炭量[個]	6700	1800	9400

- 1) 微粒炭量については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

(3) 微細物分析

結果を第27表に示す。SX1遺構の試料番号4は、草本のヒユ科の種子7個、炭化材0.04g(最大径3.5mm)、動物遺存体0.06g(最大径4mm)が検出された。炭集中(KN S12 炭化材サンプル)は、木本のタブノキ?の子葉163個、ヤンバルアカメガシワの種子240個+3cc、炭化材0.01g(最大径4mm)が検出された。さらに、試料200cc(384.83g)を追加分析し、径2mm以上の種実抽出に制限して他の分類群の検出を試みた結果、タブノキ?79個、ヤンバルアカメガシワ134個が検出された。

検出された種実は、ヒユ科を除いて全て炭化している。ヒユ科種子は、状態が良好で後代からの混入の可能性が高いため、考察からは除外している。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

第27表 微細物分析結果

分類群	部位	状態	SX1 試料番号4	炭集中 KN S12 炭化材サンプル	備 考
種実					
タブノキ?	子葉	炭化 半分 破片 半分未満		24 139	12 67
ヤンバルアカメガシワ	種子	炭化 完形 破片 径2mm以上 破片 径1-2mm		54 186 3cc	24 110
ヒユ科	種子	完形 破片 炭化	4 3		
炭化材			0.04g(3.5mm)	0.01g(4mm)	
動物遺存体			0.06g		
		分析量		200cc 388.49g	200cc* 384.83g
			1001.47g		*: 径2mm以上種実のみ抽出

<木本>

・タブノキ(*Persea thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Kostermans)? クスノキ科タブノキ属

子葉の破片が検出された。炭化しており黒色、長さ5-6mm、径6-7.5mm程度の横楕円体。破片は2枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦半分以下に割れている。頂部中心部は径3mm程度の円状にやや突出し、その中心に突起状の臍がある。子葉は硬く緻密で、表面はやや深く大きな不定形の凹点が密布し網目模様をなす。子葉合わせ目表面は平滑で、正中線上の頂部から1mm程度に長さ1.5mm、幅1mm程度の楕円-卵形の孔がある。前原遺跡のタブノキの子葉(高宮1999)、伊礼原遺跡のクスノキの子葉(大松・辻, 2001; 辻ほか, 2007)に似る。

・ヤンバルアカメガシワ(*Melanolepis multiglandulosa* (Blume) Rech.f. & Zoll.) トウダイグサ科ヤンバルアカメガシワ属

種子が検出された。炭化しており黒色、径4-5mm程度の至な球体。基部にはY字形の稜がある。種皮は厚く硬く、断面は櫛状で内側では湾曲する。表面に径不同で円形の深い窪みが散在する。

<草本>

・ヒユ科(Amaranthaceae)

種子が検出された。茶-黒褐色、径1-1.3mm程度の偏平な円盤状。縁は稜状で、基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

(4)土壌理化学分析

結果を第28表に示す。各試料の土性をみると、試料番号1はシルト分を主体とするシルト質壤土、他の3点は粘土分を主体とする重粘土に分類された。pHは、試料番号1は8のアルカリ性、他の3点も7~8の弱アルカリ性を示す。全リン酸、有機炭素および腐植については、試料番号4が他の3点に比べていずれも有意に高い値を示す。すなわち、全リン酸では、試料番号1~3の3~4mg/gに対して試料番号4は約7mg/g、有機炭素では、試料番号1~3の0.5~0.7%に対して試料番号4は約0.9%、腐植では、試料番号1~3の1%前後に対して試料番号4は約1.5%を示す。全窒素も僅かではあるが、試料番号4は他の3点(0.07~0.08%)に対して高い値(0.09%)を示す。C/N比をみると、試料番号2が最も低く7であり、試料番号3および4が最も高く9を示し、試料番号1はその中間の8である。なお、MI値は腐植含量が微量なため検出できなかった。

第28表 土壌理化学分析結果

遺構名	試料番号	土性	土色	pH (H ₂ O)	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	Melanic Index	
										MI値	腐植酸の型
SX1	1	SiCL	2.5Y4/3オリーブ褐	8.0	2.77	0.67	1.16	0.08	8	N.D.	-
	2	HC	10YR4/3にぶい黄褐	7.7	2.13	0.53	0.91	0.08	7	N.D.	-
	3	HC	7.5YR3/4暗褐	7.4	4.69	0.63	1.09	0.07	9	N.D.	-
	4	HC	7.5YR3/4暗褐	7.3	7.27	0.85	1.47	0.09	9	N.D.	-

(1) 土性: 土壌調査ハンドブック (ペドロジスト懇談会編, 1984) の野外土性による。

SiCL...シルト質壤土(粘土15~25%、シルト45~85%、砂0~40%)

HC...重粘土(粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%)

(2) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

(3) 腐植: 有機炭素量×1.724

(4) C/N: 有機炭素量/全窒素量

(5) N.D.: 検出限界以下

4. 考察

(1) SX1遺構について

遺構の床面とされる層位から出土した2点の土器の付着物が示した年代は、較正暦年代でca1BC 1,500年を挟む100年前後の年代である。小林編(2008)に掲載されている縄文土器様式編年表によれば、琉球列島の縄文土器も含めて、上記の年代は縄文時代後期後半に相当する。この結果のみにより、SX1遺構の年代観を決定するものではないが、今後、より詳細な年代の特定には、類例における測定事例の蓄積による検討が必要であろう。

覆土の分析では、遺構の床面の可能性のある層位や遺構の埋積土およびその上位の堆積層も含めて花粉化石は全く検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。詳細な堆積環境は不明であるが、わずかに産出するシダ類胞子の保存状態が悪いことを考慮すると、堆積後の経年変化により、分解・消失した可能性がある。

なお、土壌に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる(例えば安田, 1987; 山野井, 1996; 井上ほか, 2002)。今回の微粒炭分析結果をみると、試料番号4でやや少ない傾向にあるものの、いずれも数千個のオーダーであり、有意な微粒炭量の変化とは言えない。このことから、今回認められた微粒炭量の変化は、周辺での人為活動の変化ではなく、堆積物の成因(微粒炭が溜まりやすいか溜まりにくい)に起因すると思われる。

一方、土壌理化学分析では、遺構の床面の可能性のある層位について、全リン酸、有機炭素および腐植の各値が、上位の遺構埋積土や戦前の表土層に比べて高い値を示した。特に全リン酸においてその差は比較的顕著である。土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか, 1991)という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを越える場合が多い。試料番号4の全リン酸量は、上述した天然賦存量の範囲を超えていることから、リン酸の富化した土壌であると言える。土壌におけるリン酸成分の由来としては、動物および植物が主体となる。今回の分析では、試料番号4は有機炭素および腐植も比較的多かったことから、植物由来のリン酸の富化が想定されるが、含有量自体はそれほど高い値ではないことから、動物由来のリン酸の富化もあった可能性がある。現時点では、植物や動物がSX1遺構においてどのような形で関わりがあったかは知ることができないが、遺構の性格を考える上での基礎資料として捉えておきたい。

(2) 炭集中箇所について

微細物分析の結果、タブノキ?とヤンバルアカメガシワの炭化種実が多量に検出された。タブノキは、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)を構成する常緑高木であることから、本遺跡周辺の照葉樹林に由

来すると考えられる。ヤンバルアカメガシワは、沿岸部の林縁や二次林などに生育する落葉小高木であることから、海岸近くに位置する本遺跡周辺の林縁や二次林などに由来すると考えられる。

これらの種実、縄文時代晩期の炉跡の可能性が指摘されている炭集中遺構より、炭化した状態で多量出土したことから、火熱を受け炭化したこと、人に利用された可能性(少なくとも種実の集中は人為的である)のあることが推定される。

炭化に関して、遺構内で炭化したのか、別の場所で炭化した種実が遺構内に廃棄されたのかについては、現段階で判断することはできないため、燃料材の可能性のある炭化材の樹種同定や周辺遺跡の類似事例の蓄積を行い、総合的に検討することが今後の課題である。

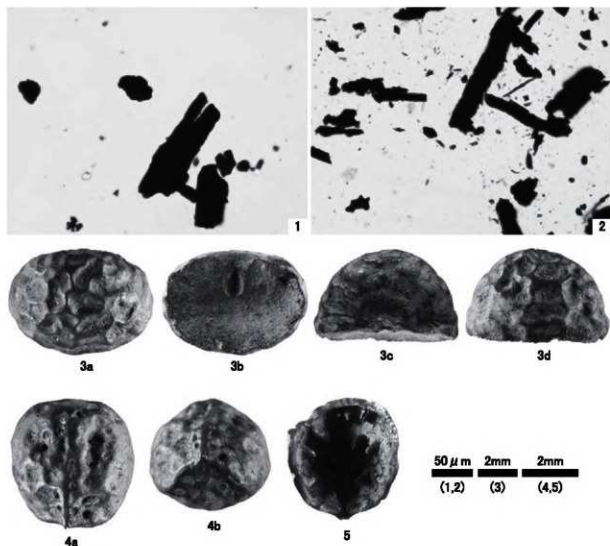
人の利用の可能性については、管見の限り、タブノキとヤンバルアカメガシワの種実が食用される民俗事例はない。一方、タブノキの子葉は、縄文時代後期並行期のうるま市古我地原貝塚、縄文時代晩期前半並行期の宮城高嶺遺跡(渡辺, 1989)、貝塚時代中期のうるま市苦増原遺跡(宮城, 1977)、弥生～平安時代並行期の読谷村高知口原貝塚(高宮, 2002)、貝塚時代後期(6～7世紀)の伊江村ナガラ原東貝塚(高宮, 2000, 2001, 2003)で出土事例があり、当時の食利用の可能性が指摘されている。ヤンバルアカメガシワは、出土種子から食利用を指摘した事例は殆どないが(例えば宮城, 1977(不明を弊社が図版より判断)、大松・辻, 1999; 2001、高宮, 1999、バリノ・サーヴェイ株式会社, 2006、辻ほか, 2007など)、縄文時代後期後半～晩期前半並行期の今帰仁村西長浜原遺跡(株式会社古環境研究所, 2006)で、多量のオキナワジイの炭化子葉と併伴する事例も確認されている(不明炭化種実を、弊社が図版よりヤンバルアカメガシワと判断した)。

以上のことから、本遺跡の炭集中遺構から出土したタブノキ、ヤンバルアカメガシワ種実、食料としての利用と食料以外の利用の両者の可能性があり、今後の事例蓄積による検討が必要と考えられる。

引用文献

- 天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36。
- Bowen, H. J. M., 1983, 環境無機化学-元素の循環と生化学-, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p。
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. 1980, 土壌の化学。岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 学会出版センター, 309p。
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法。博友社, 427p。
- 土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法。博友社, 354p。
- 本名 俊正・山本 定博, 1992, 腐植の簡易分析法。土壌構成成分解析法。博友社, 7-35。
- 井上 淳・吉川 周作・千々和 一豊, 2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について。日本第四紀学会講演要旨集, 32, 74-75。
- 株式会社古環境研究所, 2006, 西長浜原遺跡出土炭化物の放射性年代測定及び種実・材同定。沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第39集 西長浜原遺跡一範囲確認調査報告書一, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 221-228。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上 恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27。

- 小林達雄編, 2008, 小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器. 株式会社アム・プロモーション, 1322 p.
- 宮城 朝光, 1977, 苦増原遺跡出土の植物遺物. 具志川市文化財調査報告 第1集 苦増原遺跡発掘調査報告書, 苦増原遺跡発掘調査団編, 具志川市教育委員会, 77-81, 図版24.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- 大松 しのぶ・辻 誠一郎, 1999, 前原遺跡から産出した大型植物遺体群. 宜野座村乃文化財14集 前原遺跡一県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書一, 宜野座村教育委員会, 223-241.
- 大松 志伸・辻 誠一郎, 2001, 沖縄県北谷町伊礼原C遺跡の縄文時代前期相当期の大型植物遺体群. 植生史研究, 第10巻, 第1号, 17-32.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 新城下原第二遺跡(II地区下層)の自然科学分析. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 新城下原第二遺跡一キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告一, 沖縄県立埋蔵文化財センター, 311-328.
- ペドロジスト懇談会編, 1984, 土壌調査ハンドブック. 博友社, 156p.
- 高宮 広土, 1999, 栽培植物の探索. 宜野座村乃文化財14集 前原遺跡一県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書一, 宜野座村教育委員会, 259-275.
- 高宮 広土, 2000, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(1998年度). 考古学研究室報告 第35集, 熊本大学文学部考古学研究室, 55-62.
- 高宮 広土, 2001, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(1999年度). 考古学研究室報告 第36集, 熊本大学文学部考古学研究室, 50-57.
- 高宮 広土, 2002, 狩猟採集から農耕へ 沖縄でのケース. 先史狩猟採集文化研究の新しい視野, 国立民族学博物館調査報告, 33, 257-273.
- 高宮 広土, 2003, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(2002年度). 考古学研究室報告 第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 49-54.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 辻 誠一郎・大松しのぶ・辻 圭子, 2007, 伊礼原遺跡の植物遺体群. 北谷町教育委員会文化財調査報告書 第26集 伊礼原遺跡一伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業一, 沖縄県北谷町教育委員会, 433-444.
- 氏家 宏・兼子 尚知, 2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 産総研地質調査総合センター, 48p.
- 渡辺 誠, 1989, 宮城島高嶺遺跡出土の植物遺体. 沖縄県文化財調査報告書 第92集 宮城島遺跡分布調査報告, 沖縄県教育委員会, 217-218.
- 山野井 徹, 1996, 黒土の成因に関する地質学的検討. 地質学雑誌, 102, 526-544.
- 安田 喜憲, 1987, 文明は緑を食べる, 読売新聞社, 227p.



1. プレパラート内の状況(SX1;2)
2. プレパラート内の状況(SX1;4)
3. タブノキ? 子葉(炭集中遺構 KN S12 炭化材サンプル)
4. ヤンバルアカメガシワ 種子(炭集中遺構 KN S12 炭化材サンプル)
5. ヤンバルアカメガシワ 種子(炭集中遺構 KN S12 炭化材サンプル)

図版58 花粉分析プレパラート内の状況・種実遺体

第Ⅸ章 まとめ

鏡水名座原A遺跡は、平成18年度に那覇市教育委員会が実施した陸上自衛隊那覇駐屯地での庁舎建設工事に伴う事前の試掘調査により発見された。発掘調査は、平成20年度に実施している。

鏡水名座原A遺跡は標高25mの石灰岩台地（小緑台地）上に立地する遺跡である。遺物包含層は近代～戦後（Ⅰ～Ⅵ層）・縄文時代（Ⅶ～Ⅷ層）の大きく2期に分けられた。グスク土器なども若干確認したが、発掘区全体で24の攪乱箇所があり、その際に混入したのではないかと推測された。

近代～戦後の遺物包含層は調査区全体に見られ、近代以降に生産された中国産磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、現代遺物などが確認でき、小緑村や沖縄気象台時代に伴うものと考えられた。

縄文時代相当期の層からは堅穴住居跡とともに多数の土器片や石器が確認できた。これらの出土遺物から本遺跡は高宮暫定編年前IV期（約3500～3000年前）に相当する集落跡と考えられた。同層は東南に広がっているため、さらに調査区以南にも良好な状態で保存されているものと考えられる。縄文時代以降近代までの遺構や遺物包含層は確認できなかったが、両者の層理面が明瞭であったため沖縄気象台に伴う整備で縄文時代相当期の層まで整地されたのではないかと推測された。

以下、高宮暫定編年前IV期に伴う遺構・遺物について若干のまとめを行う。

遺構について 堅穴住居跡（6基）やそれに伴う炉跡（3基）大型方形遺構（1基）土坑（3基）屋外炉（1基）ニービ集中箇所等が検出できた。調査区は遺跡の一部を調査したにすぎず、全容をつかむことは難しいが、ピットの状態から同一箇所での建て替えが行われたと推測された。また、堅穴住居としては大型の方形遺構底面近くからは加工されたジュゴンの肋骨片が出土していることから、あるいはなんらかの宗教的な場が存在したのかもしれない。

遺物について 本遺跡の主体を占める土器群は、第Ⅱ群土器（点刻線文系土器群：萩堂式土器・大山式土器）（高宮暫定編年前IV期中葉）から、第Ⅲ群土器の1類（肥厚口縁系土器群：室川式土器・室川上層式土器）（高宮暫定編年前IV期後葉～前V期前葉）と推察される。

北西方向にある箕隅原A遺跡からは、高宮暫定編年前IV期前葉（縄文時代後期相当）の籠目文系土器群及び点刻線文系土器群の伊波式土器が出土している。その近くの箕隅原C遺跡からは、高宮暫定編年前Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期（縄文時代早期・前期・中期）、後期（弥生時代及び古墳時代～平安時代）の遺物が出土している。この二遺跡からは、当遺跡の土器と同時期の遺物は出土しておらず、いずれも時代を前後する形で隣接している。

また、北西から南東方向にかけて馬の背状に延びる丘陵の南東に、ガジャンピラ丘陵遺跡が立地している。高宮暫定編年前IV期後葉～前V期前葉（縄文時代後期～晩期相当）の室川式土器及び室川上層式土器が出土している。ガジャンピラ丘陵遺跡の洞穴地区から出土した高宮暫定編年前IV期後葉の土器（室川式土器）は、全体的に、胎土に石灰質砂粒が多量に混入され残存しており、器厚が1cm近く、焼成も堅緻である。一方、本遺跡における室川式土器は、石灰質砂粒を含むものは少なく、器厚は若干薄く感じられる。僅か500m程の距離と立地により、同系統の土器の胎土や器厚に変化が窺える。

当遺跡の遺構から完品に近い土器（Na9・Na21・Na44）が出土した。SI4から出土したNa9は、縦位区画文を五つ配置し、第2・第4・第6文様帯に鋸歯文を施す。従来、萩堂式土器の縦位区画文は四つという認識であったが、今回の資料で新しい知見が得られた。

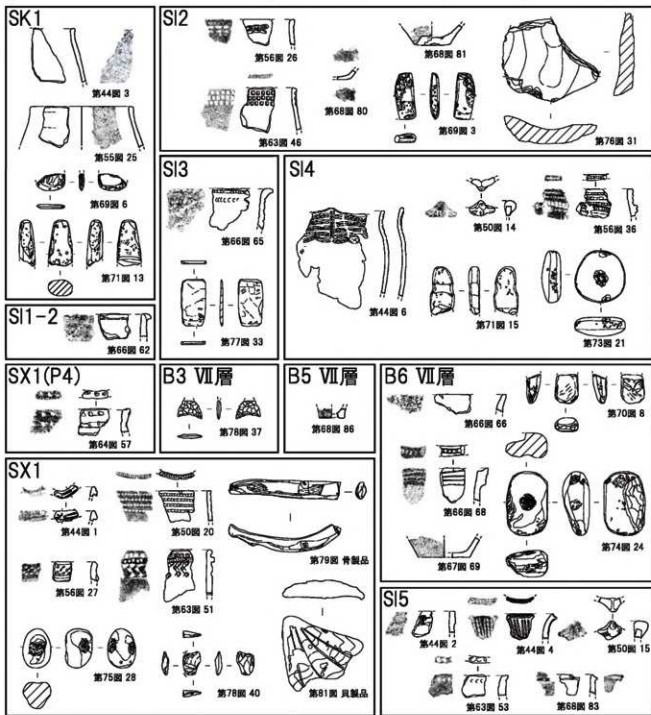
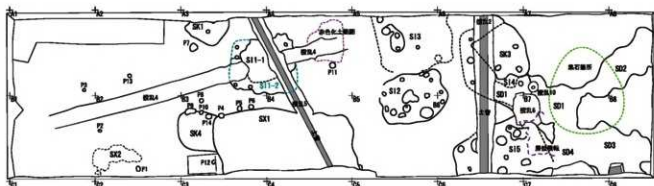
№21及び№44は、SK 3の最下部より出土した。両者は施文部位や器形に類似点を持つが、施文具や胎土に差異がみられる。またSK 3からは、第Ⅱ群土器の2c類・2d類（凸帯文土器）の出土量が多く、第Ⅱ群土器の組成を考える上でも重要な資料となった。

石器として扱える資料は280点近く出土した。磨製石斧及び敲石・磨石が主体で、およそ半数を占める。他に石皿、熱田原型石器、石鏃等が出土している。それらの材質としては緑色岩・緑色片岩・緑色千枚岩・砂岩・変輝緑岩・片状砂岩・変質安山岩・頁岩・チャート・石英があった。そのうち緑色岩と砂岩が全体のほぼ25%ずつを占める。これらの石材以外に粘板岩・黒色千枚岩・玢岩・砂岩（ニービ）が鑑定できた。当遺跡は石灰岩台地上にあり、遺跡周辺から産出される石質ではないため、沖縄本島中北部および周辺離島から入手したのだと考えられる。

骨製品は、加工されたジュゴンの肋骨片が2点確認できた。貝製品はシャゴウ製皿状製品とハイガイ製有孔貝製品である。

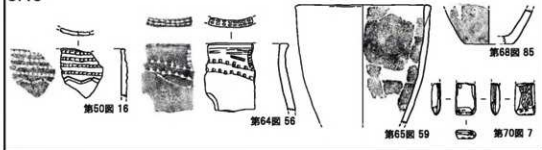
自然遺物では、獣骨が少量出土した。確認できたのはイノシシ・ジュゴン・イヌ?である。魚骨及び貝類遺殻は出土しなかった。また、SI 2の炉跡からタブノキ?とヤンバルアカメガシワの炭化種実が多量に出土した。第Ⅷ章でも述べられているように、人為的に火熱を受けていることは確実であるが、その利用方法について確証は得られなかった。

今回は情報提供を主な目的として調査報告書を作成してきた。現地調査では限られた発掘調査範囲であったことに加え予想以上に出土遺物が多かったことから、時間的制約もあり遺跡の全様を把握するのは難しかった。資料整理の中で再確認できた部分もあるが、十分な検討がなされたとは言えない。前述したように本遺跡周辺の鏡水地区（那覇空港周辺）及び小禄台地には、箕隅原A遺跡、箕隅原C遺跡、ガジャンピラ丘陵遺跡等の縄文時代相当期の遺跡が分布している。今後はそれらの遺跡や類似する遺跡との比較検討を行うことでより一層の充実を目指したい。



第88圖 出土遺物一覽

SK3



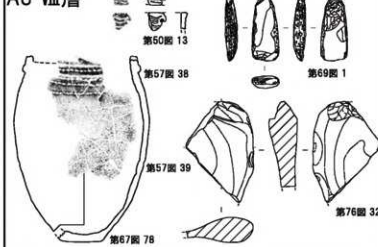
A7 VII層



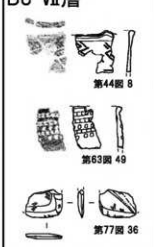
A8 VII層



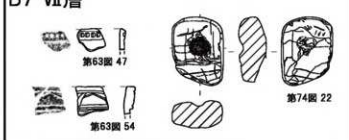
A8 VIII層



B8 VII層



B7 VII層



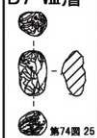
B8 VIII層



B7 層位橫轉



B7 VIII層



試掘坑No.4 5層



＜参考文献＞

- 伊藤慎二 2000『琉球縄文文化の基礎的研究』未完成考古学叢書② 株式会社ミューゼ
- 伊藤慎二 2008「琉球縄文土器（前期）」『総覧 縄文土器』：814-821頁、アム・プロモーション
- 沖縄県伊是名村伊是名貝塚学術調査団2001『伊是名貝塚-沖縄県伊是名貝塚の調査と研究-』勉誠出版
- 沖縄県立埋蔵文化財センター『箕原原A遺跡 - 発掘調査現地説明会資料』2008年11月9日
- 琉球大学法文学部「フェンサ貝塚調査概報」（琉球関係考古学文献目録補遺 三）
『琉球大学法文学部紀要 社会篇』
- 伊江村教育委員会 1980『浜崎貝塚』
- 伊是名村教育委員会 1977『具志川島遺跡群 第一次発掘調査報告書』
- 伊是名村教育委員会 1980『伊是名ウフジカ遺跡』
- 伊是名村教育委員会 1993『具志川島遺跡群』
- 糸満市教育委員会 2003『大度貝塚ほか発掘調査報告』
- 伊平屋村教育委員会 1981『久里原貝塚』
- 伊平屋村教育委員会 1986『東原貝塚ほか発掘調査報告』
- 沖縄県・読谷村教育委員会 1990『吹出原遺跡』
- 沖縄県教育委員会 1978『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』
- 沖縄県教育委員会 1981『古座間味 第1次範囲確認調査概報』
- 沖縄県教育委員会 1981『伊武部貝塚発掘調査速報』
- 沖縄県教育委員会 1982『古座間味 範囲確認調査報告書』
- 沖縄県教育委員会 1983『伊武部貝塚発掘調査報告書 国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査』
- 沖縄県教育委員会 1984『シヌグ堂遺跡発掘調査概報』
- 沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡-第1・2・3次発掘調査報告-』
- 沖縄県教育委員会 1986『地荒原遺跡-県道10号改良工事に伴う発掘調査報告-』
- 沖縄県教育委員会 1987『古我地原貝塚
- 沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』
- 沖縄県教育委員会 1989『宇佐浜遺跡 発掘調査報告』
- 沖縄県教育委員会 1989『宮城島遺跡分布調査報告』
- 沖縄県教育委員会 1996『平敷屋トウバル遺跡』
- 沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』
- 沖縄市教育委員会 1982『古座間味貝塚 範囲確認調査』
- 沖縄市教育委員会 1995『古代の沖縄市』
- 沖縄市教育委員会 1997『室川貝塚-沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書-』
- 沖縄市教育委員会 2000『馬上原遺跡-室川貝塚崖上地区-』
- 恩納村教育委員会 1977『仲泊遺跡 1975・1976年度発掘調査報告書』
- 恩納村教育委員会 1978『仲泊遺跡 1975・1977年度発掘調査報告書』
- 恩納村教育委員会 1979『仲泊遺跡 1975・1978年度発掘調査報告書』

- 宜野座村教育委員会 1999『前原遺跡－県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書－』
- 具志川市教育委員会 1986『地荒原貝塚－個人住宅建築に係る発掘調査報告－』
- 知念村教育委員会 1994『下上原貝塚』
- 知念村教育委員会 2002『熱田原貝塚 発掘調査報告書』
- 豊見城市教育委員会 2003『宜保アグリヌ御嶽－宜保土地区画整理事業埋蔵文化財調査業務－』
- 今帰仁村教育委員会 1977『渡喜仁浜原貝塚』
- 今帰仁村教育委員会 2005『古宇利原 A 遺跡－古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』
- 名護市教育委員会 2002『部瀬名南遺跡－市道・部瀬名線道路改良事業に伴う緊急発掘調査報告－』
- 那覇市教育委員会 1983『ガジャンピラ丘陵遺跡』
- 那覇市教育委員会 1986『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』
- 那覇市教育委員会 2009『垣花村跡』
- 那覇市教育委員会 2010『鏡水土砂場原 A 遺跡』
- 西原町教育委員会 1983『我謝遺跡－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書－』
- 本部町教育委員会 1988『知場塚原遺跡』
- 本部町教育委員会 1991『本部町の遺跡－詳細分布調査報告書－』
- 宜野湾市教育委員会 2002『宇地泊兼久原第三遺跡
－宇地泊第二地区区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書[1]－』

報 告 書 抄 録

ふりがな	かがんじ なざ ばる えー い せき
書 名	鏡水名座原 A 遺跡
副 書 名	陸上自衛隊那覇駐屯地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告
巻 次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 85 集
編 著 者 名	伊波 かおり 當銘 由嗣 北條 真子 パリノ・サーヴェイ株式会社
編 集 機 関	那覇市教育委員会 文化財課
所 在 地	〒 900-8553 沖縄県那覇市前島3-25-1 TEL. 098-891-3501
発 行 年 月 日	2011 (平成 23) 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ° °	東 経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かがんじ なざ ばる えー い せき 鏡水名座原 A 遺跡	な ば り し 那覇市 おきみ だ じ 大字 鏡水 こきみ だ じ 小字 名座原	47201		26 度 12 分 25 秒	127 度 39 分 44 秒	2008 9 ～ 2009 2	約 225㎡	陸上自衛隊那覇駐屯地庁舎建設工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鏡水名座原 A 遺跡	集 落 跡	先 史 時 代 近 代	竪穴住居跡、炉跡、 大型方形遺構、土 坑、野外炉等 舗装版を伴う旧地 表面	土器・石器・石材・ 骨製品・貝製品・ 貝類遺殻・獣骨・ 中国産陶磁器・本 土産陶磁器・沖縄 産施釉陶器・沖縄 産無釉陶器・礫石・ 円盤状製品	縄文時代相当期 の層は東南に広 がっており、さ らに調査区以南 にも良好な状態 で保存されてい るものと考えら れる。

要 約	<p>本遺跡は、平成19年度に実施した陸上自衛隊那覇駐屯地での庁舎建設工事に伴う事前の試掘調査により発見された。近年、本遺跡の周辺地域では、埋藏文化財の発見が増加する傾向にある。試掘調査の結果、庁舎建設予定地には鏡水名座原 A 遺跡が存在することが判明したため、沖縄防衛局と建設箇所の変更に関する調整を行い、遺跡にかかる部分のみ発掘調査を行い記録保存することとなった。発掘調査は平成20年9月より30×2.5mの範囲で実施した。堆積層は縄文時代・近代・戦後の三時期に大きく分けられ、近代及び戦後の堆積層は調査区全体に見られた。同層からは、舗装版を伴う旧地表面を検出し、覆土には、概ね近代以降のものが多く含まれていた。当該地は沖縄本土復帰以前は米軍施設として利用され、戦前には沖縄気象台が設置されていた。縄文時代の層では、土器片・石器片・石材・骨製品等が出土している。実際に出土した土器片は3000点を越し、荻堂式を主体に空川上層式土器までが確認できた。なかでも荻堂式のバリエーションが豊富である。石器は磨製石斧及び磨石・敲石が主体で石皿、石鏃等が出土している。遺構は竪穴住居、炉跡、大型方形遺構、土坑、野外炉等が確認できた。自然科学分析結果として土器付着物による放射性炭素年代測定では3200±40BPと3320±30BPを示した。土壌理化学分析では床面上で全リン酸、有機炭素および腐食の各値が高い値を示したことから、人為的な影響があった事を示している。微細物分析の結果、タブノキ?とヤンバルアカメガシワの炭化糧実が多量に検出された。</p>
-----	---

那覇市文化財調査報告書 第 85 集

鏡水名座原 A 遺跡

— 陸上自衛隊那覇駐屯地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —

発行 2011 (平成23) 年 3 月 30 日
那覇市教育委員会
〒900-8553 沖縄県那覇市前島3-25-1

編集 那覇市教育委員会文化財課
TEL 098-891-3501
FAX 098-891-3523

印刷 (株) 東洋企画印刷
〒900-0024 沖縄県那覇市古波羅3-1-18
TEL 098-995-4444
FAX 098-995-4448

